
ダッシュ！！

踏鞴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダツシュ！！

【Nコード】

N85310

【作者名】

踏鞴

【あらすじ】

「魔法薬学部に進学する！」そう決めたのは良かったんだけど、女の子を助けた（？）ら面倒な厄介ごとが次々に来るし、なんか知らないうちに魔法バトルになってるし、って本当にこんなんで進学できる！？

始まりの歴史

1795年 フランスの数学者、オーギュスタン・ヴィクトル・ポアソンにより、学会で46種の“魔法”が発表される。それにより、他の学者達も魔法の研究にのりだす。

1800年 オーギュスタン・ヴィクトル・ポアソンを会長とする、魔法連盟が発足。当初の人数は16名。本部はヴェルサイユ。

1814年 オーギュスタン・ヴィクトル・ポアソン死去。後任は副会長であったジョセフが勤める。

1866年 世界で初めての魔法学校、“ノースデレス魔法学校”がイギリスのロンドンにできる。

1869年 魔法連盟の本部をロンドンに移す。この時点で支部はロンドン本部を含めると12。

1872年 日本で初めての魔法使い、横溝誠一郎が連盟に加入する。

1895年 世界で初めての魔法による殺人が起きる。犯人はジェニー・ラミソン。死刑にされる。

1896年 “禁止魔法”が魔法連盟により発表される。数は269個。

1900年 世界で魔法使いが50万人を超える。

1905年 日本で初めての魔法学校“私立日本魔法教育学校”ができる。学科は護衛学部、魔法薬学部、魔法発展学部の三つ。大学と同じ扱い。学長は晴刈藤次。

1932年 ドイツ、アメリカ、イギリスで魔法使い連続殺人事件が起きる。日本でも同じような事件が発生。犯人は見つからず。

1956年 世界で魔法使いが100万人を超える。日本でも6万人超。支部の数は76となる。

1960年 国連により、魔法及び魔法使い取締り法が制定される。これにより、魔法使いの不满が高まる。

1968年 ニューヨークにて魔法使いの一団のテロが起きる。死者508名、負傷者3219名と大規模なものとなった。主犯は日本人、鯉？邸。他の魔法使いにより捕まり、その場で殺される。

1968年 “禁止魔法”に新たに25科目が追加される。

1988年 魔法及び魔法使い取締法が一部改正。賛否両論。

1992年 予言者、デスニータがノストラダムスの予言を肯定。

1999年に世界は滅ぶと予言した。世界は混乱状態に。

1999年 予言外れる。魔法使いの信用が落ちる。同年にデスニータ自殺。

2002年 日本に魔法の専門学校ができる。

2002年 魔法連盟会長、エンルスト・グラスマンが日本を訪れ

始まりの歴史（後書き）

比較的ゆっくりやっていきます。よろしく願いします。

次回からは物語が進みます。

【第一話】 カップラーメンが作れない

舞台は学校、どうやら今日は満月のようで、月明かりが綺麗だ。俺は真夜中に学校に来ていた。

そして偶然にも同じ学校の女の子と出会ってしまった。普通なら学校もしまってる筈の時間帯、もうここには俺と目の前にいる女の子しかない。

校庭で二人、時間を忘れるように見詰め合っている。

ああ、これで殺されそうにさえなっ
てなければどれほど良かった
ことか。

俺はすぐ目の前に立っている女の子を見ながらそう思った。
今日までの出来事が走馬灯のように頭に流れていく。

五月。

桜の花も散り、段々と温かくなっていたこの季節。お父さん、お母さんはどうお過ごしでしょうか？

「たっ
っ
だいまー」

そんな感じで送りもしない親への手紙の内容を心の中で考えていた。なんてことはない、家に帰るまでの暇潰しだ。

そして帰ってきてしまったからにはこの暇つぶしも終了なわけで、

俺は早速夕飯を作ろうと台所へと向かう。しかしまあ俺は料理経験など皆無なわけで作るといえばもっぱらカップラーメンぐらいなのだが。え？それは料理って言わないって？うん、知ってる。

さあ、今日は何味にしようかなー？と戸棚を開ける。ここに来るまでに照明を点けようとしたが、なぜかうんともすんとも言わなかった。ああ、電球が切れたか電気が止められたかどっちかだろう。まあ後者のほうが圧倒的に確立は高いと思うけど。

仕方が無いので持っていたライターの火を頼りに前へ進む。いや、まだそこまで暗いわけじゃないんだけど、一応ね？

確か昨日食ったラーメンが塩で、一昨日が味噌で三日前が塩で四日前が塩で五日前が塩で…って俺って塩ばかりか！そんなに好きでもないんだけど！

よし、今日は塩味は絶対に食べない。高血圧になりたくないし。あ、カップラーメン食べてる時点で結構アウトか。

「えーと、チョコレート味…これはいいや。いくらなんでもこんな冒険したくない。キャベツ味…うん、野菜嫌いだからこれもいいや。というかおいしいのか？ココア味…なんでさつきから砂糖をふんだんに使ってるカップラーメンばかりなんだよ。流行ってるのかな？」

だめだ。まともなラーメンが無い。というか塩すら無い。おっと、ここでピンク色のパッケージ発見。なんだこれ？春限定って書いてある。桜味とかな？だったらまともでいいな。

『あの頃の恋の味』

「一体どんな味なんだよ！」

少し気になる。でも俺恋とかしたこと無いからわかんないだろうな。あれ？一個だけ落ちてるのがあった。これはなんだろう？

「塩のおおおおお！！！」

まさか君に出会えるのがこんなに嬉しいとは思わなかった！さっきは「今日は食べない」とか言っでごめんね？精一杯作るから！お湯入れるだけだけど！

「うるせーぞ！」

「あ、すみません」

ボロアパートだから隣のお宅まで声が聞こえてたみたい。

それでもめげずに上機嫌な足取りでやかんに水を入れ、ガスコンロへ向かう。

かち。

あれ？おかしいな？点かない。もういつちよ。

かち。

ガスも止められたー！

そういえばお金払ってくださいって手紙来てたようない！ちくしよう！せつかく塩味を見つけたのに！そのまま食えってか？それとも水を入れて食えってか？無理だわ！そんなもんラーメンにな

るか！

「はあ…仕方ない。犯罪だけどいいや。ばれないし」

そう言いながら、俺は机に向かって鉛筆を使い、魔法式を書き始める。一応は書き慣れてる部類に入るこの魔法式だけど、それでもぐだぐだ長く書かないといけないので最低でも2分はかかる。ああ、これならガス代ちゃんと払っとくんだった。この間ゲーセン行ってほとんどお金使っちゃったんだけど。

「よっし、燃える」

書き終わったら後は言霊を入れるだけ。本当はもつと長々言わないといけないんだけどあんまり強い火が出てこられると困るから今回は意思を伝えるだけ。いや、今回も何も基本は魔法使わないでいきっていくから関係無いんだけど。

いい感じに炎が安定してきたらやかんを乗せる。後は待つだけですね。

さっきも言ったように魔法使い以外が魔法を使うのは立派な犯罪だ。魔法使いになるには魔法学校をでて、魔法連盟の試験をクリアしないとならない。俺の将来の第一志望である魔法薬剤師も魔法使いで無いとなれないから俺は魔法学校を目指している。

本当なら、魔法学校に入るまでは魔法式なんて見ることは無い筈なんだけど、俺はじいちゃんが魔法使いだっだからじいちゃんに少しだけ教えてもらったのさ。もちろん犯罪、俺もじいちゃんも。まあじいちゃんはもう死んでるから問題ないとして、俺はとりあえず人前で魔法を使わないようにしないとイケない。

でもあれ、ぐだぐだ長いこと書いてあるから覚えるの大変だったんだよなー。俺が小学生の頃、必死に空き地で練習したっけ…。でもあれめちゃくちゃ危ないよな。誰かに見られて通報されたら俺もじいちゃんも今頃刑務所じゃん。

で、魔法薬剤師を目指そうと思ったのが去年の夏。収入がめっちゃ良いのを知ったから。俺、魔法使えるし、即戦力じゃん！ と、思ったのもつかの間、そもそも俺が知ってる魔法はほとんど役に立たないしなによりそれをアピールのしようがない。「小学校の頃から魔法を使えました」なんて面接で言ったら即通報&逮捕だ。

それでも俺はまだ諦めてない。成績的には厳しいけど、目指せ！
魔法薬学部だ！

おっと、そんなこと思ってる間に沸騰したみたい。俺はやかんを持ち上げて。って、机が焦げてるー！炎の調節間違えた！どつりでいつもより速いと思った！机これ一つしかないのに！新しいの買い換えるのにどのぐらいかかるんだ！？

まあ、まだ使えそうだし良いや。というか回復魔法も俺のレパトリーにあつたよな。これにも使えるかな？…駄目だ。それしようと思ったら30分ぐらいかかる。面倒だ。

さて、お湯を入れて、後は3分待つだけ。さっきから待つてばかりだ。そうだ、今のうちに明日の授業でやるところ目を通しておこう。俺って真面目。

そういえば電気止められたから暗くてよく見えないな。流石に暗くなつて来たし。ライターじゃたりん。

さっき炎を点けていたとき明るかったのを思い出し、魔法式を書

き始める。今度は炎を宙に浮かせるようにするから、さつきよりも複雑。さらに2分、合計で4分かかった。ってカツプラーメン！これじゃあ本末転倒！

まあおいしく頂きました。やっぱり塩は良いね。おいしい。

「ない、ない、……やっぱりない。学校か……」

さて問題です。何が無いと思う？

え？ さつきの授業の道具だって？ はいざーんねーん。ププツ。あ、ここまでのやり取りで俺の会話にイラツと来た人、正常です。

正解は週間少年的な漫画。又貸しするから今日中に読み終わらしたかった。仕方ない。取りに学校へ戻ろう。

因みにこのボロアパートから我らの通う学校までは徒歩10分。他是最悪だけどそこだけは良いアパートなのだ。あ、本当にそれ以外は最悪だよ。ここ重要。

ということまで借りた漫画を読むためにいざ学校へ。辺りはもうすっかり暗くなってもうやめようかなとも思ったけど、先週のあの気になる展開を思い出し、力を振り縛ってチャリに跨る。力を振り絞るところじゃないね。

「おいコラ北路！」

む、そんな風に僕の名前を呼ぶのは誰だ？ 女子は基本「蛇又くん」だし男子は基本「黒子」か「ホクロ」だ（書いてみると同じように思えるかもしれないが、微妙にニュアンスが違う）。人の名前をなんだと思っただけでやがる。でもまだ「ホクロ」と呼ぶ奴は許せる。

問題は「黒子」と書いて、「くろこ」と呼ぶ奴だ。それだと俺がまるで超電磁的な中学生の後輩みたいじゃないか！俺はあそこまで変態じゃない！…多少は変態かも知れないが。いや、それでも一般的な高校生の枠に収まるはずだ！多分！

「おい！聞いてんのか！？」

あ、この声のこと忘れてた。振り向けば、まあやつぱりといいますか、禿頭の大家がいた。これで40代とかありえねえ。

「お前なんか失礼なこと考えてなかったか？」

おっと、ばれてる。顔に出やすいのかな？俺、素直だから。

そんなことよりこの大家が話しかけてきたということは大体理由は分かってる。俺はチャリのペダルに力をいれた。

「北路！今月の家賃まだ払って…ってまてや！わしがまだ話してるだろうが！」

「俺、急ぎの用なんで！」

まあ、別に急いでは無いけど。

そんなことより一人称が「わし」かよ。どこまでも爺さんだな。人生これからなんだからもっと若々しく生きる。

怒鳴っている大家の声をBGMに俺は夜道を自転車走り出す。帰ってこられるかなあ？

【第二話】 夜の学校って…こわ！

「なんだこれ…」

そこにはいつもの見慣れた校舎があった。だがしかし今は真夜中。自他共に認める小心者である俺にとってはそんなもの遊園地のお化け屋敷より怖い。母ちゃんよりも怖い。注射よりは…まあ、そんな感じで俺は校門の前に立ち尽くしている。

やべーよこれ。マジで怖いよ。遊園地の…ってこれはもうやったか。なんにせよ帰りたい。早く帰って続きを読みたい。

そう思っ、勇気を出して校舎に入っていく。あ、もちろんここは鍵開けの魔法つかいましたよ。ただ、魔法式思い出せなくて3分で終わるところを、15分かかったけど。

「よっし、やっと開いた。ってなんじゃこりゃ」

俺の手には名詞ぐらいのサイズのお札。ペタっとはるやつを想像ください。今、扉に貼ってあったのをひっぺがした。なんか変な文字がいっぱい書いてある。

ああ、陰穩呪か。

ちょっと待って、今思い出すから。

陰穩呪。魔法式そのものや、魔法の気配を隠せる優れもの。結構効果の範囲が広くて、大体この型だと半径20メートルから30メートルぐらい。もちろん一枚で使うことは少ないから本当にここで魔法を隠そうとしてる奴がいるならもっとあるはず。あ、この名前の由来は知らん。

でも、効果が効いてるならこの陰穩呪も透明になってるはずなん

だけどな。効果が切れたか、本人が意図的にこの時間に消してるか、今はつつけたばっかりか。個人的には最後の期待。

まあなんにせよ、俺には関係ないだろ。蛇又先生の授業はここまです。さあ、さっさと行って漫画をとろう。

うつつ、校舎が暗いよー。こんなんじゃ歌でも歌わないとやっていけないよ。

「うつつ……お化けなんて嘘さ……………」

やべえ。歌詞がこれ以上思い出せない。

「ルルルル、ルルル」

鼻歌で誤魔化す俺。誰がいるわけでもないのに、周りが気になる。というか懐中電灯ぐらい持って来るんだった。暗くて恐……じゃなくて、何も見えないよ。あ、今更誤魔化しても遅いか。

何とか教室到着。頑張った俺。誰か褒めて。

そして自分の机から漫画を取り出す。漫画の主人公が俺を見つめている。まるで頑張った俺を褒めてるかのよう。いやあ、褒めるなって。あ、ウザい？ わかった。自重する。

ふう、ミッションコンプリート。後は帰るだけ。

ズゴゴゴゴゴ！

魔法陣を作ってる。お化けじゃないよね？ちゃんと足あるよね？
ああ良かった。

ウチの制服着てるから多分ウチの生徒だろ。さっきの音はあの女の子が白線引き（名前がわからん。あの、小学校で使ってた石灰中に入れるやつ）とともに転んだ音だろう。女の子の制服の一部が白い。（ここから校庭までは結構近い。そして俺の視力は両目とも2.0！ 確か！）

うーん。あの魔法陣なんだったかなあ？多分じいちゃんに教えられたと思うんだけど…。

あ、動きが止まった。どうやら作業が終わったみたいだ。

って作業終わったの？ あれ、やばいんじゃないの？だって女子高生だぜ？ 絶対魔法使いじゃないからあいつのやつてることは犯罪だぜ？ しかもあんなドでかい魔法陣。何かは忘れたけどなんかやばそうだし。ここは止めといたほうが無難か。

いや、でもなあ、もしあいつが女子高生のコスプレと夜間の学校侵入が趣味の普通の魔法使いだったらなあ、…ってその時点で普通じゃないや。というかもしそうだとしたらそんな奴と関わりたくない。

というか魔法使いでも許可なくあんなすごいものを作るのは犯罪だし。

そうこうしているうちにその人がそろそろ発動させるようで、言葉を送り出した。というか呪文を唱えだした。

幸い、あっちには俺はまだ気づかれてないようだ。俺は窓の下の壁の部分に隠れるように座る。そして、窓を少し開けて声を聞こうとする。さっきも言ったけど、その女子高生からこの教室までは結

構近いのだ。

「満月よ……」

はて、満月？ うーん…。

「思い出したー！！」

「きゃあ！」

俺は窓から身を乗り出して、呪文の詠唱を阻止する。

おっと、中断させちゃってごめんね？でもそれ実行されるとやばいから。あと、びっくりさせてごめんなさい。

でもおかげで思い出した。それは駄目だ。

「1798年スイスの学者“月の使い手”ターンの開発した制限魔法、範囲内服従のその4“広開閻魔”！魔法陣からの一定の範囲内に一步でも足を踏み入れたものは次の満月の夜までその絶対服従の効果が消えないとされている禁止魔法だ！しかもその発動した日が満月ならば、本人の実力にも寄るがその効果は1.87倍から2.13倍に跳ね上がる！そして今日！見事なまでに満月じゃないか！一体どういうつもりだお前は！」

その女の子はいきなりの俺の登場に驚いたようだが、やがて落ち着きを取り戻して言う。

「あんたも魔法、知ってんの？まあ、私もそこまで詳しくは無かったけれども。で、何の用？邪魔する気？」

月明かりに照らされてその女の子の顔は結構恐い。でもそんな

じゃ俺はくじけない！ 頑張れ俺！

俺は自信をもって答える。

「当たり前だ」

【第三話】 想定外って懐かしい

「とっつ」

窓からその女の居る校庭へ飛び降りる。まあ、2年生の教室は一階だからこんな声出したところでなんか痛い人に思われるのが関の山。でも俺は気にしない。

「……………」

ほら、やっぱり変な目で見られた。あ、やっぱりちょっと傷ついた。

にしてもこの子間近で見るとちっちゃいなー。ホントに高校生？ただ制服着てるだけじゃねえの？まあ少なくとも同学年や年上じゃないだろ。じゃあここは年上の威厳を見せながら説得に限るね。

「おい、君。駄目じゃないかこんなこと……………」

「黙れ」

「……………」

思わず黙っちゃったよ！俺って本当に気が弱いよね！相手は年下なのに！

「別にあんたの説教なんて聞きたくないわよ。ちょっとあんた」

「はいっ」

おいしい俺えええ！何敬語使ってるの！？逆でしょうが！

「ここで私を止めるか、このまま黙って明日も楽しく学校に来るか

選びなさい。返答次第ではあんたの首、飛ぶわよ」

怖いこというな！。というか魔法陣あんだから明日からの学校生活全然楽しくねえじゃん。学校入ったら最後、もうあんたの言うこと意外は考えられなくなっちゃうよ。

うーむ、なんかこの言い回しだとこいつに恋しちゃってるみたいで嫌だな。

「まあ、あれだ。こんなことは止めなさい。故郷のおっかさんが泣いてるぞ。ほら、今投降すれば見逃してやつから」

一昔前の刑事風に俺は言う。故郷も何もきつとお母さんは家にいるだろう。

「……そう、…邪魔するのね？」

あれー？ おっかしいな？ 出来るだけ刺激しないように言っただつもりだつただけど敵意まるだしじゃん。まあこの女の子が襲い掛かってきたとしても俺の方が強そうだし大丈夫か。この娘ちっこいし。

「じゃあ仕方ないわね」

そう言つて、懐から真っ白な日本刀を抜く。

つてええええええええ！？ 日本刀？なんでこんな女の子が持つてんの！？ しかも結構立派な奴だし！

「ちよつと！ なにそれえ！？ 反則だろ！ ちよ、タイム！」

「問答無用！」

くそー！ 前話の最後格好良くきめたと思ったのに！ というか首が飛ぶってガチだったんだ！ 確かにそれだと首が飛ぶね！

刀女（面倒だから名称これで統一する）が刀を振りかぶる。
で、振り下ろす。誰も居ないところに。

あれ？ もしかしてものっそい目え悪いとか？それとも予想に反して重かったとか？なににせよ逃げるチャンス！ でも女の子なんだから「おらああああー！」は無いと思うよ！

が、そうは行かなかった。

斬撃らしき風の塊がそのまま飛んできた。誰に？ もちろん俺に向かって。

「魔器かいいいいい！！」

その斬撃は半透明の三日月型。幅は1.5mほど。威力は、……俺が避けた後、その後ろにあった壁に穴が開くくらい。

「おiiiiiiiiい！！避けなかったら俺死んでただろ！」

「だから殺すっていっただろ」

そうだけど！ まさか本当にやるとは思わないじゃない！ こないたいけな少女が刀振り回すなんて思わないじゃない！

「……つーかなんで魔器とかもってるかなあ？あんだ、どれだけ犯罪に手え染めりゃあ気が済むのさ」

因みに魔器とは。

魔法的な細工が施された器具のことである。魔法を施すことによつて、魔法式を書くことと呪文の詠唱を省くことが出来る。ただし、呪文の詠唱はやらなければいけない場合もある。体力と精神力の疲労も比較的少ない。一般には武器を指すが、武器以外でも魔法さえかかっていれば魔器というよ。

刀女の刀は多分、切断魔法斥舞風月かな？これ系で一番お手軽だし。ただ、殺傷能力は充分だけど。

「っさい」

「うおおおおお！危ねええええ！」

こんなことは想定外だ！ああ、もう！刀女の姿確認した途端に警察に連絡するんだった！

俺の後ろで木が倒れる。

無理無理無理無理！こんな遠距離攻撃に対抗し得る手段なんて持ってないよ！え、魔法？魔法式書いてる間に切られるわ！こつちも専門の道具さえあれば別なんだろうけど！お生憎様そんなものは持ち合わせておりませんわ！というかほとんどの人間がもつとらんわ！

くそっ！こうなりや最終手段だ。この手は出来るだけ使いたくなかつたが…。

俺は地面に両膝と額をぴったりとつけ、両腕は反抗の意思はないですといわんばかりに刀女の方へ差し出す。平たく言つと土下座だった。

「ごめんなさい!」

「は?」

「もう誰にも言いませんし、邪魔もしません!だから見逃してください!」

敵に屈せど命は守る。蛇又北路の行動理念でございます。今決めたんだけど。

因みに上記の台詞は全て嘘だ。ばっちり警察に通報させてもらいます。だってあぶねーもん。

「ぶっ…残念だけど」

そんな俺の必死なお願いにもかかわらず、刀女は冷淡な口調で言う。とうかお前今笑ったろう!? こっちは生死かかってて必死なんだよ! あ、ごめんなさい。なんでもするから殺さないでください。

「もう、私の姿見られてる時点であんたは死ぬこと確定なのよ。さっきの選ばせてあげる云々は嘘。帰ってる途中で後ろからならやり易いかなあと思っただけ」

「そんなあ」

「じゃあ改めて、死ね」

「どわぶっ!」

土下座の姿勢から後ろに飛んで何とかかわす。

「あんたさあ、何気にすばしっこいよねえ。なんか私の方が疲れてきたんだけど」

そりゃああんなに魔法連発してたら魔器使ってるとは言えそうなるわな。あんた体力なさそうだし。それに、

「昔格闘技やってたからな！ しかもスパルタ！ こんなもん避けるのなんて訳無いさ！」

いや、本当はぎりぎりだけど。すこし膨張してもいいだろ。

なんにしてもこういう時だけ格闘技教えてくれた師匠に感謝だな。あくまでこういう時だけ。

「ああ、でも一つだけ言うの忘れてたわ。私って結構慎重なのよ」「へえ、で？」

俺にとってはとてつもなくどうでも良い情報だな。お前の性格なんぞ知るか。

「だから誰かに邪魔されても良いようにタイマー掛けといたの。12時ぴつたりにしといたから……あと、30分つてとこね」

「はあ!？」

「まあその分範囲は狭くなっちゃうけど、まあ許容範囲ね」

前言撤回。やっぱり大切な情報でした。

まずいぞ。誰かが来るまで逃げ回ってればいいやー、とか思ってたのに！ あと30分の内に何とかしないといけないのかよ。厳しい！

「というわけで、私はあんたを30分間追い回してれば12時には忠実な奴隷君第一号の完成というわけなのよね」

「逃げ！」

「逃がすかあ！」

「お前殺す気満々じゃねえか！」

「別に死んでも構わないわ！」

「俺が構うわ！」

必死に逃げる俺と、それを刀を振り回しながら追いかける刀女。傍からみたらコメディーのアニメの終わり方みたいで愉快かもしれないが、やってる本人からすれば笑ってる奴は今すぐ俺と代わってほしいとしか言いようがない。ホントに、恐怖だけで死ぬ。

「はあはあはあ……」

「ぜえぜえぜえ……」

追い込まれていた。

校庭の隅に。

後ろには壁。前には刀女。逃げ場はない。

「やっと殺せる……」

「わー！ 待てって！」

「問答無用！」

刀女が振りかぶる。恐らくその一撃だけで俺は天に召されることとなるだろう。

もうヤケだ。

俺は落ちていた石を拾い、校庭に魔法式を書き始める。間に合うかどうか分からない。

略式だ、略式！

「神よ、大いなる我等が神よ

虚弱なる我を救い給え

その大いなる力の一片をわれに示顕せよ

神、我の盾となり給え

防御魔法混土泥勳！」

恥ずっ！自分で言ってる超恥ずかしい！この刀女以外に聞かれてたら俺の人生もう終わりだ！そして万が一これで何も起きなかったらそれこそ終わりだ！社会的にも生命的にも！

まあ幸いかどうかはわかんないけど、なんとか魔法は発動した。

俺の50センチ前の地面が突然壁の形に盛り上がった。えーと、例えて言うなら8枚切りの食パンの内一枚とりだしたよー。みたいなの？

略式した上もともと防御力の高い魔法ではなかった混土泥勳は刀女の斬撃に当たると同時に碎け散った。おい、もう少し持てよ。一応俺の会心の魔法だぞ。

「くっ！……あんたも魔法使えたのね」

「あつたりめーだ。でなきゃ魔器とか魔法陣とかも知らないっつーの」

まあ知識だけで魔法は使えないって魔法使いも居るには居るらしいけど。だったら魔法使いを名乗るな。

それにしても刀女疲れてるみたいだ。当たり前か。あんな重いもん振り回しながら魔法使って俺を追いかけてたんだもん。俺よりも疲れてるか。じゃあもう魔法使えないかな？

そう思って近づく。これで使えたら多分俺死ぬ。

でも多分大丈夫だろう。さっきも言ったが刀女、相当疲労している。今の刀女なら刀を振ることさえ難しいだろう。

「でも、あと、一回ぐらいなら……」

「おい、無理そうだぞー。止めとけー。体に悪い」

「うるさいー！」

「…ほいよつと」

「あれ？」

気がつけば、刀女は地面に倒れていた。というか俺が倒した。これは師匠に教えてもらった技。あんまり出来はよくないがふらふらの女の子一人倒せないほど俺だつて弱くない。

ああ、もちろん転んでも痛くないようにしましたよ？　なんてっ
たって女性には優しいが売りの蛇又北路ですから。

でも優しく転ばそうとしたばかりに俺までほとんど横になって
る形でなんだか抱き合ってるみたいになっちゃったけど。

「なにすんじゃー！」

「ふっ！」

優しくしたのに殴られた。これはもういじめの現場と言っても差
し支えないかも知れない。

「いってー」

そう言いながら離れる。あ、刀取り上げんの忘れた。

「でも！ 私にはまだ“広開閻魔”が残ってる！　あと18秒！
もうあんたにや止められない！」

「いやー、その秒数だと、俺じゃなくても結構厳しいと思うけどな」
「10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、0！」

……

何も起きない。

「なんで…?」

刀女の不思議そうで、絶望的な呟きが聞こえた。

【第四話】 お願いだから帰ってください

「なんで…?」

刀女は脱力した。

おっと、この隙に。

「あ！ なにすんのよ！ 返して！」

刀は没収。あ、これだとただの女になってしまった。まあいいや。

「誰が返すか。俺が殺されるだろ。まあ素直に大人しく帰るっていうなら返してやっても良いけど」

「そんなことより」

無視かい。

「あれ、どうやったの？」

魔法陣を指差しながら女が言う。

若い頃からあれとかこれとか使ってるってと将来ボケるぞ。

「いや、別に大したことはやってないよ。ただお前から逃げ回ってる時になんかのついでに文字を一つ足でもみ消しただけ」

「は？ それだけ？」

「おう、それだけ。魔法式とか魔法陣ってデリケートなんだぞ。式一つ、文字一つだけで全然違う魔法になったり発動しなかったりする。まあ石灰で書かなきゃ良かったんだよな。あれ、簡単に消える

から」

「ちっ！」

「今お前人が親切に教えてやってるのに舌打ちしたか!？」

倒れこんだ状態から起き上がる刀女。でも途中で諦めて最終的に座った状態になった。なんじゃそれ。

「なんで止めたのよ」

「それはこっちの台詞だボケ。なんであんなことしたんだ」

「うっ……」

「答える。でなきや警察連れてくぞ」

少し酷いかも知れないが警察という言葉をだせば流石に白状するだろう。

まあそこまでして知りたいわけじゃないけど、こいつにもそれなりの理由があったのかもしれないから一応。なんせここまでしたんだし。

「……………が…っただよ」

「へ?なんて言った？」

「友達が欲しかったんだってば!何度も言わせんなアホ!!」

「はあ？」

なんだよお前そんな理由で犯罪犯したのかよ。とか、

たとえ成功してたとしてもそれはもう友達じゃないだろ。とか、

まあ色々思うところはあったがそれを言うのは憚られた。だって顔を真っ赤にして泣いてるんだもん。

うわ、やべえ、なんか小動物みたいだ。

ってそんなこと思ってる場合じゃないか！

「わわわわわわ！ ごめんごめん！ 聞いた俺が悪かった！」

「……」

「そうだな！ そんな理由なら仕方ないな！ 俺は別に誰にも言わないから！」

「……」

「友達が欲しかったなら俺が友達になってやるから！」
「……ホントに？」

お、やっと反応があった。

刀女は座り込んでいたので必然的に立っている俺を見ようとする
と上目遣いになる。(まあ立っていようがこいつちっちゃいから変
わらないだろうけど)やばい、そんな目で見られるとなんかやばい。

「おお！ 当たり前じゃないか！ 今日から俺はお前の友達さ！
ほら！ そんなところに座ってないで帰ろう！？」

無駄にテンションが高いな俺。まあこうでもしないとこの子なん
か壊れちゃいそうだし。

「あ、…うん。そのことなんだけどね」

力なく刀女が頷く。おい、お前キャラ変わってないか？

「そのことなんだけど、ちょっと疲れて立てないの」
「は？」

なんかこの10分で「は？」とか「へ？」とか大量につかってん
なあ。まあそんなことより。

「立てないってどういうこと？」

「いや、だつてずっとあんた追いかけてたでしょ？ しかも魔法使いながら。やつてる最中は大丈夫だったんだけどなんか魔法陣が駄目になっていきなり力が抜けたというか…」

「ああ、そうなの…」

ははは、と力なく笑うのは俺。

さて、こんな時間だし誰かに連絡するのはできるだけしたくないから、ここで出てくる選択肢は4つ。

- 1、刀女に止めをさす。
- 2、置いて帰る。
- 3、刀女と朝までここに居る。
- 4、こいつを家まで送る。

…まあ、一番は無しだな。なんで俺もそれが最初に浮かんだのかは謎だ。あ、こいつに殺されそうになったからか。まあ2も無しだな。紳士な俺にはそんなこと出来ない。じゃあ…。

…結局4か。

「なあ、お前家ってどこら辺？」

俺は背中 of 刀女に聞く。随分乗るのは嫌がっていたようだが俺が無理やり乗せた。自転車は、まあ誰にも盗まれないだろ。明日これ使って帰ればいいし。

「だからタクシー使って帰るつつってんだろ。さっさと下ろせ」

「そのタクシーが見あたらねえから歩いてんだろうが。お前も携帯忘れたって言うしよ」

「あんたのは？」

「家」

「ちっ！」

「今舌打ちしましたか？ せっかくここまでしてやってんのに舌打ちしましたか!？」

「じゃああんたの家寄ってって。どうせ徒歩で行けるような距離じゃないわよ」

「金は大丈夫なのかよ」

「手持ちは無いけど家にはあるから余計な心配しなくていい」

可愛くねえな。立ち直った途端可愛くないわ。ずっと心が折れて欲しい。

「なにこれ？ 家？」

「はい俺が住んでるアパートですけど何か問題でもありますかあ
?」

俺のアパートに来て一言目がこれ。お前、捨ててくぞ。
確かにぼろいけどさ。安いんだよ!

まあそんなんだから俺の部屋に来ても「うわー、狭ー」って失礼
すぎるだろうが!

泣いて良い?

「というか電気代ぐらいちゃんと払おうよ」

「うるせ。金が無かったんじゃ」

「とっくかなんかお腹すいた。なんか食べ物ない?」

「カップラーメンならあるぞ」

「あ、食べたい」

「何味がいい?」

「おまかせー」

言ったな?よっしゃ! チョコレート味食わしたる! (残って
る中で一番量が多かった)

今度はちゃんと焦げないように気をつけながらやってやる。

ま、タクシー来るまで時間ありそうだから大丈夫か。

〈約3分経過〉

「そろそろじゃないか?ラーメン」

「ん。でもあんたは食べないの?」

「うん。俺はいい」

「あと、なんでニヤニヤしてんの？」

「え！ マジで！？」

「気持ち悪い」

傷ついた。それが助けてやった人に対する態度か。

「ん。……おいしい」

「マジでえ！？」

「……」

睨まれた。

でもおいしいのか、それ。意外すぎる。後で俺も食べよ。

「あんだ不味の食わせようとしたわね」

「違う違う。どんな味かわかなかったから」

「一緒だそんなもん！」

ブーブー

俺の携帯が鳴った。多分タクシーさんからだろう。

「あ、来たよ！ 多分！ ほら、早く食べて帰りなさい！」

「ちっ！」

その後刀女が寝そうになったりお隣さんが起きちゃったらしく怒鳴られたけどまあなんとか刀女を家に送り返すことに成功した。

よっしゃあ！ これで一件落着だ！ もう寝よう！ 今日には疲れ
たし。

……あ、漫画忘れてた。

【第四話】 お願いだから帰ってください(後書き)

今回は比較的長めになってしまいました。

できれば感想お願いします。

【第五話】 同い年とかあり得ねえ

朝。

まあ多分まだそう言ってもいい時間帯だったと思う。まだ太陽は出たばかりだったし、外でカラスがうるさく鳴いていたし。人間として起きる時間にはそれほど遅くは無いだろう。少なくともこのことで責められはしない筈だ。

あくまで人間としての話だが。

「だから学生としては遅いつつってんだろ」

バスッ

「いで」

うん。まあ遅刻しちゃったよね。だって仕方ないじゃん。昨日はあんなことあったんだし。そりゃ寝られないよ。俺が寝た時間多分2時過ぎだぜ？いつもは12時前に寝るって言うのに。

まあそんな訳で今は職員室で担任の湖蛸先生から絶賛説教中。まあ授業開始時刻より2時間も遅れたんじゃ仕方ないよね。

「ったく、まあお前は初犯だし反省もしてるようだから今日はこれぐらいにしとくけど、今度こんなことがあったら反省文ぐらいは覚悟し説くように。最近は何騒な事件も多いんだから気をつけろよ」

「へーい」

物騒な事件ってなんかあったかしら？まあいいや。とりあえず先生のお説教も済んだようだしさっさと教室帰ろう。

「あ、そうだ。今日は視聴覚室で授業やってるからそっちに行けよ」

「は？なんでですか？」

今日は特に珍しい授業は無かった筈だ。

「あれ？言っでなかったっけ？なんか今俺らの教室すごいことになってるから。まあ行けば分かるよ。どうせお前は教科書ほとんど置いてんだろ？」

「まあ、そうですね」

大変なことってなんだ？ いや、でもこの湖蛎先生は小さいことでも大袈裟に言う癖があるからな。信用は出来ない。

「あと警察も来てるから邪魔しないようになー」

「なんでですか!？」

「行けば分かる」

そう言っで湖蛎先生はニヤリと笑った。まったく、相変わらず嫌な性格している。

どうせこれ以上いっても何も聞きだせそうになかったから俺は結局大人しく教室に戻ることにした。でも警察来てるんだっいたら中に入らせて貰えるかなあ？

「うわ、本当に居るよ」

俺が教室に来て見ると、確かにそこには5人ほどの警察官が居た。で、まあ何が原因かと言うと、

昨日の刀女の一撃で出来た壁の穴だった。

すっかり忘れてた！ いや、覚えててもどうしようも無かったかもしれないが！

…まあ、でもばれることは無いか。

「ん？君はこのクラスの生徒かい？」

その警察の内の一人が気づいて俺に話かけてきた。40代ぐらいの気の良さそうな人だ。

「あ、はい。ちょっと忘れ物しちゃって。はいってもいいですか？」

「ここで遅刻したと言っても俺に良いことはなさそうだからとりあえず嘘を付いておく。」

「おお、構わないよ」

流石気の良さそうなおじさんだ。俺はありがとございませす、と言って自分の机に道具をとりに行く。そのついでに聞きたいことを聞いてみる。出来るだけ白々しく。

「何があつたんですかあ？」

「ああうん、見ての通り壁が破壊されちゃってね」

「なんでですかねえ？」

「いや、それがまだ良く分かっていないんだよ。破壊力から言ってみる人の手で、とは考え辛いけども」

「ええっ!？　じゃあ一体どんな手を使ったんですかあ?」

「うーん、今のところ一番可能性が高いのが魔法使いの犯行というものなんだけどねえ」

口が軽いのが良いのか、このおじさんは俺が聞いたことをすら喋ってくれた。まあそりゃそこまではれるか。

「ええー!　どんな魔法を使ったんですかねえ?」

白々しさ100%だ。流石にここまでではばれていないだろう。まあばれていても俺がやったわけじゃないし直接は関係ないが。

「それを今から俺が調べるんだな、これが」

今度は後ろから声が聞こえた。振り向くと180以上はあるのかと言う巨体の男が立っていた。年は30代前半ぐらい。髪は黒の短髪、服装は仕事とは思えないようなラフな格好。ただし胸にはフクロウを象った胸章が光っていた。

「魔法連盟…」

まあその記章が魔法連盟の証ということ。イコールでこいつは魔法使いと言うこと。まあ実戦的な奴かどうかは分からないが。

「邪魔だ。どいとれ、がきんちよ」

そう言ってそいつが俺のことを押す。俺は危うく倒れそうになった。なんだこいつ。

「お待ちしておりました。洲王さん」

警察官が敬礼する。

なるほど、こいつの名前は洲王か。覚えておこう。

その洲王は刀女が開けた穴を覗き込むとすぐに呟く。

「切れ味がなかなか鋭いな。しかもこの威力となると、それなりの実力者だぞ。たぶん魔法式名は絶鱗風我かな？」

んだよ。何にもできなかつたらばかにしてやろうと思ったのにも俺と考えてた魔法が違うな。どっちが正しいんだろ？できれば俺であってほしい。

そこで洲王が警官たちに指示を出す。ここからじゃ何言ってるのかは分からなかったが。洲王自身は外を調べるのか窓を跳んで乗り越えた。と、そこで俺と洲王の目が合う。

「あ、まだいやがったのがきんちょ。さっさと戻れ。授業始まつてるだろ」

「…ああ」

こいつの指示を聞くのは糺だったが、確かにその通りだったので道具を持って視聴覚室へ行くことにした。

って、視聴覚室ってどこだっけ？

「あ、すみませーん。遅れましたあ」

まあ何とかたどり着いてドアを開ける。また怒られるかと思ったが今度はそんなことはなかった。授業中だったからかな？

座り方は教室の時と同じだった。まあ当たり前か。

俺は自分の席に座る。

つんつん。

後ろからペンで突いてくる奴が居る。まあ顔は見なくても分かっている。

だから無視。

つんつん。

無視。

つんつんつんつんつんつんつんつんつんつんつんつんつんつんつんつん。
つん。

「鬱陶しいわ！」

俺は小声で怒鳴りながら（これがなかなか難しい）後ろを振り向く。予想通りそこにはアホ面が。

「だってよう、ホク口が無視すんのが悪いんだろ？」

俺がこの高校で一番よく話す友人の早涯鉦跡だ。友人というか悪友というか腐れ縁というかまあそこら辺は微妙なところなんだけど。

「それはお前が授業中にもかかわらず俺の背中を汚いもんで突くのがいけないんだろ」

「きつ、汚くなんかないよ!」

「あそ、まあ俺はどっちでも良いけども。で、何の用?」

鉦跡は声を潜めていった。

「今日のアレ、ホクロがやったんじゃないよね?」

鉦跡は肉親以外で俺が魔法を使えることを知っている唯一の人間だ。まあ昨日刀女にも知られちゃったけど。

「ん? ああ、違う違う。俺は全く関係ない。というか授業中にする話じゃねえな」

「ごめん、ちょっと気になっちゃって。こんな日に限ってホクロ休むし」

「ああ、それは悪かったなただの寝坊だ。本当に俺は関係ないから安心しろ」

「それならいいんだけど」

微妙に嘘だが。まあ刀女がやったことだしいいか。こいつを無駄に心配させたくない。

そういえばこいつは刀女を知っているのだろうか? こいつの知り合いネットワークは俺の比じゃないからな。もしかしたら知ってるかも。

「なあ、刀…じゃないや。たぶん1年だと思っただけど150セン

手を回してるってのがもっぱらの噂さ

「ふうん」

「ねえ、人がこんなに親切に話してあげてるのにふうん、だけ？
三文字だけ？」

「へえ」

「三文字になった！」

なんだか面倒なことになってきたな。

【第六話】 そついつことは詳しく言おう

刀女。

本名、五月雨さみだれみつき巳月

性格、凶暴。友達、一人（俺のこと）。身長、ちび。

まあ今日までにあいつに関して分かったことと言えばこれぐらいか。情報源は鉋跡だけだけど。

そんな感じでお昼タイム。どうやら巳月は一人で飯を食べてるみたいだ。慣れてる感じが逆に悲しい。俺は鉋跡と一緒に。視聴覚室の机は広いから物置くぶんには楽で良い。

「……なるほどねえ」

「ん？なにが？」

鉋跡がコーヒー牛乳を飲みながら聞いてくる。

「いや、こつちの話。なあ鉋跡、こつちで良いバイト……」

「ちよつと北路」

この話し方は鉋跡じゃないな。鉋跡はなんかもつと優しい喋り方だ。もちろんといいいますかお約束と言いますか。そこに居たのはやつぱり巳月だった。

というかいきなり呼び捨てかー。俺は気にしないから良いけど。

「うーん。なんだ？俺は今こいつと楽しく話してたんだがそれを遮るほどの重要な話か？」

まあ楽しい会話では無かったけれど。ただバイトで言いとこないかねえ？ という話題を振るつもりだけだったけど。

「北路、昨日の夜のことちゃんと責任とってよね」

「……」

「ぶはっ！！」

「！！！」

「げほっげほっ！」

「がっ！？」

一番上が俺。何も声がなかった。次が鉢跡、コーヒー牛乳噴出しやがった。きたねえ。あとは俺の近くで飯を食ってた奴ら。どうやら聞こえてたみたい。

「てててててめええ！なんてこと言ってくれんだ！」

「？ なに？ もしかして昨日の約束忘れたって言うんじゃないでしょうね」

「違う！ そう言うことでは断じて無い！」

「じゃあなに？ 忘れては無いけど私との関係は無かったことにしてくれとでもいいたいの？」

「お前ワザとか！？ 言い回しに問題があるつつつてんだよ！」

「あ、そういうば昨日あんたの家に髪留め忘れたと思うんだけど無い？」

「それをこのタイミングでいうなあああああ！」

やばい、最初は数人だけだったけど俺が大声出しすぎた所為で学級の全員がこっちを見る。鉢跡もえ？ どういうこと？ 見たい

な目でこつちを見るな。全て誤解だ。

「ちょっと廊下で話し合おうか」

このままここで話してもさらに自分の首を絞めると判断した。巴月の背中を押す。それを他の奴らが信じられない物を見るよう目で見てくる。ほつとけ。

「なんでこんな所まで連れ出したのよ」

巴月、「ご機嫌斜めだ。」

こんなところって廊下じゃん。そこまで言うこと無くない？

「ほら、中だと話し辛かったじゃん？

で、具体的には俺になにをして欲しいんだ？ というか責任ってなに？」

「私の友達増やそう大作戦。北路に邪魔されたから。責任とってちゃんと友達にりなさいってこと」

「まあそこら辺は分かった。で、その大作戦は俺は何をすればいいんだ？」

「そっそれは……自分で考えなさい!!」
「肝心なところ丸投げかよ!」

考えてなかったのか。こいつらしいっちらしいけど。

「まあでも友達一人できたし、ほとんど作戦は成功と言っても過言ではないわ」

「あ、じゃあ俺何もしなくて良いのな」

「前言撤回」

撤回されてしまった。これではどうしようもない。

あ、そういえば聞きたいことがあったんだ。丁度人いないしいいか。

「そういえばさ、あの刀に掛かっている魔法って何？そしてだれが作ったの？」

できれば斥舞風月であってほしい。

「ああ、絶鱗風我だったと思うけど。お父さんが作ったから確かじゃないけれど」

負けた。洲王に負けた。

「ってお父さんも魔法使い？」

「うん。五月雨工広って言えば大体の人は知っているとと思うけど」

「五月雨工広って！魔法連盟日本支部の支部長じゃないか！なにそのびっくり情報！」

そりゃあのぐらいの実力者だったら絶鱗風我を刀に纏わせるくらいわけないな。いやー、納得納得。

「え！じゃあもしかしてお父さんに魔法教えてもらったとか？」

「うん」

おい、五月雨父。こんな奴に魔法教えるなよ。めちゃくちや悪用してんぞ。

「あ、そんなことよりもチャイムなるよ」

「ああ、ほんと。もうこんな時間か」

この短時間ですごく疲れた気がする。

でも本当に疲れたのはこの後だった。

ドアを開けて巳月と離れると他の男子やら女子やらと質問の嵐だった。(こんな時でも巳月のほうは誰も行かない。巳月もそれを気にすることなく授業の準備をしていた)

何とか逃げ切って放課後。

また質問攻めに合うことは予想できたので俺は誰よりも早く学校を出た。

校門に誰か立っていた。

確認するまでも無く洲王だった。間違いなくこっちを見ている。

「よう、がきんちよ。ちょっと付き合えよ」

有無を言わせぬ迫力。

またバトル展開の予感がした。

【第七話】 izzという時はパフェでしよう

ファミレス。

別にファミコンレスリングとかファミリアレスキューとかの略ではなく、まんま普通にファミリーストランの略だ。

まあそこに洲王と二人でいるわけだよね。

はあああああああああああああ！？

お前何前回ちよっと付き合えよ、ってシリアス風に言ってたくせになんだこのほのぼの感！ 話なら車の中とかでいいだろ！（移動は車だった）

というか俺もバトル展開になりそうだとか今思えば恥ずかしい！

今日は平日と言うこともあってか店内には三分の一ほどしか人は居なかった。

来るんじゃなかった。

「じゃあ俺はコーヒーで、おいガキ。お前はなにがいい」
「チョコレレートパフェで」

前言撤回。やっぱり来てよかった。

甘い物には目が無いの。まあ、カップラーメンはどうかと思うけど。

「まあ話っつーのは、あれだよ。今日のあの事件のこと」

コーヒーと俺のパフェが運ばれてきた後、洲王が口を開いた。

「というかコーヒーにそんなに砂糖を入れるな。甘すぎだ絶対。なにか？ お前も甘党か？ だったらお前もパフェ頼めばよかったのに。」

あれ？ というかちょっとまって。なんでこいつは俺にその話をしようとしたんだ？ もしかしてこいつ、嫌な方向に勘違いしてないか？

「今日のあの校舎の傷以外にも他に魔法の痕跡があつてなあ、ひとつは公開閻魔の魔法陣、もう一つは混泥土泥動のあと。駄目だな。ちやんと魔法式は消さないと」

「…そうだな。俺もそう思うよ」

失敗した。こんな大事になるなんて予想してなかった。でもしかし、俺がやったなんて証拠は無いはずだ。

「まあその跡から俺は推理したわけだな。犯人は魔法陣を使ってその学校を乗っ取るうとした。そこへやってきた正義の味方、H君は絶鱗風我から逃げながらもなんとか魔法陣の発動を阻止、まあ混泥土泥動は自己防衛ってところだろ」

「……」

ほとんど正解だな。というかH君って言うっちゃった。もう俺確定なのか。なんでまた。

だがまあ俺が犯人とは疑われてないみたいで良かった。いや、魔法が使えるってばれただけでもアウトか。

「なんで俺だつて分かったんだーって顔してんな？ まあそれは追

々話すとして、犯人は五月雨さんトコの娘だろ。まあ理由は知らんがあれほどの魔法陣、五月雨家でもないで発動できまい」

「五月雨家って、あんた巳月が魔法使えるの知ってんのか？」

俺はつい聞いてしまった。

しまった、これでは肯定してるも同然じゃないか。

しかしそんなことを気にする様子も無く洲王は続ける。

「五月雨家は特別扱いだ。法律の外に居る。昔から五月雨家は魔法連盟でも高い役職にいたからな、それを認められてその一族でのみ幼い頃からの魔術の鍛錬を許可されている。まあ将来は連盟の役職に着くことが条件だか。因みにこの特別扱いは五月雨家だけじゃないけどな。世界で63、日本でも2性いる。まあ極秘情報だけど」

聞くんじゃなかった。極秘情報なんで重過ぎる。なんかこの後消されそうな気がしてならない。

俺は傍にあったナプキンを手に取る。それも一気に10枚ほど、出来るだけさりげなく。

「なーんで俺にそんな極秘情報を教えてくれちゃうかなあ？まあ俺、口は堅いほうだから誰にも喋らないけど」

「あ、それともう一つの証拠、五月雨巳月の髪留めだ。校庭に落ちてたぞ。フクロウを象ったもの。これ、連盟で売られてるやつだし」
「無視すんなよ」

そして巳月、そんなもの学校に持ってくんな。

「でも、まだ俺が混泥土泥動を発動させたなんて証拠ないだろ？」

「イコール」

なんだそれ？ そう思った瞬間、頭の上でボンツという音がした。上を見上げると、…なんだこれ？なんか形も大きさもサッカーボールぐらいの黄色いひよこっぽい物がいた。

羽小さっ！ よくこれで飛べてるな。というかぬいぐるみ？

「ぬいぐるみじゃないぞ。俺の使い魔みたいなもんだ。名前はイコール、戦闘はあまり得意じゃないが小さくなることが出来るから盗聴とかによく使ってる」

そのひよこ、もといイコールがふわふわと洲王のところに飛んでいく。あ、羽つかってねえ！ なんかよくわかんないけど浮いてるだけだ！

あれ？ 今おれの頭で大きくなったってことは？

「2ミリほどの大きさにしてお前の頭に送った。なんか見るからに言動が怪しい奴だったからな。まあ送って大正解だったって訳だ。五月雨の娘との会話はなかなか楽しかったようぞ」

ぐわああああ！ 失敗したあ！ なにが失敗だったかというあいっの友達になつたのが失敗だ！

「人間」

突然イコールが喋り始めた。うおっ、こいつ喋れるのか。

「お前が魔法を知っているということは会話で分かった。ぴよ。あと、五月雨の娘の発言から五月雨の娘の邪魔をしたということもわ

かった。びよ。これで言い逃れはできないぜ！びよ」

おいイコール、口癖おかしいぞ。文章と分けるな文章と。ぜったいお前の口癖後付けだろ。

「そうだとするとあれか？俺は巳月と共に刑務所送りになるってことか？」

多分俺の声は震えていただろう。まあ手元のことばれないかな安だったし。

「いや、そうじゃない」

しかし洲王から聞かされたそれはとても意外なことだった。

「え？もしかして見逃してくれんの？」

そんな淡い期待をこめて。まあ期待するだけ無駄だった。

「それも違う。お前が犯人になってもらう」

その瞬間、思考が停止した。

「は？」

「考えても見る、世界から認められた五月雨家がこんな不祥事起こしたらそれこそ五月雨家だけじゃない。日本の魔法使い、いや世界の魔法使いの信用が無くなる。そしたら何人の魔法使いが路頭に迷うことになるか、何人の魔法使いが迫害同然の扱いを受けることになるか。お前にだってわかるだろう？」

だから今回のこの事件は連盟とは何の関係も無いちよつと魔法を知

つてた高校生が悪ぶつてみました。みたいな感じで話を終わらすのが手っ取り早いかつ安全なんだよ。

ああ、これは上の許可も取ってない俺の独断だけど、抵抗すれば警察に死体を届けることになっちゃうかもしれないからよろしく」

「ふっふざけんな！誰がそんなあらかさまな濡れ衣！それに俺は学校を守ってやったんだぞ！発動さえしてしまえばもつと大きな事件に発展したんだ！」

必死な俺とは対称に、洲王は面倒そうに言う。

「でも魔法、使ったんだろ？まあ気にすんな、魔道書検閲罪と魔法施行と器物損壊。まあ3つあわせて多く見積もっても懲役5年って所だろ。それで大勢が救われるんだ。光栄に思え」

魔道書検閲罪

この言葉が何か引っかけたがそれを考えてる暇は無かった。

「あ、まだパフェ半分しか食ってねえのかよ。まあいいや、大人しくお縄につけ」

「くっ！」

逃げ出そうとする。そこで気づいた、人が全くいない。先ほどまでは多いとは言えないが確かにお客はいた。それにあたりまえだが店員も。

いまは俺と洲王だけ。

「僕も忘れるな。ぴよ」

あ、イコールもいた。

驚いて立ち止まってしまった。それが失敗だった。後ろから首を掴まれる、やばいと思ったときにはそのまま持ち上げられて抵抗が出来なくなった。

「まあ逃げるとは思ってたけどな。こんな簡単に捕まるとは。人払いぐらい魔法使いじゃ基本だぜ？いちいち驚いてんなよ」

苦しい、目が霞んできた。

力を振り絞ってさっき魔法式をばれないように書いていたナプキンの内の一枚を取り出し、投げる。

まあ投げると言ってもひらひらのナプキンなのでそこまでちゃんとは飛ばないが。

「は、爆ぜろ、爆破魔法硬惚恋瓦」

ぼん。

赤い光が店内を支配する。

丁度俺と洲王の間でそのナプキンが破裂したので洲王の手から離れはしたものの、俺にも結構なダメージを負った。

「クソガキィ！」

後ろから声が聞こえるが関係ない。出口はすぐそこだ。

俺は全力で走る。

外に出ればこっちのもの。後は助けなり呼べば良い。こいつも連盟の人間だ、あまり派手な動きは出来ないだろう。

出口の取っ手を押す。しかし開かない。いや、その前に取っ手にすら触れない。

くそ、結界か。

「まったく、結界一応はっておいてよかつたぜ。まさかそんなもんに書いてあったなんてなあ。クソガキ、腕の一本ぐらい覚悟しておけよ。どうせ降参する気は無いんだろ」

どうやら洲王は臨戦態勢のようだ。

はあ、昨日こんなことがあったばかりなのに…

しかも今度は喧嘩慣れしてそうだし、

本当についてないや。

【第八話】 ピンチ

実を言うとさっきの紙ナプキン、10枚ほど取ったんだけど会話が思いの外短くて四枚目の途中までしか書き終わってない。実質三枚で、今使っちゃったから残り二枚。勝てる気がしねえ。

そして今、壁と洲王に挟まれてる状況だから現状としてはさらに悪い。

洲王が何かし始めた。手首の腕輪が光っている。

えーと、これはもしかしなくても魔法ですか？あの右手の腕輪が魔器なのだろう。

「我は神、汝は僕」

「は？ちよちよっと待って」

「我が僕よこの命において即ち魂を与えん」

「いや、だから」

「汝、我が矛となりその身を焼け」

「いやいやいやいやいや」

「破壊魔法紅蓮炎邪！」

「ぎゃあああああああああああ！！！」

洲王の右手から黒々とした炎が放たれる。

こいつ！素人相手にとんでもねえ魔法使いやがった！しかも詠唱付きって！

破壊力が跳ね上がってんじゃねえか！こんなもん食らったら即死だわ！！

何とか避けるも避けきれずに足に少しその炎が当たる。

「あっちいいいい！！死ぬ！死ぬ！」

のたうちまわる。お前、制服焦げてんじゃん。どうしてくれんだ。

「制服高いんだぞ」

「行け、イコール」

無視ですか。

洲王が言っているとイコールがこっちに向かって跳んできた。

「死ねええええええええ………びよ」

「絶対今口癖のこと忘れてたよね！後付だよね！」

イコールの攻撃力はそれほどでも無かった。ウチの学校のサッカー部がこっちに向かってサッカーボール蹴ったときぐらいの威力。まあでも、転ぶぐらいには痛い。

「あだっ」

洲王がポケットからだした手袋を右手にはめる。

「奉奠拳戯」

次に洲王が拳を振りかぶる。それと同時にその手の回りに何か黒い物体が集まりだす。まあ敢えて予想するならあの黒いのが跳んでくるんだろう。

今度の魔器はあの手袋か。こいつ、どんだけ魔器もってやがんだ。

「ふん」

予想どおり。

つて、転んだところにこれは無いって！お前本当に俺を殺す気か！

状態を起こして何とかかわす。すると俺の後ろにあった結界に奉奠拳戯が当たり、ひびが入った。質量がある分攻撃力は高いらしい。

「つてだからさっきから俺が死ぬような攻撃力高い奴ばかりじゃん！」

「いや、絶鱗風我かわし続けてたんだし大丈夫だろ」

「あんなもんまぐれに決まってんだろ！」

自分でいって悲しいけど。

しかし壁と洲王に挟まれてるこの状況は分が悪過ぎる。どうにかして脱出しないと。

ナプキンを数枚手に取り、少し丸めて投げやすくしてから洲王の方に向かって投げる。

「爆破魔法恍惚恋瓦！」

「くっ！先守妖李」

洲王の前に円盤状の盾が出現する。

なんだこいつ、いくつ魔器持ってやがんだ。まあこの状況的に言えば好都合だけど。

俺は洲王の方へ突進する。さっき投げたナプキンが本当に爆破しようものなら自殺行為だ。でも爆発するわけが無い。だって魔法式もなにも書いてないやつだもん。

洲王の横を俺が通り抜けるが、前が自分の盾で見えなかったので反応が一瞬遅れる。

「あつ！てめえ！」

何とか広いところに出れた。でも安心できない。まだ倒したわけでも形勢逆転した訳でもないのだし。

一応携帯で救助呼べるか確認。あ、やっぱり無理か。圏外だ。なら今度は別のことをしようとして操作する。

「行け！イコール！」

不意に背中に衝撃が。後ろを全く見ていなかったので派手に転ぶ。何とか携帯だけは持ったまま。

でも肩を打ってしまった。痛い。

「よし、戻って来い」

すすすーとイコールが洲王の方へ戻っていく。

「よくもやってくれたなあ、この野郎」

「それはこっちの台詞だボケ」

俺はたちながら言う。お前の所為で体のあちこちが痛くて仕方ない
じゃねえか。

「ほう、まだ元気そうぞ何よりだ。破壊魔法奉奠拳戯！」
「どわっ！」

因みにこの魔法、破壊力は抜群だがスピードはそれほどでもないの
で慣れてる奴なら何とか避けることが出来る。

あとは、まあ全部の魔法に共通だがそんな連発して打てるようなも
んじゃない。

だから俺は洲王の方へ走っていく。奉天拳戯も紅蓮炎邪もそう早く
放てないだろう。多分。

走って洲王の手首にナプキンを押し付ける。洲王は驚いているのか
反応が遅かった。しかし喧嘩ならこっちの方が経験ある自信はある
からな。

「爆破魔法恍惚恋瓦！」

「うぐっ！」

「がっ！」

二人がまだ離れる。

もちろん俺が押し付けていいわけだから俺にもダメージはあった。
でも手袋と腕輪の破壊と言う第一の目的は果たされたので良かった。
というかどっちも右手にしている良かった。

「てめえ、ガキ！くそっ！よくも！」

洲王が右手を押さえながら叫ぶ。
俺も左腕が火傷で痛い。というか絶対あっちよりも重症だ。

「イコール！あいつをぶっ飛ばせ！」

そう言って何かを投げた。イコールがそれを食べる。すると、今まで黄色かったイコールが赤くなり始めた。

「くく、俺もこれあんまり使いたかったわけじゃないんだけどよ、残念ながら攻撃の手段がもう残ってないんでな。
この状態のイコールはさっきのとは比べ物にならない程強いぜ。体当たりが」

あ、特殊スキルとかは無いんだ。そこは進化無しなんだ。

びゅん。

確かにさっきとは比べ物にならないくらい速い。これを食らったらひとたまりもないな。

『よし、戻って来い』

洲王の声がした。すると、イコールはぐるりと方向転換して洲王の方へ戻っていく。

「おい！イコール！なんで戻ってきたんだ！」

「いや、ご主人が戻って来いって」

「そんなことは言っていない！」

「????？」

「もう一度行け！」

戸惑いながらも赤いイコールはもう一度俺に突進してきた。

『よし、戻って来い』

今度は空中でストップした。かなり戸惑っているのだろう。

「携帯の機能が」

「あ、やっと気づいた？いやあ、このままずっと気づかないでいたくれたら助かったんだけど」

「ふざけたまねしやがって」

みなさんご存知の通り携帯には録音機能というものがある、それをさつき使っただけ。まさか二回も持つとは思わなかったけど。

「イコール、もういい」

洲王はイコールに戻ってこさせた。あ、助かったかな？

でもやっぱりそう言うわけにも行かず、洲王は懐から何かを取り出すようだった。おいおい、まだ魔器なんて持ってんのかよ。

「俺がやる。これを使うとまあ、死ぬと思うけど気にすんな」

出てきたのは絶対ポケットに入らないだろうと言うサイズのなんかよく分からない棒。T字型になっている。

「さつきから俺を殺そうとした奴の台詞じゃねえな」

「威力がさつきのとは桁違いなんだよ」

振りかぶる。

不味いな。左に避ける準備をする。

ブンッ！

魔法が発動したと思ったら、視界が全て真っ白になった。

「こっ、恍惚恋瓦！」

俺は避けるのを諦めて魔法と相殺させることにした。まあこんなので相殺できるとは思ってなかったが。

「…ああ、よく生きてるな、お前」

洲王のそんな声が聞こえた気がした。俺もそう思う。

両腕は完全に使い物にならない。足も片方がひしゃげている。脇腹も少し抉り取られていた。血も大量に出ていて、意識があるのが逆に不思議だった。

「にしてもここまで疲れるとは思わなかったな。まあいいや、さっさとこいつを運んでしまおう。生きてるみたいだし」

どうやら洲王はどこかに電話するみたいだ。きっと俺を運ぶためだろう。

まあいいかな。

そう思ってしまう。

確かに洲王のいうことにも一理あるのだ。世界の他の魔法使いが不幸になるよりは俺だけが不幸になったほうが効率が良いだろう？ど

うせそんな真面目になど生きてなかったんだ。そんな人生がたかが5年ぐらい無駄に消費したところで誰も苦しまないし。

これで良いんだ。

スパーン。

突然そんな音が聞こえた。俺が閉じていた目を開けると洲王が驚いている。どうやら洲王の携帯が切られたようだった。物理的に。真っ二つに。

スパーン、スパーン、スパーン、スパーン、スパーン、スパーン、スパーン。

今度は連続してそんな音が聞こえた。

見れば、さっきまで俺がいた出入り口が完全に切られている。結界も当然のように切られていた。

そこから登場したのは小柄な少女。

「北路お！大丈夫かあ！」

五月雨巳月。

2時間ぶりで久しぶりの再会だった。

【第九話】 巳月の本気

「大丈夫かあ！」

もう一度巳月が叫ぶ。

だかしかし御生憎様俺の体はもう声など上げられそうにないし、たとえ声を出したところでどう見てもこれは大丈夫じゃないだろう。

「巳月さん！？なぜこんなところに！？」

洲王が叫ぶ。あ、さん付けなんだ。

そりゃそうか。上司の娘なんだもんな。

「ごめんね北路。本当はもう少し早く来てたんだけど、魔法式書いてるのに時間掛かっちゃって」

洲王の言葉を見無視するかのようにならないうちに向かってくる。おまえよくこんなグロいもん見て平気だな。あ、グロいもんで俺のことな。それにしても巳月の奴魔法式書いてたつてことは手ぶらか。良くそんな状態でこの境界破壊できたな。それにここから俺を救出すんのだつて、こいつ撃破していかねーとなんねえのに。

「やめてください巳月さん。あなたでは俺には敵いません。俺も五月雨さんの娘を傷つけない」

おーおー、俺の時とは打って変わって丁寧語満載だなー。でも一人称が俺なのはどうかと思うけど。

「あんだ、私の本当の実力知らないでしょ？今、私とっても怒ってるからあんだが私を殺す気で来ないなら、あんだ、死ぬよ」

巳月が挑発するように言う。それと同時に俺達の方へ近づいてくる。いやいや、どちらとも戦った俺から言わせて貰うとですね、明らかに洲王の方が強かったよ。多分洲王なら体術だけで巳月倒せるよ。

「……仕方ないですね……」

そう言いながら、洲王はポケットから紙を取り出す。だからあなたのポケットにはどんだけ物が入ってたんだよ。四次元ポケットか？洲王が取り出した紙はきつと曉札だ。さっき俺がやったみたいにあらかじめ魔法式が書いてある紙。

「拘束魔法呱呱牢陣」

洲王の掛け声と共に巳月の周りに鎖が現れ始める。あと5秒ほどで巳月の体に完全に巻きつくだろう。あいつ何しにきたんだよ。戦闘開始10秒で負けてんじゃねえよ。俺でももう少し持ったわ。呱呱牢陣は発動から拘束まで少し時間あんだからその間に避けるよ。

まあ運動不足の女子に言ったって仕方ないか。

というか拘束系の曉札持ってたんじゃない。なんで俺に使わなかったんだよ。勿体無かったってか？

「…爆破魔法恍惚恋瓦」

巳月はなにをするかと思えば俺がさっき洲王に投げつけた書きかけの魔法式を使いやがった。書きかけなんだから発動するわけないだ

る。

ズガァン！

発動しやがった。

しかも鎖どころか周りの机やら椅子やらまで犠牲にして。
なんだよその威力！ちゃんと魔法式書いた時でもそこまで出なかつたぞ！というか恍惚恋瓦はそこまでの攻撃力は想定していません！しかも本人は無傷だし。なんだあいつは？化け物か？

と言うより一番問題なのは今の攻撃で一番ダメージを受けたのが俺だってこと。あいつは俺を殺しに来たのか？

は、腹があああああ！！裂けるように痛い！ってもう裂けてるけど！

「なっ！？……どういことですか？」

洲王も相当驚いている。まあ今のは驚くよ。

「だから本気で来いって言っただろっが。次は殺すぞ」

「……………！」

やばい、あいつの目がやばい。あれは肉食獣の目だ。下手すりゃ俺も殺される。って、俺って助けられる側だよな？

「…………………………」

あいつ！詠唱だけで魔法発動するつもりだ！確かそれ、世界でもほとんど出来る奴がない高等技術だろっが！なんでお前が出来るんだよ！

そして多分俺も巻添い食らう！
待てー！俺、瀕死状態なんだぞ！そんなんで攻撃食らったら本当に死んじまう！

「てっ辿竺公吏！、狭宮慨賭！、光琳圭樹！」

洲王お！てめえ自分が危ないと思ったら防御魔法バンバンだしてんじゃねえよ！せめて俺まで守って！

というか曉札使いすぎだ！

「切断魔法絶鱗風我」

ズゴオオオオ！！

多分そんな感じの効果音だったと思う。って、これ絶対絶鱗風我じゃないよね！もっと強力な魔法だよね！

もちろん、さつき洲王が発動させた防御魔法は全滅。いや、詠唱無しで防御力が落ちてたとは言えこれは無いだろ。

昨日の学校なんて壁に穴開けるのが精一杯だったのに、なんだこの急成長。

洲王は地面に倒れている。あーあ、血がだらだらだ。

「う、うううう…」

「とどめだ」

って、待てえええええ！もう良いじゃん！洲王明らかに戦闘不能だよ！そして俺をさっさと助けて！

「ちよ、巳月…」

お、声が出た。よかった、巳月に聞こえたかね？

「あ、そういえば居たんだった。待つてて、こいつ殺したら回復させるから」

忘れてたんかい！お前本当に何の目的でここ来たんだよ！
そして殺すな！これ以上犯罪を繰り返すな！

「あ、あんた曉札持ってたのね。丁度良かったわ。魔法式書かないと疲れるのよ」

洲王に近づき洲王から曉札を取り出す巳月。やばいな。どんな魔法だったところで俺にも絶対被害がでかいぞ。

その中から一枚選ぶ。できるだけ範囲の狭い魔法でお願いします。
つて違う！だめだ殺しちゃ！たしかに嫌な奴だったけどそれでも殺して良い理由にはならない！

「…おい、み、…」

駄目だ。全然声が出ねえ。頼む、巳月に伝われこの思い！

「…爆破魔法彊力虔山」

全く伝わら無かった。

やばい、あれは恍惚恋瓦よりも数段レベルの高い魔法だ！巳月のレベルでやられたらこんな結界無いが如し、店なんて全壊だぞ！

ぎゃあああああ！駄目だああああ！仲間に殺されるっつっ！

……あれ？何も起きない。どうしてだ？

俺はゆっくり目を開ける。

「ふう、何とか間に合ったようだね」

そこには巳月の持っている曉札をさらに上から握っている壮年の紳士がいた。って、あれは五月雨工広！？魔法連盟日本支部支部長にして五月雨巳月の父！？何でこんなところに！？まさか娘のピンチに現れたとか？いや、今回は娘というよりは俺と洲王の方がピンチだけ。

「パパ？」

「じゃあ、撤収だ」

パン、と魔法連盟日本支部会長もとい五月雨父が手を叩く。するといつの間にやら俺たちの足元には魔法陣が出現した。4人全員を一気に運べるでかいやつ。

どうやらそこで俺の意識が途絶えたようだ。

【第十話】 一件落着？

目を開ければ、真っ白な部屋のベッドに俺は居た。多分病室かなんかかな？

「お、目を覚ましたね」

そこには壮年の紳士もとい魔法連盟日本支部支部長もとい五月雨父が居た。…長いな、今度から五月雨父だけで良いや。

「あ、治療してくれたんですか？」

俺の体には包帯が所狭しと巻かれている。見ているだけで痛々しい。というか実際超痛い。

「うん。とりあえずの治療はね。でもこれを飲んでくれるかい？」

五月雨父が取り出したのは二粒の錠剤。まあ断る理由も無いので素直に飲む。これが巳月や洲王だったら警戒して絶対飲まないけど。

五月雨父は俺が錠剤を飲んだのを確認すると嬉しそうに言う。

「うん。これで大丈夫だ。君の傷はあと三時間ぐらいで治ると思うよ」

「そうですか。ありがとうございます。…ってえええ！？三時間！？」

こういうのは詳しくないが時間単位で治らない傷だということぐらいは分かる。

「魔法薬だからね。それぐらいの効き目はあるさ。まして私が作った物だし」

「ああ、どつりで。あれ？五月雨さんって魔法薬剤師なんですか？」
たしかその職種以外は魔法薬なんて作れないはずだ。

「ああそうだよ。だからさっきみたいなの戦闘系はあんまり趣味じゃない」

憧れの職業が目の前に！

「でもすごかったですよ。巳月：さんの魔法止めた時。あれ、やっぱり逆算したんですか？」

「おお、蛇又くんはなかなか物知りだな。そうだよ。あれは最近じや誰も使わないが、昔は平和的に相手の魔法を止めるいい手段だったからよく使われていたんだけどねえ」

魔法式の逆算。

今五月雨父が言ったように最近ではほとんど使う人がいないが、一定の魔法式の真逆に位置する式を紙などに書いて魔法そのものにつける。するとどんな強固な魔法でも跡形も無くなる。

普通は書いてやるんだがこの五月雨父はことあるうに詠唱だけでやりやがった。流石の実力者は違う。

「あ！そういえばファミレス！それに巳月：さんが起こした事件も！」

「それなら心配要らない。あそこの店はもう私の使い魔によって直したし、事件も校舎を直して記憶を改ざんして、もうだれも憶えちゃいないよ」

「それ、一体何人ぐらいの記憶をいじつたんですか…?」
「さあ?街ごと魔法陣で魔法かけたからね。わからないよ」

すごい。桁が違う。というか単位すら違う。

「ふむ、じゃあ他に聴きたいことはあるかい?こちらは一応娘を助けられた身だからね。出来る範囲なら何でも聞くよ」

「じゃあ、巳月…さんのあの異常な強さはなんですか?あと今何処にいるんですか?」

「今は他の病室にいるよ。巳月もあんな力だして普通でいられるはずが無いんだ。今は休んでる。まあ、巳月の強さは一族でも異常だね。でも加減が出来ない。それさえなんとかなれば世界最強も夢じゃない」

世界最強かよ。やっぱりこの人の娘も半端じゃないな。

その時、病室の扉が開いた。

「五月雨様。そろそろお時間です」

「もうそんな時間か。わかった、今すぐ行く」

出てきたのは若い女の人。秘書さんかなんかかな?

さすがに忙しいよな。これ以上は迷惑か。まあ聞きたいことは聞けたから良いや。

「うん、じゃあ私はこの辺で。蛇又くん、今日は本当にありがとう」
「あ、はいこちらこそ」

まあ今回俺は洲王に滅多打ちにされたぐらいだけど。

出口の方へ歩いていく五月雨父。扉からでる寸前で俺の方へ振り返る。

「あと、巴月の友達になってくれてありがとう。あの子はあるんだけど君のことを信頼してるよ。どうかこれからも巴月をよろしく頼むよ」

「あ……」

俺が返事する前に出て行きやがった。

うん、でもまあ頼まれたんじゃ仕方ねえなあ。

コンコン。

「やっほー」

「ひゃ！北路！？なんでこんなところに！？」

とりあえず来てみた。

病院内をふらふらしてたら案外簡単に見つかったし。

「なあ、あんたの親父さんに俺のこと話した？」

びっくりしている巴月を無視して勝手にベッドの横に座り話しかける。

「え？いや、多分話してないと思うけど。なんで？」

まあそりゃそうだ。俺が友達宣言したのが昨日、いや、今日だもんな。流石にこんな短期間じゃ話さないよな。
じゃあなんで分かったんだろ？

「……？どうしたのよ北路。まさかそれを言いに此処まで来たの？」

「ああ、うんまあ。……あ、今日は助けてくれてありがとな！」

「……………明らかに後付け」

うん。俺も今思いついたもん。だって巳月に俺も殺されそうだったし、どちらかというと五月雨父にお礼を言いたい。
そつえばお礼言っの忘れてた。

「まあ用事はこんぐらいだ！じゃあな！」

苦しいのもう逃げ出そう。

「あ、待って」

ちょっと、呼び止めないでよ。せっかく逃げようとしたのに。

「じゃあ、また明日」

「お……………おお」

なんだかそう言うつ巳月はいつもよりも綺麗に見えた。

場所も時も変わり、時刻はある日の夜。場所は商店街から少し入った路地裏。

その暗く、人通りも無いところには合計で六人の人間がいた。

「だーかーらー。お前さっさと金出せばここまでしねえのに、逃げようとするからー」

「早く出せよー」

「うっ……うっっ」

一人の中学生と思わしき少年が五人の高校生に絡まれていた。五人の高校生はまあ見るからに不良といった格好をしていた。五人俗に言うカツアゲである。

少年には不良から殴られたのかいくらかの痣も見える。

「じ、これ……」

少年も諦めたのか震える手で財布を出してきた。

すかさずそれをとる不良の一人。すぐさま中身を確認する。

「お、なかなか持ってんじゃん。さすが私立中学生は金もってるねえ」

「本当だ。じゃあこんなところで時間つぶしてるのもアレだしさっさといこうぜ」

「おお、そうしよう」

「ぐはあ！…！」

そのうちの一人。最初少年の手から財布を奪い取った奴がぶっ飛ばされた。

手に持っていた財布はその不良の手から離れる。

その近くには先ほどまではいなかった男が一人。

「ふん、下衆共が。弱者から金をせびるとは。少しは恥を知れ！」

不良をぶっ飛ばした張本人は宙に浮かんだ財布をキャッチしてから言う。

その男は不良達と同じぐらい、高校生のように見えた。その男は学ランにオールバックに少しだけリーゼント気味の髪型。こいつも見ようによってはこの不良達の仲間に見える。

殴られた男は3メートルほど飛んで撃沈。どうやら気絶しているようだ。

「なんだお前は？」

その不良のなかの一人、ロン毛の人がその男に近寄りながら言う。
数的にはまだ4対1と有利なので余裕があるようだ。

「ああ、もしかして正義の味方気取りですか？」

ロン毛が茶化すようにいう。実際、茶化しているのだろうが。

「でもお兄さん、いや、同じ年かな？まあいいや、こっちとしても
仲間殴られて黙ってるわけにはいかないのよ」

「だまれ、その汚い口で我輩に話しかけるな」

有無を言わず殴りかかる。

ゴキツと嫌な音がしてロン毛の男が意識を失う。不意打ちで抵抗で
きなかつたようだ。いや、たとえ不意打ちでなかったとしてもこの
男の突きは速かつたためきつとロン毛は対応できなつただろう。

「てめえ！」

「不意打ちとか卑怯だぞ！」

「殺してやる！」

残ったメンバーは口々に言いながら地面に落ちていた鉄の棒などを
取りつつ一斉に襲い掛かる。

ガンッ！

また嫌な音が響いた。しかも同時に三つである。普通ならこの状況

で立っていられる者などいない。

「卑怯とかぬしらに言われたくないし、まだ3対1の癖して武器を使ってくるその根性を叩きなおしてやりたいところだが、今日のところは鉄拳だけで勘弁してやる」

その男は立っていた。

かわした訳でも防いだわけでもない。ただ単にその場に立っていた。実際、頭、肩、鳩尾にそれぞれ攻撃が当たっている。

それでも立っていた。

明らかに“普通”ではない。

「まったく、痛いじゃないか！」

そう言いながら拳を繰り出す。

今度は特に音も無く、三人は同時に倒れた。音が出ないようにこの男が気を使ったようだ。

「ふん、他愛も無い」

そう言いながら先程財布を取られていた少年に財布を投げ返し、歩き出す男。もうこの場に興味は無いようだ。

「あ、あの待ってください！」

呼び止めたのは少年だ。

「あ、ありがとうございます！」

「礼などいらぬ。我輩は正義を全うしたまで」

「えっと、名前だけでも聞かせてもらえないでしょうか？」

また去つていこうとする男をさらに呼び止める形で質問する。どうしてもこの自分を助けた人物ともう少し喋っていたらしい。あるいはただの興味か。

男は少し困つたようにしてから喋りだす。

「我輩の名か？我輩は火之迦具正偽だ」
ひのかぐせご

また歩き出す正偽。今度は振り返ることは無かった。

【第十一話】 鉦跡ネットワーク

「いやあ、まさかそんなことがあったなんてねえ」

「ああ、まさか本当に誰も覚えていないなんてな」

「うん。この間の授業も普通に受けていた記憶しかないよ」

「へえ、忘れさせるだけじゃなくて矛盾が無いように記憶の改ざんまでしたのか。流石だな」

洲王との喧嘩から一週間が経とうとしていた。

あれから本当に怪我は3時間で治りはしたものの、一応そのあとの二日は休むことにした。

いつもの教室。昼休みの時間。俺と鉦跡はいつものように弁当を食べている。

五月雨父が言うようにこの間の事件は誰も覚えていなかった。もちろん鉦跡も。（当たり前だが壁の壊れたあとも見当たらない）流石は日本最強、世界でも十指に入るほどの実力者というべきか。

まあ、そんな非日常的な会話以外はいつも通りだ。

「でも記憶は曖昧でしょ？あなた一週間前の授業で何やったか正確に覚えてる？」

「ああ、たしかにあんまり分からないね」

あ、一個忘れてた。巳月も弁当食う仲間として昼休みは基本ここにいる。

本人曰く、友達だからだそうだ。

「まあ、そりゃ町単位で魔法使ったんだからそうもなるか」

「範囲というよりは魔法の性質ね。というかそこまで正確に偽の記憶植えつけたら逆にそこで矛盾が生じるもの」

「ああ、なるほど。五月雨さんは頭が良いね」

「あ、いやっ、その…、そんなこと無いわよ！」

「？」

まあ、鉦跡とはなかなか仲良くやってるようで良かった。

にしても巳月褒められることについて耐性無さ過ぎだろ。

「そつえばさあ、こんな話聞いたことある？」

「ん？」

鉦跡は顔が広い。

まあ、友達が二人しかいない（俺と鉦跡）巳月とは比べるまでも無いが、まあ普通の学生程度には友達、知り合いがいる俺からしてもその数は尋常じゃない。

噂ではその数、五桁を上回るとも言われている。まあ、そこら辺は過剰にしてもこの学校の人間の8割のメールアドレスと電話番号は知っている本人もいつているし、他校は言うに及ばず他県、はたまた外国にまでその鉦跡ネットワークを延ばしてる。一体どこで知り合ったんだ。

実際、こいつと遊んだりするとまず100%の確立で知り合いらしき人に声をかけられる。もちろん鉦跡限定だが。

プライベートも何もあったもんじゃねえな。ここまで来ると逆に羨ましくもなんともない。

まあそんな鉦跡だ噂話には人一倍どころじゃなく敏感だ。面白い話が聞けるかもしれない。

「ホクロが休んだ日なんだけどね。がつくん、って言ってもわかんないか。まあこの学校の不良くんだよ。そこ子たちとその仲間が力ツアゲやってたんだって」

「おい、なんか見逃せないワードが混ざってたぞ。というか愛称で呼んでるってことはまさか友達？」

「そんなことどうでもいいじゃん。まあとりあえずやってたんだって」

「お、おお。まあ納得してやる」

「それでね、まあけんくんの財布が取られて、あ、被害者の方はけんくんって言うんだけど」

「加害者と被害者のどっちも友達!？」

「で、取ったあとに襲撃にあっただって」

「襲撃？その、不良どもが？」

「うん。五人いたんだけど全滅。しかも一人一発で。いやあ、漫画にでも出てきそうな人だね。完全に主人公タイプ」

「そりやなかなかだな」

人を気絶させることの難しさなら知っている。一発となれば本当に強い実力者だろう。

「でもそのどこが面白い話だ？噂になるほどの意外性も無いし。

まあ俺には出来ないけど空手部のエースとかなら出来そうじゃん」

「うーん。そうも行かないんだよね。実を言うとその不良君たち殴つたのよ、その主人公の彼を。しかも武器とか使って」

「わ、卑怯だな」

「それにもびくともしなかつただって」

一瞬理解が追いつかなかった。

「えっと、それはどういう意味だ？受け止めたのか？かわしたのか？」

「うん。違う。全部まともに入ったよ。しかも三つ同時に。それでも倒れるどころか怪我一つなかったって」

「それって、信憑性は？」

「僕が直接本人から聞いたんだよ。しかもがつくとけんくんの二人に」

加害者と被害者の二人からか。そりゃ信用できるな。

「魔法ね」

「うおっ、お前いきなり声だすなよ。びっくりした」

「あ、やっぱり五月雨さんもそう思う？僕もそう思ってたみたんだ」

「防御系か筋肉硬化系か。なにせよ外見は特に変化無いの？」

「うん。それも本人から聞いたから間違いない」

「うーん。見えないとなると…」

「防御系なら拘圃透槓か烈々按嘉ぐらいしか思いつかねえな。ただ筋肉硬化系となると猪突妄信、硬質顕花、筋蒙豪楚、曇箋倍歌、あとは…」

「もう良いわ。それで充分」

なぜか怒ったように俺の言葉を遮る巳月。

「前から思ってるんだけどなんであんなに魔法について詳しいの？」

あん？そんなことが聞きたくて俺の言葉を遮ったのかよ。まあ別にこいつら相手だったら隠すようなことじゃないからいいけど。

「俺のじいちゃんが魔法使いだったんだよ。それで少しながら教えてもらったの。まあ魔道書とかは無かったから普通に口頭とじいちゃんが書いた文字だけだからあんまり正確じゃないかもしれないけど」

「そういうことを聞いてるんじゃないんだけど。…まあいいわ」
なんかさっきから変なことを言うなあ。

「で、その犯人の外見的特徴は？」

「あ、ここの制服着てたからここの生徒みたいだよ」

「なぬ!？」

「ん?どうしてのさ」

「本当ね。あんまり大きな声出さないでくれる？」

鉾跡と巳月の二人が言う。おいおい、なんであんたらは落ち着いてられないだ。

「だってここの生徒ってことはまだ魔法使えないはずだろ?俺や巳月の例外を除いて」

「だから例外が他にもいたってことでしょ」

「まあまだ魔法使いつて決まったわけじゃないけどね」

「でもそういつ奴をほっとくとやばいだろ。今回はまだ助けるために使ったけど次はなにをするか分からん」

「じゃあ、どうするの?」

鉾跡が聞く。

う、そう言われれば何も考えてないな。

「ふ。いい事考えたわ」

巳月の不敵な笑み。あ、絶対変なこと考えてる。別にお前一人が暴走するのは構わないけど俺達まで巻き込むなよ。

「その魔法使い（多分）を見つげ出して捕まえるわよ！私達が！」

ドドーン！

俺の後ろでそんな音が鳴ったイメージだ。

ああ、“達”さえなければいいんだけどな。面倒臭い。あ、でも危ないと思うのは本当だけど。

「何のために？」

俺は聞く、聞かなくても分かってるけども。

「もちろん友達になるためよ！」

そついいながら巳月はどこからかノートを引っ張り出してきてその中の1ページに『魔法使いと友達になろう大作戦』とでかでかど書いた。

お前は小学生か、もっとタイトルどうにかしろ。見た目は子どもなら頭も子どもだな。

「ピコーン。悪口レーダー反応あり」

「すみません。言いすぎました」

まさか巳月にそんな能力が備わっていたとは。にしてもこっちを見ている巳月の目が怖い。

「うーん。まずそいつを見つけないと始まんないんだけど、どうし

ようかしら。一応周りには隠してると思っただけど」

巳月がペンをノートにぐりぐり突き刺して悩む動作をする。これだけ見ると足し算が出来なくて悩んでる小学生にしかみえないな。…あんまり言うともたれリーダーに反応してしまうな。

でもまあ俺が協力するかは置いといて確かにそれは一番の問題だな。鉋跡だつて流石にそこまでは

「五月雨さん、その人の名前と顔なら分かってるよ」

知ってたよー！

「え！？本当に!？」

「うん、でも本人に聞いたら否定されたけど」

「まあそりゃ犯罪なんだから、一応否定はするわな。俺でもそうする」

「で!?!だれ!?!だれ!?!」

めちゃくちゃ興奮してんなあ。

というか鉋跡もしかしてそいつとも知り合いか？

「2年C組の火之迦具正偽。僕達と同じ学年だね」

うわー、そいつなら俺も何回かなんかのついでに話したことあるよ。あいつ魔法使いってイメージじゃないな。一歩間違えれば不良番長だし。

「巳月、残念だったな。そいつは魔法使いじゃない」

「なんでそう言いきれるのよー!」

「あいつは気合と根性と正義だけでなんでも解決できる人種だ。いや、あれはもう人じゃないな。人じゃないが魔法使いでもない。一発や二発殴られたところでびくともしないのは当たり前だ」

「正確には三発だけどね」

うっさい鉦跡。

「そんなの行つて見ないと分からないじゃない。そういえば私いまでも良い作戦思いついたから。実行するわよ」

「あつそ、まあがんばって」

俺が関与しない分には何しても構わないや。

「何言ってるの？あんたもくるのよ？」

やっぱりな！多分そうだと薄々感じ取っていたんだよ！場の雰囲気とかから！

「じゃあ今日の放課後早速接触を試みるわよ。早く帰ったりしたら殺すから」

「……へーい」

ああ、俺の放課後が。

【第十二話】 登場！火之迦具正偽

「私の考えたこの作戦だけと思わぬ落とし穴を発見したわ」

今は学校も終わり放課後、俺と巳月は正偽の通学路の近くのコンビ二から待ち伏せをしていた。

まあ巳月の考えた作戦なんだがまず第一に“魔法を相手に使わせる”ということと、“そのあとの友好関係を築く”ということはクリアしている。巳月限定だが。

ただしその条件が整うにはまず周りに人がいないことが重要なのだ。こんなコンビ二で待ち伏せしてる時点でどうかと思う。

だから俺はそこを問題点に上げたいし、そもそもそれが理由でもう4回も失敗している。正偽が友人と一緒に歩いていて作戦に踏み切れなかったのだ。だがしかし巳月はどうやら別のことを言いたいようだ。

「なに？俺はまずこの作戦自体が失敗だと言いたいけど。そもそもこれだとお前と正偽は仲良くなれるかも知れないが俺は絶対に敵視されるだろ」

これも俺がやりたがらない理由の一つ。まさか人に嫌われてまでこんな面倒なことをしようとはとても思えない。ましてこいつの為にとなるとなおさらだ。

それでも協力するのはこの前の洲王の時にできた借りを返すため。

「いや、作戦自体はもう完璧パーフェクトよ。ただ問題となるのは」
そこで巳月は一呼吸置いて言う。なにか重大なことだろうか？

「私、男友達ばかりじゃない」

ずっこけた、コンビニで。

「これはもう逆ハーと喜ぶべきなのか、女の子として見てもらってないと悲しむべきなのか私には分からないわ」

「どうでも良いわ！だったら女子も頑張って友達にしろ！」

「嫌よ。一般人だと私が魔法使いだってばれた途端に離れていくもの」

あーなるど。変なトラウマ思い出させちゃったかな？

でもばれなきゃ大丈夫だと思うんだけど。過去にばれたことでもあんのか？

「にしても一般人ねえ。俺も一応そのカテゴリには入っていると自負していたんだけど」

「鉢跡ならともかくあんたは絶対違うでしょ。紙ナプキンで爆破起こせる人を普通とは言わないわ」

「そうかもな」

ビービー

あ、俺の携帯だ。多分鉢跡からだろうな。

「へーい、なんだー？鉢跡」

『やつほーホク口。良い情報だよ』

「なに？」

『今日火之迦具くん委員会の活動あるからって遅れるんだって』

「そののどこが良い情報だよ、俺の待ち時間が増えるだけじゃないか」

『はあ、ホク口は頭が悪いなあ。だから、今日は火之迦具くん友達と一緒に帰らないでしょ？それに時間も時間だから交通量も少ないだろうし』

「ああ、なるほどな」

『まあ具体的にはあと30分ぐらいで学校出ると思うからよろしく』

「ありがとな」

『いやあ、いいよおお礼なんてえ』

電話を切る。

まあこいつも褒められることに対してあまり耐性が無いようだ。いや、こいつの性格かな？

「成る程、状況は理解したわ」

「あれ？鉢跡の声聞こえてた？」

「いや、あんたの声だけでなんとなく予想はつくわ。で、正偽はあとのぐらいでここに着くって？」

「学校出るのはあと30分ぐらいだって」

「そ、じゃあそれまで待機ね」

「まあそれまで店員さんが怒らないか問題だけだな」

さっきからこつちをずっと見ている。まあ何買うわけでもなく立ち読みを1時間近くしてたらそうもなるか。

せっかくだしなんか食うもんでも買ってくか。あ、フランクフルトがおいしそう。

すみませーん、これくださーい。あ、結構高いな。え、からし？い

らないいらぬ。俺はケチャップだけ派だ。辛いの手手なだけなんだけ。

「あ、なんかおいしそうな持ってんじゃん、私にも一口頂戴」

「はい、結局からし持たされたからこれやる」

「死ぬ」

「……ごめんなさい」

「来たみたいだぞ」

俺は巳月に声をかけた。遠くの方に火之迦具らしき人物が見えた。

「よし、じゃあやるわよ」

「き、きゃあああ」

「よ、良いではないか、生娘でもあるまいし」

「だ、だれかあああ、お、お助けになつてえええ」

「良いではないか、よよよ、いではないか」

……まあ巳月の考えた作戦はこうだ。

正義感の塊であるところの正偽に犯罪らしきところを見せれば怒って魔法使うんじゃない？という至極簡単な作戦。さっきから思ってるが、これには穴が多すぎる。

前述したのはまあ目をつぶってもらってまず第一に俺たちの演技が下手すぎる。というかなんで時代劇風なの？そして第二に……

「何をしているこの不届き者があ！」

グオン！

俺のすぐ横で拳が唸った。理由は簡単、火之迦具が殴ってきたから。ちよつと態勢が崩れていたおかげで助かった。

まあでも演技が通用したみたいで良かった。

「あぶねえ！」

第二にこいつは魔法無しでも相当強い。だから魔法出すところまで火之迦具を追い詰めないといけない。これが俺にとって一番辛い。

「な、何奴！」

だからなんで俺まだ時代劇風なんだよ！

「ひとつ、人の世の生き血を啜りい」

火之迦具も時代劇乗ってくれた！というか何故に桃太郎侍！？火之迦具の中で流行ってたのかな？

「ふたーつ、不埒な悪行三昧、みいーつ、……………み、みいーつ……………」

忘れてる！三つ目忘れてる！わかんないなら最初っからやるなよ！

「みんな大好き火之迦具正偽！懲らしめてくれるわ！」

「絶対違う！俺も詳しくは知らんけど絶対ちがう！あとそれだと自分を懲らしめてるみたいだぞ！火之迦具！」

「むっ！その声は蛇又か？責様…そのような者だとは思わなかったぞ！」

そういえば何回か話したこともあったしね！顔と名前押さえられてても不思議じゃないか！

「ち、違う！これは…」

あ、言い訳しちゃだめだった。すくなくとも正偽が魔法出すまでは

「問答無用！」

どっちにしる関係なかったか。心配して損した。

「ってそんなこと言ってる場合じゃねー！うお！危なっ！」

「なかなかやるではないか蛇又！」

「るっさい、これならどうだー！」

そう言っただけ俺は隠していた木刀を取り出す。これは俺が修学旅行のときに買ってしまった奴。まさかこんな形で役に立つとは。卑怯？そんなの知るか！

「うらあああああ！」

思いつき振り回す。狙いは顔面。これで魔法使ってたらいつ多分死ぬな。

ガシッ！

確かに当たった。手ごたえもあるし、完全に木刀が頬に入っているのは俺からでも見える。

ああ、こりゃ魔法だ。間違いなく。

「ぬるいわー！」

「ふっふっ！」

思いつき腹を殴られて5メートルほどぶっ飛ぶ。どうやら俺の攻撃は全く聞いていないようだ。にしてもこいつ、突きが重いな。洲王の時とはまた違った痛みだ。

「まさか武器まで使ってくるとは、見損なっただぞ蛇又北路」

そついう火之迦具の顔には全く傷らしい傷は見当たらなかった。武

器よりよっぽどそっちの方が酷いだろ。

「……あんたも防具つけてるようなもんじゃないか。どうしたんだ？その顔」

「気合だ」

うん、君ならそう答えると確信していたさ。でもそれは気合とがでどうにかなるレベルじゃないからね。

「そっか…うらあああああ！」

俺は何とかさっきの攻撃のときに手放さなかった木刀を突く様にして正偽せ攻撃する。まあ所謂奇襲って奴だ。不意打ちとも言っ

「だからぬるいと言っているだろう！」

正偽は俺の木刀に対して垂直に、真っ向から殴ってきた。しかしいくらなんでも強度が違う。殴って木刀を止めることは難しいだろう。

バキバキッ！

俺の木刀が三つに割れた。

正偽は端っから木刀を破壊するつもりで殴っていたのか。なんて破壊力。人間じゃない。

「他愛も無いな。さあ歯を食いしばれ、貴様に正義の鉄槌を食らわせてやる」

「ま、待って！ちょっと話を聞いて！」

寸前のところで巳月が制止する。まあこいつが魔法使いだって言う

証拠も整ったことだしもう戦う理由は無いのか。

「すまぬなお嬢さん、話はいいつに鉄槌を食らわせてからでも遅くはないだろう?」

「あつ、いや、そういう訳にも…」

「うらあああああ!」

巳月の話きいちゃいねえ! 問答無用で殴ってきやがった!

「うおおおお!」

なんとか避ける。

「巳月! 多分こいつ性格的に黙らせないと言つ事聞かねえぞ!」

「そんな事言つたつてあんた勝てるの?」

「無理! 巳月は魔法今使える!」

「パパに止められてるからできないわ」

「うりゃあああ!」

「うわっ!」

今のは肩に少し当たった。肩が外れそうだ。

ていつか今会話の中に“魔法” って出てきたじゃねえか! 聞いとけ!

「避けるのだけは得意なようだな蛇又北路お!」

「うるせえ! 誰の所為だと思つてんだ!」

俺は殴ってくる火之迦具を前進するように避け、体重の乗っている、今俺を殴ろうとした右手の二の腕あたりを必死に掴む。

にしてもあの筋力のわりに腕は比較的細いんだな。今はどうでも良いけど。

「何をする蛇又！我輩に攻撃は効かぬぞ！」

「知ってるわ！」

俺はそう言っつて、ポケットの中に入っていたからしを取り出す。右手と口ですばやく開ける。ただしこれは筋肉硬化系の魔法だった場合しか通用しない。防御系の魔法を使っていたら「なんだこいつ？」みたいな反応になることは必須だ。

でも俺はそれは無いと確信していた。

やべっ、ちよつと口の中に入っちゃった。かれえ。

「蛇又！何をする！」

火之迦具が離れようとするが、その前に俺は行動を起こす。

「うらあああああ！！！」

……まあ別に掛け声が必要な物じゃない。というかそれほどかっこよくない。ただ火之迦具の目からしを振りかけてやっただけ。筋肉硬化でも流石に目の攻撃までは防げないだろ。まあ実際これ攻撃じゃないしね。

にしても想像するだけで痛そうだな。

「ぎゃあああああああ！！！」

実際めちゃくちゃ痛そうにしていた。

【第十三話】 それはリカントロープとも言っ

「ふむ。そう言うことだったのか。では殴ってしまったってすまなかつたな、蛇又。しかしぬしらはやり過ぎという言葉を知らぬのか？ 多少なりとも我輩は憤慨しているぞ。ここは誠意をこめた謝罪を要求する」

俺の話聞いた火之迦具は開口一番そう言った。あんまり怒ってないみたいで良かったけど、そんな真つ赤な目で真面目なこと言われてもこっちは笑ってしまいそうだ。

まあ俺の所為なんだけど。

「ごめん。火之迦具」

「我輩は正偽と呼んでくれ。名前の方が気に入っておる」

「そう、じゃあ俺も北路でいいよ」

「そうか、ではホクロ」

……男子はみんなカタカナで呼ばなければいけない決まりでもあるのだろうか？

「ホクロ、お隣のお嬢さんが先程から何か言いたそうにしているのだが」

隣を見るとガツチガチの巳月が何かしゃべりたそうに口をパクパク動かしていた。

うわ、なんか酸欠の魚みてえ。

というか初対面の人間と喋るのここまで緊張するかよ。

そういえば鉾跡の時はそんなでも無かったのにな。それは鉾跡コミユニケーション能力が理由かな？

「ははははじめまししして！みみみつつみつつつ」

駄目だ。いつまで経っても“き”が言えない。

「巳月、落ち着いて喋れ。深呼吸だ、はい、ひひ、ふー」
「ひっひっふー」

なんか違ったかな？まあいいや。ちゃんと落ち着いて自己紹介できたいだし。

「おや、五月雨とな？」

「ああ、こいつの父親五月雨工広さんだ」

最初は言おうか迷ったが、隣を見れば巳月が必死に『こつひろ』と言おうとしてたので（口だけで言葉になってなかった）代わりに言っただけだ。

「なんと！道理で魔法も知っている訳か！ではホク口は魔法使えるのか？」

「一応使えるけどな。ただ俺は正規の魔法使いじゃねえ犯罪者だ。それで言えば正偽もそうだろう？」

「いや、我輩は違う」

え？どういこと？

そう言おうとしたが巳月の叫び声によって遮られてしまった。

って叫び声？

「きゃー！ー！ー！ー！！！！助けて！」

お前そんなでかい声出せたのかよ。

場合が場合でなかったら俺はそんなことを言っていただろう。だがしかしそんなこと言ってられなかった。

「ちょ！うるさい！お前黙ってる！」

巳月を担いでいる男はそう零した。

そう、巳月は今一人の男によって攫われていた。

スーツを着た30代後半に見える巳月を攫っている男、完全に魔法使いだ。

だって空を飛んでいるんだもの。

いや、正確には空を見えない階段でも上るかのように走っているわけだが、そんなものこの状況なら同じようなものである。

多分、あの靴が魔器なのだろう。

ちなみに巳月は肩に担ぐような形で運ばれている。あいつ軽そうだもんな。もしくは筋肉強化系の魔法でも使っているか。なんにせよ山賊みたいな風景だ。まさか実際に見られるとは思ってなかったけど。

なんか見てみると間抜けな風景だよなあ、効果音がもしあるなら絶対にえっちらおっちらだ。これじゃあ緊張感もあったもんじゃねえ。

「長いわ！そんな描写どうでも良いからさっさと助けんかい！」

結構離れてしまった巳月が大きな声で言う。

「あ！すまーん！でも俺空なんて飛べねえぞ！どうする！？というか巳月魔法使えないの！？」

対して俺もでかい声。喉が痛いな。

まあ空飛ぶような魔法も無いことは無いのだがそれを今から書き始めようとすると10分以上掛かってしまう。それじゃあ本末転倒だろう。

「今パパに魔法使えないように細工されてるのー……………」

後半からは遠くなってしまった所為か聞こえなかった。そういえばさっきもそんなこと言ってたな。五月雨父め、余計なことを。

ふむ、ではどうしようか。

「ホクロ！？何をそんなに落ち着いているのだ！？友人がたったいま攫われたのだろう！？」

ああ、正偽から見るとそう見えるのか。ちゃんと対策考えてたんだけどな。

「追っぞー！！」

正偽が言い、俺も仕方なく走り出す。どうやら目は治ってるみたい

だし。

にしても空と地面の差は大きい。なんせ障害物が無いのだから。まああっちもそれを分かっているわざわざ人がいるときに攫ったのだろう。

「そういえば正偽、移動系の魔法って使える？」

走りながら俺は聞く。

「残念ながら。使えないことはないのだが今すぐには無理だし、そもそも我輩のは威力そのものが低い」

「そうか、まああんまり期待してなかったけど」

魔器を持つてる高校生なんて聞いたこと無い。……あ、巳月。

「目的はなんだろうな？」

「さあ？まああの五月雨工広の娘なんだからいくらでも理由はあるだろ。個人的にはお金が有力かな？あいつ貧乏そうだし」

「魔法使える輩は就職には困らなそうだが」

「大きな金が欲しいと思ったんじゃないの？まあ犯罪者の心理なんざしらねーよ」

そういえば俺も犯罪者だったなー。まあ罪の重さが違っつてことで。

そうこうしている内に巳月達との距離がどんどん離れてゆく。もう少しで見失ってしまいそうだ。

「しっかしまあこれは本格的にやばいかもな」

「……仕方ない。ホク口、最後の手段だ。もし我輩がこの首輪を付したら理性は1分と持たん。その前に我輩にもう一度この首輪を付

けてくれ」

なにやら深刻そうな顔をして正偽が言う。

あ、あんた首輪なんてしてただ。気づかなかったよ。というかわつこいいなそれ。首輪というよりはネックレスとかそこらへんの物だと思うけど。

「うん？なに？いきなり何を言い出してるの？もう少し分かりやすく言って」

「すまん。そんな時間は無い。そして事が始まれば嫌でも分かる」

正偽は首輪に手を掛ける。

「軽蔑しないでくれ」

そう言うと同時に正偽は首輪を外す。

「うっうっ！……うっうっうっうっうっうっあああああああああ
！！」

突然正偽が悶えだした。

そしてその体には

犬らしい黒々とした毛。

頭にはまぎれも無い犬耳。

身長も30センチばかり伸びた。

眼光も鋭い。

最早人間の形をしてない指には尖った鉤爪。

大きく突き出した口には鋭い犬歯が並んでいる。

そして犬のような遠吠え。

その体は、紛れも無く狼男だった。

【第十四話】　そこはどうでもいだろ

戦慄した。驚愕した。恐怖した。戦いた。震戦した。震え上がった。でもそれ以上に、

興奮した。

「うおおおおー！！すげー！！狼男！？初めて見た！というか実在してたんだ！」

「……ぬしはそういう反応なのだな」

狼の姿になった正偽が言う。

声が低くなっていてかっこいい。でもそのはち切れんばかりの制服はどうかと思う。せめて上だけでも脱いで欲しかったな。なんかこう、筋肉より毛がふっさふさだから制服着てないところとの体積の差が激しい。それに見えていて窮屈そう。

「ん？なんか問題あったか？」

「いや、何も無い。ではこれを持っていてくれ。これがないと元に戻れぬ」

そう言っつて首輪を投げよこしてくる。

いいのかなあ？なんだか無くしちゃいそうなんだけど。

「まあすぐに元に戻るから問題ない。我輩が持っていたほうが今は危ないでな」

「ん、じゃあ持つておくよ。で？これからどうすんの？その姿だと空でも飛べるの？」

まああの男にも多少同情するよ。だって空のお散歩してたらいきなり後ろから狼が現れてぶん殴られるんだぜ？お化け屋敷なんて比にならないくらい恐いつてーの。

「おうーい。大丈夫かあ？」

俺は小走りで巳月と正偽に駆け寄った。隣で男が血を流してるが気にしない。まあ死んでねーんじゃねえの？

ちなみにこの「大丈夫かあ？」は主には攫われた巳月に言ったのだが、意外にもそれに答えたのは正偽だった。

「まだ大丈夫だが、早く首輪を返してくれ」

実を言うと火之迦具正偽狼バージョンをもうちよっと見てたかったが仕方がない。ここで渋って正偽に怒られてもしたら面白くない。それにまた見せてもらえばいい。今度は写メ撮ろう。そっだ、今度はちゃんと上着は脱いでもらおう。まあ毛があるから全裸でも大丈夫かもしれないしな。あ、でも本人が嫌がるかなあ？どうだろう？一応聞いてみよう。写メと上半身裸は決定事項で。

「いいから早く返してくれぬか？」

「あ、悪い悪い」

聞く前に正偽が随分苦しそうだったので返してやることにした。思考時間が長すぎたか。

正偽が大きな鍵爪を器用に使って首輪をはめるとあら不思議、2m以上あった身長が元に戻り体中を覆っていたイヌ科特有の毛も引い

た。

まあこれで戻らなかつたら困るんだけど。

「にしても驚いたわね」

ひどく疲れた表情の巳月が正偽を見ながら言う。多分攫われたことではなく正偽の体質についてだろう。

「あんた、もしかしなくても狼男よね」

「違う」

おい、なんで否定すんだよ。完全に狼男だったじゃん。今から隠し通そうとしたって無駄だろうが。

「我輩は誇り高きワーウルフだっ！」

「「同じだよ！」」

人生初、巳月とコラボ。

「しかし我輩はこっちの方が気に入っておるのだが」

「どっちでもいいわ、んなこと。にしても便利なもんだな、さつき木刀ぶち破った怪力もそれか？」

「うーむ、あまり便利という物ではないのだがな。昼間と新月の日には変化でぬし、まあだが確かに怪力はほとんど狼の力の分が大きいのは否定できぬな。我輩も結構鍛えておるのだが」

そう言つて正偽が制服を捲くり力こぶを見せる。

確かに鍛えてるみたいだね。でも別にそういうのいらなから。変なところで意地っ張りだなこいつ。

「ふーん、じゃあお前の魔法……」

「我輩のことより今はこいつの方が優先事項じゃろう」

あごで地面にのびている男を指す。ああ、すっかり忘れてた。死んでないよな、こいつ。

「起きなさい」

「げふっ」

巳月がおもいつきり腹を蹴る。まあ自分を攫った相手だから怒りがあるのは仕方ないけれど、普通こつこつという時って怖がるもんじゃない？だからお前は可愛くないんだ。

「んん、……う、うわあ！」

あ、起きた。

「よお、おっさん」

「わわわわわ私はなにも知らんぞお！そそそ組織なんんて入ってないし、ここれは命令でも何でもないぞおおお！」

どうやら正偽の狼の姿がトラウマになったらしい。こっちは何も聞いていないのにペラペラ喋りだす。楽で仕方ない。

「なあ正偽、組織ってなんだ？」

「さあ？我輩にはさっぱり。五月雨殿は？」

「私にも分からないわ。学生って言うならいくつか外国でそういう組織もあつたりするんだけどね。ただこの歳じゃあねえ」

この男は三十路を大幅に超え、もうすぐ四十代に突入しようとして

いるような年齢だ。多分。憶測だけれども。これで二十代とかだったら失礼極まりないな。

「じゃあ本人に聞いてみるか」

「知らないぞお！私は何も知らない！」

「じゃあ何で巳月を攫ったりしたんだよ」

「うっ……」

「まあここはプロに任せるのが無難じゃない？」

携帯電話を片手に巳月が言う。まあその通りだな。

それから十数分後。

連盟の警護部の人二人ほど来てその男をどこかへ連れ去ってしまった。

「俺らには驚くほど事情徴収も何もなかったな」

「そうね、私がいだから遠慮したのかも」

「しかし何があったかぐらいは聞かれてもよさそうなんだがな。電話では詳しくは話していないのだろうか？」

「まあでも記憶を見る魔法もあるからな。そういうのはいらないんだろ」

「でもそれだと正偽の体質がばれちゃうわね」

「うむ？ワールフのことか？別段隠しているわけではないので気にするな。学校には言っていないが」

「……それはどうかと思うぞ」

そんな感じで話していると、

「ちよつと君達だね？さつき電話をしたのは」

こんな風にこえが掛かった。

みると、連盟の記章を付けた人物が三人。はて、何の用かな？

「我々はこういう者だ。君達から連絡を受けてきた」

そう言つて真ん中の一番若い人が連盟のカードを見せてきた。そこには写真、名前とともに『魔法連盟日本支部警護部』と書かれていた。

あれ？もしかしてさっきの男を引き取りに来た？でもさつき警護部の人来たよな。あれ？その時は自己紹介とかしなかったしな。でももしかして、じゃあ……

「騙されたー！ー！」

今回の教訓。人を無闇に信用してはいけません。

【第十五話】 名前を忘れるのは失礼だ

もしかしたらみなさんは忘れてるかもしれないが、俺は魔法薬学部を目指している。

あ、いや、忘れたかたらなんだという話ではない。今思い出してもえれば結構なことである。

まあその俺が目指している魔法薬学部なのだが、これがなかなかどうして偏差値が高い。あと俺の偏差値を5つ6つ上げないと到底届きそうも無いぐらいだ。まあ魔法を扱うのだから当たり前が。

そんな訳で俺は今昼休みにも関わらず勉強をしている。まあ今回は提出物を出さなければいけないと言うこともあるのだが。というかそれが大きい。

まあ要するにだ。何を言いたいのかというところ。

「へえ、それは大変だったねえ」

「でもそれからが大変だったのよ。パパにはれたから護衛をつけるって言い出してそれ断るので大変だったわ。今日の朝まで言っただし」

「それだけ愛されてるってことじゃない。僕は羨ましいとおもっけどなあ」

「ただ過保護なだけよ」

「うっせー!!!」

喋るならどっか行って喋れ！なんでわざわざ勉強してる奴の前で雑談！？嫌がらせ以外の何物でもねえだろ！

「うん、どうしたのさホク口。急に大声なんか出して」

「鼓膜が痛いわ」

「お前ら騒がしいんだよ！雑談なら別の場所でやれ！」

「やだなあ。ここは僕の席だよ？文句を言われる筋合いはないねえ」

「うっ」

「それに今それやってる方がどうかと思うけど」

「ぐっ」

「まあいいじゃん。ホクロも一緒に喋ろうよ。ねえ知ってる？今日火之迦具くんが休んでるの」

「え？そうだったの」

「なんだか上手く鉢跡の口車に乗せられる形になってしまったがそれは些細な問題だな。

ふむ。正偽が休みか。昨日の狼男の後遺症つてのがあたりすんのかな？

「まあどうやら五月雨さんを襲った人を探してるみたいだけどねえ」

……あいつ、なんとというか、やっぱり正偽だな。どうせロクな手がかりも無いだろ。絶対町を徘徊して探し回ってるだけだろ。そんなんで見つかるか！

「ああ、でも今日は諦めてそろそろ学校戻ってくるらしいよ」

「意外と諦めるの早いんだな。まあ勉強もあるしな。っていうかなんでそんなこと知ってるんの？また電話でもした？」

「いや、『ついた』に書いてあった」

「あいつそんなのやってんの!？」

まあ悪くは無いよ！そして高校生だから普通だとも思っつよ！でも正偽が!？似合わねえ！

「あいつ文明の利器使ってることなんか想像できねえな。下手すりゃ携帯すら持ってないかなって思ってたもの。いや、存在を認知してただけで相当の驚きだ」

俺ん中ではそういうイメージ。

「それはちょっと偏見だと思つよ……」

む？ 鋳跡が少し引いているような気がするぞ。気のせいか？

「ねえ北路」

と、ここで話しかけてくるのはまあ漢字“北路”は今まで二人しか呼んでないからな。ここが学校ならもうそれは一人に絞られるだろうん、そう、巳月。

なんかまた面倒こと言い出しそうで怖い。

「あ、そうだ鋳跡、昨日のドラマ見たー？」

俺の結論。スルー。

「無視すんな。殴るぞ。もしくは泣くぞ」

「二個目はなかなか卑怯な手だな」

「いいのよ。涙は女の武器だってまえにテレビで言ってた気がするわ」

「テレビかよ」

スルー 作戦失敗。

「放課後私のところまで来て。紹介しないといけない人がいるから」

「え？なにそれ？」

そこからはなぜかしら答えてくれなかった。また妙なことでも企んでんじゃねえだろうな。

掃除時間。

ふむ。しかし紹介したい人がいるか。よもやこの期に及んでお父上様とかじゃねえだろうな。一回会ってるしそれはねえか。じゃあお母上様？ってなんでさっきから巳月のご親戚ばかりなんだよ俺の思考は。

じゃああれだ。彼氏でも出来たか。ってそれこそ無いわ！びっくりした！。俺ってばなんと言うことを思いついたのだ。咄嗟に突込みが20個ほど浮かんだわ。

そもそも出来たところで俺に言う必要なんか無いしな。俺もどういう反応すればいいのやら。「あ、………そうですか………」見たいな感じになることは必至だ。

「なあちよつとちよつと黒子」

誰かがそう呼んでいる気がする。俺はとりあえずそいつを殴ってから話を聞くことにした。

「いだっ！いきなり何すんだ！」

「黙れ。そのあだ名で呼ぶなと何度回言えばわかるんだよ」

そこにはクラスメイトがいた。中肉中背、坊主頭の野球部の奴。えーと、名前なんだっけ？たしか野球と関係ある名前だったような…。

「野球バットだっけ？」

「柳生羽人やぎゅうほねとだよ！いい加減クラスメイトの名前ぐらい覚えろ！というか何だその野球するために生まれてきたみたいな名前は！」

「いいじゃん実際野球部なんだし」

「いいわけあるか！柳生はまだ響きが似てるから許せるけど名前は完全に羽を音読みしてるじゃねえか！無理やりっつーか俺の名前知ってねーと出来ないだろ！」

うーん。なんとなく覚えてたから。

「で、本題に早く入って。掃除時間ももう終わるぜ」

「くっ！貴様に言われるとなんか釈然としないがまあいいだろう」

「なんで上から目線なんだよ」

「お前、五月雨巳月と最近仲良くね？」

まあそんな感じの質問だとは思ってたさ。あいつ有名人だからね。悪い方向に。

そういえば鉱跡と正偽の二人は普通にあいつ受け入れてたな。まあ二人とも人格者だしそもそもそういう噂を気にしない奴だっている。鉱跡は博愛主義だし、正偽はそもそもそういう噂事態を嫌っているだろうしな。

「まあそうだな。でも別に特別仲良いってわけじゃないけど。お前

らと同じ扱いだぞ」

時々女と思えねーしな。

まあこんな感じで受け流すのが正解だろ。下手に波風立てたくない。

「え？お前、五月雨巴月と付き合ってるんじゃないの？」

「はあああああああああ！！？？」

受け流せなかった。というか受け流してはいけないだろ。これは俺は柳生の胸倉を掴む。

「どういうことだゴラアア！！そんなこと誰が言ってた！！」

「しらねえよ！噂だって噂！」

「チツ！」

離してやった。

今日の紹介したい人がいる発言が原因がそれとも前の約束忘れたの騒動が原因かもしくは他にあるのか知らないがどうやら大変なことになっている。うわー、面倒臭え。

とにかく、今度からは周りの目とか気にして生きていこう。

「遅いわよ」

放課後、校門前。

開口一番巳月はそういった。まだ2分しか遅刻してねえじゃん。

「私を2分も待たせたら普通は減給もしくは謹慎ものよ」

お偉いさんの娘が言うもんだからちつとも笑えない。というかあの人格者の工広さんからどうやってこれが生まれたんだ。生命の神秘だな。

「そんなの気にすんなよ。で、紹介したい人とは？」

「つかぶっちゃけここに来てる時点で分かってただけだね。だってもうすでに巳月の隣に人がいるんだもの。ああこいつだなんてそりゃあ予想はつくさ。」

巳月の隣に立っている男、歳は二十代前半、身長は180ぐらい。まあなかなかかい。痩せ型。顔は二枚目。うわ、羨ましい！

「初めまして、蛇又北路様。私は嗽鏡之助つがいきやうのすけと申します」

そいつが前に出で喋った。

【第十六話】 人が良いのも短所だな

「はあ、嗽さんですか。なんだか風予防の為に薬や水を口に含んで口内を洗浄する行為みたいな名前ですね」

「というより、まんまその嗽ですね」

そう言っただけの用意したお茶をおいしそうに飲む。この人は何しても絵になるな。キラキラオーラが出ている気がする。

「この苗字はあまり好きでは無いのでしてね。出来れば鏡之助とおよび下さい。お嬢様もそう呼んで下さってますし」

お嬢様「巳月な。まあ分かってると思うけど一応。」

しかしまあお嬢様というところの某有名執事アニメを思い出してしまうのは俺だけだろうか。鏡之助さんも髪青にしてみればいいのに。多分似合う。

「そおか？漢字はかっこいいと思うけど」

「僕には到底思えませんね。しかし蛇又様は良いですよね…。蛇つて。蛇つて！なんかこうスタイリッシュじゃないですか！」

「ああ、そう？そりゃどうも……」

何故だか自分の苗字を異常に嫌悪している様子の嗽…。じゃないや鏡之助さん。

「そういえば、そろそろ暗いわね。照明つけて良い？それともまだ止められてる？」

「残念。まだ」

巳月め、痛いところを突いてくるな。

今の会話で分かってもらえたとは思うが、ここは俺の家だ。

前回の洲王の時は相手の言うとおりにして危うく殺されるところだったからな。今度は話し合いの場所をこっちから指定させてもらった。人払いも結界も事前の準備が無いとできないだろうし、このアパートには師匠が住んでるから安心だ。

まあいざとなったら助けってくれるかどうかかわかないけれど。

「はあ！？電気代ぐらいちゃんと払いなさいよ！」

なんでキレんだよ。お前に関係ないだろ。暗いのぐらい我慢しろ。あ、なんか暗いのぐらいって駄洒落みたいだ。というかあれか？これからちよくちよく遊びにでも来るつもりか？勘弁！

「仕送り来るのが来週なんだよ。それでも頑張ってガス代払ったんだから褒めて欲しいね！」

別に褒められることじゃないが。

因みにガス代は師匠からお金借りました。やっぱりガス出ないと困るから。

「お嬢様、大丈夫ですよ。光源なら僕が用意します」

そういつて鏡之助さんが取り出したのは何か粉末が入った小瓶。それを少しだけ手のひらに出し、息を吹きかけ、粉末を飛ばした。

おい、部屋が汚くなるだろ。

「綺麗……」

いや、汚くなるんだって。俺がそう言おうと思ったとき、いや、巴月が綺麗と言ったんだからもっと前からなってるんだろが、部屋全体が光りだした。

その光は微かにオレンジ色で、しかし照らすという役割はしっかりと果たしていた。

もちろん蛇又家の電気が復活したわけじゃない。

「ヒカリダケ……ですか」

「ほう、よくご存知ですね」

鏡之助さんが感心したように呟いた。

「魔法的な細工をしたヒカリダケを乾燥させ、すり潰して粉末にして、呼吸と共に意思をかけてやれば、どこにも光源の見当たらない幻想的な光を作り出すことが出来る。……と、前にじいちゃんに教えてもらったことがあったような気がします」

「テストならば100点ですね」

また、鏡之助さんがにっこりと笑いながら言う。

うーん。一体この笑顔で何人の女性を落としてきたことか。

「てか、なんでそんなの持ってるんですか？そう言うのは特別な魔法の儀式にしか使わないと思うんですけど」

照明代わりにするなんて邪道もいいとこだ。知るところに知られれば怨まれかねない。

「私はお嬢様の側近です。これぐらい持っていてもおかしくありませんよ？」

いや、おかしいとおもいますが。

そんな風に言うのは憚られたので曖昧に頷いてやることにした。なんだか話しを逸らされた気がしてならない。

「だれがそんなの認めた」

そんな風にいうのは巳月だ。てか、そういえばこの話題を話し合うためにここに来たんだったよな。

「嫌ですねえ。僕と、そして五月雨工広様ですよ？」

「私に護衛なんて必要ない！」

「しかしまた先日のようなことがあったら困りますし」

「だから北路がいるから大丈夫って何回言えばわかるのよ！その時だって北路に助けてもらったわ！」

先日のこと、とは勿論巳月誘拐事件のことである。まあ確かにあれは危なかったもんね。

でもあの時巳月を助けたのは狼男バージンの正偽なんだけだな。まあこれ以上なんか言うと話がややこしくなりそうだからいいや。

「しかし常に一緒に言うわけではないのでしょうか？」

「私と北路は常に一緒に」

んなわけあるかああああああ！！

お前がそんなスタンスだから変な噂とかも流れるんだぞ！

「ですが今度は何時、どんな敵が襲ってくるか分かりませんよ？」

「大丈夫。北路は強いから。そして私も強いから」

うん。お前が強いのは知ってるけどね。俺は全然だぞ。下手すりゃ犬にも負ける。

「ちょ、巳月お前こっち来い」

俺はこれ以上の傷口の拡大を阻止するために巳月を俺たちがいた居間から拉致し、隣の部屋に出す。(何気ここ二部屋あるのだ)

「なあ別にいいじゃん。護衛ぐらい。あの人良い人そうだし」

「やーよ。私あいつ嫌いだもん」

「あのなあ」

「確かに良い人であることは認めるわ。実力もあるしね。だが、あいつお節介過ぎるのよ。いや、心配性過ぎるのよ」

「どういう意味だ？」

「前になんかの用事で家に1週間ほど誰もいない時があったのよ。もちろんお手伝いさんもね。その時に鏡之助が来たんだけど」

お手伝いさんいるんだ。……すごいな。

「ねえ聞いている？」

「おお、聞いているぞ」

「鏡之助がきたんだけど、次の日の学校休まさせられたわ」

「何でまた」

「雨が降ったからだってさ」

……南の国の大王の息子がよ。
甘やかすにも程がある。甘やかされた本人が迷惑するほどに。

「鏡之助曰く、風引くかもしれないとか地面が濡れてて危ないとか
言ってたわ」

「んなもん車で学校いけよ」

ここに来る時は近いのに車移動だったから免許は持つてるはずだ。

「制動距離が伸びるから危ないんだってさ」

「……………」

筋金入りだな。

「だからお願い！鏡之助説得するの手伝って！」

巳月からお願いされるのは初めてだな。悪い気分ではない。むしろ
言い気分。

「だが断る」

「なんでよー！」

めんどくさい。お前のことはぶっちゃけどうでも良い。というかホ
ントに危ないんだからそのぐらい我慢しろ。まあ出席日数足りなく
なっちゃうかもしれないけど。

俺は鏡之助さんに巳月をお願いするためにさっきの居間へ戻る。

「わかりましたあ！」

するとそこには、なぜか気合充分の鏡之助さんが立っていた。

「お嬢様がそこまで言うなら仕方ありません！僕は諦めましょう！しかし！それは僕より蛇又様のほうが実力が上だった場合のみです！」

うわ。何だこの人。なんかとんでもない方向に持っていくとしてないか？お願いだから止めてくれ。俺は鏡之助さんに任そうとしているんだから。まず人の話を聞こう。

「蛇又北路様！勝負です！」

やっばりな！

【第十七話】 実は俺、元陸上部です

「おはようございますお嬢様、今日も良い天気ですね。まさに絶好の登校日和とはこのことでしょう！」

「おはよう、北路」

「……ああ、おは」

軽く巳月に無視されてる鏡之助さんを哀れむ気持ちも無視してる巳月に憤慨する気持ちも俺は普通の人間だから多少は持ち合わせているのだが、今はそれどころじゃない。眠くてしゃーない。

ここは巳月邸前、時間は7時半丁度。何で俺がこんなことしなくちゃいけないんだ。ねむいったら無い。

まあ勿論俺がこんなこと率先してするはずも無く、それには深い、じゃないや、馬鹿な理由があったり無かったりするわけです。

四日前。

「どつしてこうなるかね？」

「さあ？とりあえず、全力で勝ちにいきなさい。まけたら承知しないから」

ここは嗽：鏡之助さんが作り出した仮想空間。まあここまで作るのに1時間かかって俺も鏡之助さんもだいぶ疲れたみたい。

1辺が50mの正方形の箱の中に入ってる感じ。色は青。

「ねえ鏡之助さん、提案があるんだけど」

「ん？なんですか？」

「魔法以外で勝負しない？」

ここまでしといて信じられないかもしれないが、俺は日常生活で魔法を使うのは真っ平御免だ。せめて大学に入るまでは極力使わないと心に決めている。どうせ巳月には悪いがわざと負けるつもりだし、それに痛いのはいやだ。

「なぜですか？」

まあここらへんは当然の疑問。俺はあらかじめ用意してた回答をぶつける。

「考えても見てくださいよ、暴力では何も解決しませんよ？それにかのヴィクトル・ポアソンも言っていました『本当の強さとは魔法を使わずに相手に降伏させることだ』と。ですからいかなる相手が来てもまずは魔法を使わないことが良いことだと思つのです。それをすぐに暴力に変換してしまつては臭い物に蓋の原理です。復讐の輪廻です」

「北路……つぎい……」

うるせ、なんと言おうと関係あるか。

「分かりました。ではこうしましょう」

突然鏡之助さんが声をかけてきた。見ると、さっき1時間かけてつくった部屋が壊れかけている。鏡之助さんが壊しているのだろう。よかった、話し合いが通じたようだ。

「分かりました。蛇又様の言うことも一理あります。ではこうしましょう」

あれ？またなんか妙なことを考えてない？大丈夫かな？俺的にはトップ推奨。

「1週間お嬢様の警護をして、そのあとより、お嬢様の護衛に向いていたほうをお嬢様に決めてもらうことにしましょう！」

うわ、やっぱり面倒そうなこと考えてたよ。

「あー、それよりも……」

「ふっ、構わないわ！」

お前が言うなや巳月いいいい！！確かにお前が判定員だと確実に俺勝つけどね！それじゃあ駄目なんだよ！おもに俺が！

「じゃあ決まりですね」

ここで冒頭場面。

まあ面倒な理由は多々あれど、俺のアパートから学校までは前に言った通り徒歩で10分という好条件な場所にあるのだ。それをわざわざ遠回りしてまでなんかの刀女（久しぶりに使った）の送り迎えなんかしなくちゃいけないんだ。面倒だったらない。

しかしまあこいつん家でけーな。俺の実家が5個は入りそう。流石だな、工広さん。

「ささっ、私の車にお乗りください」

「はい、あざーす」

「……」

あ、勿論ちゃんと返事した方が俺な。

しかし俺は最近、チャリで巳月ん家まで行ってそこから鏡之助さんの運転する車で学校まで行って帰るときは鏡之助さんの車で巳月ん家まで帰ってそこからチャリでっていうなんとも不効率な生活を送っている。

「ではお嬢様、お気をつけて学業に励んでください」

「あじゃーしたー」

「……」

勿論……言わなくていいか。

「あ、お嬢様、お待ちください」

「……」

「おい、呼ばれてんぞ」

流石に鏡之助さんが可哀想なので無視を決め込んでいる巳月に呼びかける。そうすると巳月は嫌々鏡之助さんの方へ振り向いた。鏡之助さん、何か持ってらっしゃる。

「万一、何かあったときのため、これを持っていてください。気休め程度にはなるでしょう」

そういつて鏡之助さんが渡してきたのは袋に包まれている何かだった。サイズは縦が20センチぐらいの細長い円柱っぽい形をしている。まあ袋の上からなのでよく分からないが。

「で、それなに？」

俺達が校門をくぐった後、巳月に聞く。巳月は無言でその包みを外していく。

カッターだった。

「文房具かよ！」

……気休めになるか？

そして言い忘れていたが巳月と一緒に登校してるわけだからなんだか白い目で見られたり、俺も巻き添いで恐がられたりとかもしてんだけど、まあ最近気にしないことにした。

耐性がついていくのが悲しい。

ちなみに俺と巳月が付き合ってるんじゃない？説は俺もさることながら鉦跡が結構必死に否定しているため、そこまでの被害は出ていな

い。俺には。
にしても鉦跡さんのネットワークは本当に役に立つ。半分分けてもらいたいぐらいだ。あと人望も。

そいで4時間目、体育。

男女混合マラソン。誰だこんな地獄みたいなこと考えた奴。

「ぜえ、ぜえ、ぜえ、……もう駄目、死ぬ」

「お前まだ二キロしか走ってないぞ。それでも元陸上部か」

「うるせえ、…俺は短距離専門だったんだよ」

それに一応前の方だ。今現在帰宅部にしては頑張ってるほうだと思う。

鉦跡は体力が無いのか相当後方。あ、今女子に追い越された。

因みに今喋ってるやつは、……えーと、……野球バット。……みたいな？

「柳生羽人だ！いい加減覚える！」

流石野球部。これだけ走っても息が全然乱れてない。

「ってあれ？あれってもしかして五月雨さんじゃない？」

「ん？……あ、本当だ。ってあいつ遅すぎだろ」

因みにこのマラソン、学校の周りを走っているのだがここの学校を

一周すると大体1・5キロになるらしい(野球バット談)ほいで俺たちが今二週目と三分の一を過ぎた辺りだから、俺達が2キロ走る間に巳月の奴は500mしか走ってないことになる。

おい、ちゃんと走れよ。

「いやいやホクロ、どうやら五月雨ちゃんはちゃんと走ってるみたいだぜえい」

今度は別の声。

この気持ちの悪い感じの声の持ち主は残念ながら一人しか知らない。というか一人も知りたくない。有り体に言って嫌いだ。さっさと死ねば良いのに。

「……で、植釜うえがまどういうことだ？」

「ちょっと待とうか、なんか色々ホクロから殺意らしき物を感じるんだが、気のせいかい？」

「それなら大丈夫だ。全く気のせいじゃない」

「なあんだ。よかった……って全然良くないわ！」

やっぱりうぜえ。俺なんかもう足元にも及ばないぐらい。

「で、どういうこと？」

「ああ、そのことなんだがね」

そう言って無意味に前髪をかき上げる動作をする。この植釜と言う男、髪の毛がもりもりなのだ。そりゃあもう頑張れば何か物隠せるぐらいもりもりだ。

そのくせ女子には人気有り。殺してやるうか？

「いや、さつき俺っちもおかしいなあと思ってちよつと見に行っただけどよ、汗だくで今にも倒れそうだったぜい？ありや病気がい？」

「なぜ俺に聞く。んなこと知るか。にしても流石バスケットボール部だな、フットワークの軽いこつた。そのまま死ねばいいのに」

「おいしいいい！！仮にもお前の彼女の五月雨ちゃん心配してやってんだぞ！そんな扱いは無いんじゃないかい！？文脈関係ないし！」

五月蠅い。女子にもてる奴は男の敵だ。

「それにしても前半の台詞はどういうことだ？誰が誰の彼女だって？」

俺は植釜の胸倉を掴む。ただ、今走っている訳でこれだけのことで体力が相当削られてる。なんとも無駄な体力の消費。

「ええっ！？違うのかい！？」

「全く違う。何故そう言う話になったのか皆目見当もつかない」

どうやら鉢跡ネットワークも完璧ではないらしい。

というかこの会話絶対巳月に聞かれてるよな。巳月すぐそこだし。ただ後姿だから表情が見えない。怒っているのか？

バタンツ！

誰かの倒れる音がした。

見れば、前方数十メートル先に女の子が倒れている。まあ巳月と同じような後方組か。巳月よりはいくらかマシだが。

「想子ちゃん！？大丈夫かい！？」

どうやら植釜にはこの距離からでも女子を見分けられる特殊スキルがあるらしい。

まあ貧血かなにかかな？あの子体弱そうだし。

「って美穂子ちゃんに純花ちゃんに茲亞ちゃんまで！みんな一体どうしたの！？」

どうやらどんどん人が倒れてるらしい。

ってこれはちと異常じゃないか？魔法的な何かと考える方が無難か。

「植釜！柳生！巳月！息を止める！」

俺は咄嗟に近くにいた三人に声をかけた。

こういう不特定多数に効果がある魔法は数が限られている。多分だが奴らは倒れただけで死んではない筈。でないと目的が分からない。

そうしてくると、おのずと魔法は分かってくる。こういうのは数種類あるが基本全部時間制限ありで魔法が混ざってある空気を吸い込んだら気絶ってタイプ。

だったら息を止めていれば問題なし。まあその時間制限が何時終わるかかわかないけれど。

「くきゅー」

野球バット、撃沈。どうやら間に合わなかったようだ。

というかそんな可愛いこえ出すな。キモい。

「あー、三人も残っちゃったかー。それに内一人は五月雨巳月。まあ何とかなるか」

どうやら敵さんの登場のようだ。ということはもう息して良いってことか。

ちなみに敵さん、空中から“降ってきた”。今も空中に立っている。

「誰だあんたら」

「まあまあ、あんまりカリカリすんなって。おーい棧橋、頼むわ」
「御意」

敵は二人。そのうちの女で若い方、俺らとそんなに歳が変わらなさそうなほうが短く返事する。

「植釜、ちよつと助けを呼んできてくれ」

「はあ！？ちよつとこれどういこと！？理解が出来ないんだが！」
「理解しなくて良いから早く行け」

言葉遣いが荒くなってしまったのは焦っていた所為か。

しかし植釜が驚くのも無理は無いか。初めて魔法を見るんだったら相当の衝撃だろう。

「そうはさせないよー」

「展開」

そう若い方、たしかあいつは棧橋って言ってたっけ？その棧橋が何かを投げた。数は四。色は黒

それは全てがばらばらな方へ飛び、四つ全てで俺たちを取り囲むようにして止まった。止まったから見えた。それはチェスの駒、ポ

んだ。

「まずい！ポーンの外へ出る！」

「お、なかなか鋭いなーあんだ。でも遅いねー」

「困繞」

棧橋がそう言うと同時にそのポーンを柱にして結界が完成した。俺と巳月、上釜は勿論、敵の二人もその結界の中に居る。残念ながら今の俺では破壊できそうに無い。

「完了。歩兵の壁」
ポーンステップ

「にはははー。じゃあ降参してくれるかい？あ、もちろんここには人払いしてあるから間違っても助けが来るなんて思わないようにねー」

完璧なまでに絶望的だ。

【第十八話】 仲間割れってのはどうかと思う

二人の敵。

一人は男。20代前半ぐらいで、髪を茶色に染めている。全体的に軽い、今の若者のような服装だ。

二人目は女。俺たちと同じぐらいの年齢で、身長は巳月より少し大きいぐらい。あまり喋らない。確か男の方に棧橋と呼ばれていた。服装はどこぞのセーラー服。

が、今俺たちの前に浮かんでる。

「植釜、すまん」

「くへっ!?!」

俺は植釜の首をひねって気絶させる。案外簡単に落ちてよかった。最近こういうことやってなかったから自信なかったんだよな。

「あんた、何のために植釜助けたのよ……」

「しょうがないだろ、こういう状況じゃあ。本当は助けを呼んでもらおうかと思っただけけど、これじゃあ出来ないみたいだし」

「まあ確かにそうね」

現在敵の結界の中。一片が10mほどの小さな結界だ。これじゃあ敵の攻撃を避けることも難しい。しかし四方は壁囲まれているが天井は無い。それはこの魔法の性質か。まあでもこの壁縦にも10m以上あるから飛べない俺たちにとってはどっちでも一緒なんだけどね。雨が降ったら困るぐらい。

「北路、曉札は？」

「だれが体育の時間に持ち込むか」

いや、流石にこの間巳月が攫われたばかりだから警戒して作ってたんだけどね。まさか授業中に来られるとは思ってなかったし。それにもし妙なことがあっても正偽いるから大丈夫かなあ、とか思ってたんだけどね。

「正偽はこれ、参加してないじゃない」

うん、あいつ組だから別。因みに俺たちはB組。

「そつだ。鏡之助さんは？」

こんな時こそ鏡之助さん。こんな勝負もしてるんだし見てないということは無いだろう。さあ出てきてください！

「さつきから連絡とってるんだけど……出てくれないわ」

巳月が持つてるのは通信用のお札。巳月と鏡之助さんの間のみで通信が可能になる。

「にやははー。万策尽きたって感じ？ 因みにあのかっこいいお兄さんなら愛しの“お嬢様”を探してどこかに言っちゃったよー」
「どういうこと？」

「あんまり恐い顔しないでよー、お嬢さん。親切に教えといてあげるけど、通信用のお札って結構仕組みが雑でさ、横から介入したりとか出来たりすんのよ」

「よし、鏡之助のことは忘れましょ」

なかなか切り替えの早い女だった。

「ああ、いい奴だったよな……」

俺もだ。まあ俺はちょっとずれてる気がしないでもないが。

「で、北路。あれ何？」

巳月がポーンの結界を指差しながら言う。

「1956年ソビエトの物理学者ヴィクトール・コルチルノマンが作り出したチエスの駒を使った魔法式、通称シャトランジステップ。詠唱も殆ど必要なく強力な魔法が出来る反面、準備が死ぬほど面倒な上、駒が全て使い捨てだから殆ど普及しなかったんだが、まさか21世紀になって使う人がいるなんてびっくりだ」

「あなたの説明はクソ長い上にどうでも言い情報ばかりなのよ。で、最終的にどうなの？ あの魔法、厄介？」

「かなり」

「勝率は？」

「考えたくないね」

「にやははー。あんたもしかして専門家？ 詳しいねえ。どう？ ウチで働いてみない？」

男の方が笑いながらいった。完全に油断してやがるな。おっと、いつの間にか地面に足つけてるじゃないか。チャンス。

「誰が！」

殴りかかる。相手は男だし手加減は必要ないだろう。

「まあこつちとしても本気で誘ったわけじゃないんだけどねー」

かわされた。やばい！

「ぐふう！」

思いっきり腹を蹴られた。ぐぐ、超痛え。

俺はそのままその男の傍に倒れこんだ。あんまし動けそうに無い。なんだこいつ、顔に似合わず超強いぞ。

「うん？ これだけか？ まあ何でも良いや。棧橋、五月雨巳月を

頼んだわ」

「御意」

さっきから思ってるけど女の子で「御意」って言うのはどうかと思う。なんか変な感じ。

そんなことを思っていると、棧橋さんが今度はルークの駒を取り出した。

「展開。^{ルークステップ}城の巨兵」

棧橋さんがそう言うと同時に手から離れたルークの駒が大きくなり始めた。そして手が生え、足が出来、最終的に身長2mを越す立派な兵士になった。

そしてそのルークが腕を振りかぶる。狙いは勿論巳月……では無
く……俺？

「うおおおおおおお！ー！」

ぎりぎり飛んで避ける。

危なかった。どれぐらい危なかったかと言うと、今まで俺がいたところから半径3mにクレーターが出来るぐらい。俺死んじゃう。

「なにすんじゃ！俺まで巻き込むつもりだった!？」

男がわめいていた。

ああ、そういえば近くにあの男がいたから俺を狙えば必然的にあの男も危なくなるのか。って、あの棧橋って奴何がしたいんだよ。

「そいつ、危険」

「いや棧橋の方が危なかった！思想的に！」

「敵の殲滅優先」

「そのためには俺がどうなっても良いと!？」

「現木、危ないぞ」

成る程、うつつぎさんか。あの男の名前が分かってよかった。これで心置きなく殴れる。

と言うかこいつら戦闘中だって忘れてない？俺がここまで接近したのに気づかないなんて。

「うつつぎ死ねええええ!！」

「ぶばあ!」

よし。今度はクリーンヒット。

「巴月！カッター！」

「え？あ、はい!」

「うん？巴月、その腕のって?」

「え?」

「いや、いや。なんでもない」

巳月がカッターを投げてよこす。これは鏡之助さんが巳月の護身用として持たせた物。こっちは体育まで持ってきてみたいで良かった。しかしまあこれ。カッターといってもかなりゴツくてエグい形が。もうこれ文道具じゃないだろというような領域まで来ちゃってる。

これをどうするかと言うと勿論これを武器に戦えるわけが無い。あのルークに殴られて一発KOだ。だったら魔法で対抗するのみ。

俺はカッターを使って地面に線を入れる。俺と巳月、ポンステップ 棧橋とうつつぎと言う風に区分けするように。ここで敵の結界、歩兵の壁に書いた線を密着させることを忘れない。

うん、少し狭いが完全に線は引けた。

「宣言。」

ここに石碑の魔術に加筆の宣言をする。

四角の柱よ、結界の再構築を望む」

「不味い！ 現木とめろ！」

「ふえ？ 止めるってなにをだい？」

もう遅い。

すると、線を引いたところから四方の結界と同質の壁が作られた。つまり、俺たちと棧橋、うつつぎペアは完全に分かれたってこと。まあただの時間稼ぎだけだ。

「ちっ、……やってくれた」

「にははー。やるじゃん。なかなかどうして面白くなってきたぜ

い。にしてもこんな結界どうやって作ってんだい？ 見たところ棧橋のと似てるけど」

苦々しい顔の棧橋とは対照的に、うつつぎは面白そうな顔をしていた。お前本当に年上かよ。なんだか精神年齢は小学生ぐらいな感じがするぞ。

「似てるも何も同じ結界だ。教えてやるけど、この結界って結構仕組みが雑でさ、横から介入とか出来たりすんのよ」

俺は先程うつつぎに言われた様な口ぶりで返す。

しかしまあ事実じゃない。これは介入が出来ないからこそ、時間が掛かるのだ。それでも俺が出来た理由はこの棧橋って奴がまだ未熟だったのと一度に二つ魔法を発動させてるからだ。多分、ルークを出してなかったら介入の余地は無かった。

「まあいい。やれ」

ルークが動き出す。あ、そういえば居たねこいつ。利用しといてなんだけどすっかり忘れてたよ。

バガン！

結界を殴ると、大きく亀裂が走った。

「ちょっと北路！？ これ大丈夫なの！？ あと何発かで壊れそうなんだけど！」

「うん、予想外に強いな。いやあこれはきついかも」

「じゃあ何とかしなさい！」

「あー、うー、まあそうなんだけどさ、一応作戦はあるんだけどさ」

「なによ。はつきりいなさい」

「あー、できればっつーか絶対に巳月に手伝ってもらわなきゃいけないだよな」

「そりゃ私だつて魔法使いよ？ できる限りのことはするわ」

「そうか！ そう言ってもらえるとありがたい！」

バガン！

再び亀裂が走る。今度は先程よりも強く、あと、2、3発で結界が破壊されそうな気がする。結構丈夫なつくりの筈なただけだな。

「なによ、早く教えなさい」

「ああ、時間が無い見たいだから悪いけどいきなり行くぞ」

「何する気なのよつてきゃあああああー！！」

俺は巳月を持ち上げる。変なことしようって訳じゃないんだからね！

「神よ、我に力を与えよ

人外なるその力、今ここで放たれん

強化魔法 筋活勢威！

どらああああああああああああああああああ！！！！！！」

「きゃあああああああああー！！」

おもいつきりぶん投げる。流石に筋肉強化しても男が女投げるのと女が男投げるのでは全然違うからな。

「きゃあああああああああああー！！ぶっ！！」

あ、着地失敗した。おお、でも全く怪我してないな。ここまで予

想通り。

「てめえなにすんだ！ もっと良い方法無かったのか！」

「怒らないでよ。ほら、はやく鏡之助さんなり正偽なり助けを呼んできて！」

「わかった。……じゃあ説教はあとでね」

説教する予定なのか。せっかく助けたのに。

巳月は走り出す。巳月がさつき落ちた所の近くには人の形を模したシールが半分に割れて落ちていた。

「うわー。これは本格的にやばいんじゃない？ 逃げられちゃったし」

「仕方ない。解除」

結界が消える。同時に今まで柱の役目を果たしていたポーンは割れてその場に倒れた。

「じゃあ俺はこの子とやるから棧橋は五月雨巳月を追いかけてー」
「御意」

棧橋はポケットをあさり、今度はナイトを取り出そうとした。

「いや、その必要はないな。二人まとめて俺があいてしちやる」

元々その予定だ。

【第十八話】 仲間割れってのはどうかと思う(後書き)

そのころの鏡之助。

ぴーぴー

「どうかされましたかお嬢様！」

『ごめんなさい私、攫われちゃったみたいなの』

「なんですと！」

『だから今すぐ来て』

「ちよつとお待ちください、今お嬢様の確認を」

『私の言うことが信じられないって言うの？』

「いえいえ滅相もございません！」

『じゃあ今すぐ来て！ 場所は大体北海道辺り！』

「北海道ですか!?!」

『私の言うことが信じられないって言うの？』

「いえいえ滅相もございません！」

『早く来て！ じゃないと私殺されちゃう!』

「あれ？ 基本的にお嬢様は攫われはすれど身代金他いろいろな理由のため命の危険は無いのでは？」

『私の言うことが信じられないって言うの？』

「いえいえ滅相もございません！ しかし北路様はどうされたのです？」

『私の言うことが信じられないって言うの？』

「いえいえ滅相もございません！」

【第十九話】 この子傷物

「あーそー。まあ何でも良いけど。少し魔法使ったぐらいで俺らに勝てると思うなよ。にしても兄ちゃん、痛そうだねえ。大丈夫？」

うつつぎが後半はおどけた様に言う。

多分うつつぎが言ってるのは腕の傷のことだろう。

魔法は普通言霊と魔法式、両方揃わなければ発動しない。でもここには筆記用具は無い。カッターならある。ならどうするか。

腕に傷をつけて書けばいい。

「にやははー。ホントに痛そうだねい。今まで書く物が無いからってそんな自殺行為した人見たことないよ。きみって本当におもしろいねえ」

うん、超痛い。血がだらだら流れてきてる。多分献血でもここまでは血でないとと思う。いかせん魔法式って書くのと長つたらしいからどう頑張っても結構な傷になってしまう。だって場所が足りなかったから二の腕まで傷つけたんだぜ？ 痕が残ったらどうしよう。

でも幸いにも筋肉強化系の魔法は曉札を使うにせよ肌に直接つけないといけなかったから手間が省けてよかった。これが火炎系の魔法だったら今頃俺は切り傷と火傷の二重苦だ。

「どらわー」

この魔法を含む筋肉強化系の魔法ってのは時間制限がつきものだ。そして今俺はかなり乱雑に略式して書きちまったからもう残りの制

限時間が2分も残ってない。

なので、先制攻撃。気合の一発。

「ルーク」

棧橋が言つとルークが俺の行く手を塞いだ。こいつ、そんなナリしてゆくせになかなか素早いではないか。構わん！ 殴る！

バコン！

「いでえええええええええ！！」

今俺が使ってる魔法は筋肉強化であつて筋肉硬化ではない。ダメージはダメージとしてそのまま受ける。

だから思いつきルークを叩いちまった俺は拳が砕け散る思いをした。筋肉強化なんてしてしまったから余計に痛い。対してルークは後ずさりさえ無し。力の差が半端じゃない。

「棧橋、それはいいから五月雨巳月を頼む。ほれ、まだそこにいる」「御意」

うわ、マジだよ。まだ校庭走つてやがる。出来ればもう少し急いで欲しい。

「展開。 ビショップステップ 聖職者の矢」

棧橋の取り出したビショップの駒が光り始めた。それと同時にその形が縦にだんだんとの伸び、1.5mまで大きくなった。

「それすんのかよ。急所はずせよ」

「勿論」

ビュン。

棧橋は投げる。俺はそれを黙って見送る。ちょ、そんな目でみるなよ。だってあれ、術者が戦闘不能になるか矢そのものが破壊されるまでどこまでもターゲットを追いかけてく厄介な代物だぜ？俺にどうしろと？

巳月にそれをかわす手立ては無く、心臓辺りに思いっきりぶつさる。おい、完全に急所じゃないか。

「あ、死んだかも」

「えええ！？ ちよつと棧橋！ どういうこと！？」

「ミスつちやった」

「そんなテへ みたいな顔されても駄目だよ！」

あ、初めて棧橋の表情が変わったな。うん、そっちの方が良い顔だ。

「にやははー。にしてもお兄さん冷静だねえ。回復魔法の自信でもあるのかい？」

「いや。まあ確かに回復魔法もできないことは無いが。それは必要ないだろ」

巳月の方を見る。うん、もう走り出してる。

「にゃ！？ な、なんで！？」

「人形、ヒトガタ知ってる？」

人形とは、

文字通り人の形をした縦十センチ程のシールみたいな物。それを体の一部に貼り付けければ一定以上の刺激を体が受けた時に身代わりとしてそれを受けてくれる。さっきの投げ飛ばした時とか洲王戦のときの爆破の時とかも人形に助けられたみたい。まあ洲王の時は爆破だったから変わり身になった後焼けてなくなっちゃったからわかんなかったけど。

でも勿論代償もあってその人形を一枚つければ個人差はあるが、体感2〜5キロ体重が増えた気になる。勿論実際の体重は変わらないが。

因みにさっき巳月は5枚の人形をつけていた。と言うことは最低10キロの重りをつけたままマラソンをしたことになる。頑張ったな。

「で、残りはあと三枚だ。あと三回さっきのビショップ放てるかい？」

「……」

俺の問いに棧橋は何もいえない。もう一度言うが今棧橋が使っている魔法はとつても下準備が面倒だ。きつとビショップだけではそこまで作れていない筈。

「にやははー。でもべつに棧橋だけが戦闘要員って訳でもないしねー」

「ああ、うつつぎもいたのか。え？ お前も戦えるの？ にやははー係りじゃないの？」

「お前初対面なのにそれは無いんじゃないの！？ それに俺の名前は現代の現に若木の木と書いて現木だ！ ちゃんと見え！」

妙なところにこだわるうつつぎだった。まあでも分からんでもないな。俺も北路とホク口气にしたりするし。

「うだれあああああ！！」

もうめんどい。話し込んでるうちに魔法の効果が切れそうだ。

俺はルークの足元を掴みある限りの力で持ち上げる。無理かと思っただけとかなった。でも絶対明日筋肉痛だ。

で、そのまま現木に投げる。なんでさっきから現木ばかり攻撃してるのかと言うと、女の子になんか攻撃できない。まして同年代の可愛い女子高生だし。ああ、できれば拘束系の魔法が使えればなあ、巳月、早く戻って来い！

「あがあああああ！！」

「うわー！なんでさっきから俺ばっか！」

お前が男だからだ。

バアアン！

地面にまた、クレーターが出来た。さっきのよりは大きくないけど。

にしても腕いてー。あ、今ので魔法切れたな。どうすつか。特別な魔法式じゃないと同じ魔法式で複数魔法は放てないからな。さっきは左腕に書いたから今度は右腕に書くか。いや、利き手じゃないと時間かかって仕方ないな。このまま巳月を待つか。

でもさっきの攻撃で余計に怒らせて無いと良いけど。

「殺すっ！」

残念。

「破壊魔法紅蓮炎邪！」

現木が曉札を取り出して、叫ぶ。現木の手から黒々とした炎が放たれ、つてなんかデジャヴ。

「ぐわあああああ！」

なんとか飛んで避ける。しかし攻撃は当たらなかったものの、避けたついでに体のあちこちを打った。地味に痛い。

「ルーク」

「がっ！」

なんかでつかい城みたいな奴のでつかいパンチが飛んできた。とつさに体を捻って直撃は避けたが、ばつちり腹に当たって5mほどぶっ飛んだ。

「……てめえ、なにしてくれてんだ。骨折れたぞ多分」

「だって、じゃあ後はオレだけで良いから。棧橋は五月雨巳月に行つて」

「御意」

棧橋がすたすたと校舎の方へ歩き出す。やばいな。いや、なんとか動けるか。

「ごめん！ 可愛い女の子！」

棧橋に殴りかかる。

念しましよー！」

「……………え？」

「聞こえてなかったんかいいいいいい！！」

うーん、本当に危ないな。血がだらだらだ。このまま出血多量で死にそうだし。心なし、頭がふらふらしてきたような。

「棧橋さん。申し訳ないけど魔法で治療頼めないかな？」

「うん」

「即答！？ ちょっと棧橋！ 何度もいうけどそいつ敵だからね！

？」

「……………え？」

「またかいいいいいいいい！！」

ややこしいことになってきた。にしても棧橋さん（呼称はこれからこれで統一する）味方攻撃したり敵を助けたりやりたい放題だな。この人の組織においての地位が高いか、組織そのものの束縛力が低いかどちらかかと見た！

「ねえ北路？ これは一体どういう状況なのかしら？ 説明して欲しいんだけど」

あ、巳月。

そんな事いわれても、どういってそんな変な状況かな？

現在の状況。

敵の現木、なんか叫んでる。敵の棧橋さん、敵であるところの俺の治療をしている。俺、敵に治療されてる。

うん、変だ。

「あ、なりゆぐばああああー！」

成り行きと言おうとした俺は、巳月の渾身の一発によって意識が無くなった。

【第二十話】 巳月と書いてキケンと読む

「むあ？ どこどこだ？」

目を覚ませば、見知らぬ天井つてことは無かったが、まあ見覚えはあるけどどこだっけかな？

俺はベットのの上に寝転がっていた。俺の家じゃないよな、そもそも俺んち布団だし。病院、じゃあないな。雰囲気はそれっぽいけど窓から見える景色に俺の学校の学生がいる。あれ？ と言うことは俺の学校の中か？

「あ、保健室か」

「いや、気づくの遅いだろ」

お、正偽だ。何をしてるかと思えば俺のベッドの隣に椅子を置いて座っていた。うん？ 俺今まで寝てたよな？ じゃあ正偽何してんだ？

「はっ！ まさか俺の顔に落書きでも！？」

「ぬしは心配という言葉をしらんのか？」

失礼な。それぐらい知っている。

「知ってるだけじゃだめだの」

「む、確かにそう言われると弱いな」

時々そう褒められるな。知識はあっても常識がないって。もしくは心がないって。

「いや、それ完全に悪口だろ」

「ん？ そうか？」

「まあそんな事はどうでもよゆうのだが、どうだ？ 調子は。まだ痛いところとかないか？」

「うーん、まあ俺、人より早く怪我とか治るタイプの人間だから大丈夫。そもそも俺、怪我なんてかすり傷もしてなかったと思うし」

「うん、どうやら頭が重症のようだな」

「いやいや、本当に痛くないって、なんなら今から走って女子更衣室の壁に激突してもいい」

「その発言がすでに相当痛いかな。というか何故に女子更衣室？」

「なんなら今からスカート捲りをしてきてもいい」

「それは本当に関係なくなってきたぞい！？」

ぬしの性格が未だに分からんわい。と正偽。

うーん、まあ俺もいろいろ頑張ってるんだよ。なんか他の奴に比べてキャラ薄いような気がして仕方ないし。

正偽が結構本気で引いていた。いけねえ、友達なくしてしまう。

しかしまあ俺ってばミイラ男みたいになっちゃって。本当に傷、残らないと良いけど。

「あ、そういえば巳月とか他の奴らとかどうしたの？ 俺、巳月に気絶させられてからの記憶無いんだけど」

たしかバツバツと倒れていた筈だ。

「まず、あの敵チームだが我輩と五月雨殿が駆けつけた時に二人のうち一人、眼鏡をかけた我輩らと同世代らしき女子は消えよった」

「は？ マジ？」

「うむ。それからもう一人のキャラチャラした方の男と少なからず戦ったのだがな、こっちにも逃げられてしまった。なかなか強かつ

た」

現木、強いんだ。正偽と巳月同時に相手して互角で渡り合える程なんだ。まあ巳月は本気だしちゃんないだらうけれど。というか出せないだらうけれど。

「で、他の倒れてた奴らは？」

「それはその男が立ち去ると同時に次々目を覚ましたから問題ない。全員そのことの記憶をなくしてるようだったから適当にあしらって教室に戻ってもらった。見たところ外傷も無いようだったしの」

「ああ、多分それで問題ない。基本的に不特定多数の者に危害を加える場合は殺すか生け捕りだから中途半端に手傷を負わせたりする魔法は逆じゃないんだ。あいつらが死んでなかったら大丈夫だ」

「ふむ、では良かった。しかし一人だけ目を覚まさないものがいたから今そこで寝てもらってるぞ」

「なに！？」

まさか何かの流れ弾とかが当たってしまったとか！？ あんまりあいつらそういう感じの魔法は使っていた覚えは無いが、もしそうだとしたら大変だ。魔法に馴れてない人がいきなり魔法の攻撃なんか食らってしまったら中毒になつてしまう危険がある！ それは魔法の直接的な攻撃よりも危ない！ 早急に治療しなくては！

俺はそう思い、仕切られていたカーテンを払う。そこに寝ていたのは、

植釜だった。

「ああ、こいつなら問題ないや。なんか騒がしてごめん」
「？ 良く分からんがまあいいかの」

そういえばこいつ俺が気絶させたんだっただな。あーあ、なんか良く分からんが罪悪感がちつともねえ。
植釜だしま、いつかって感じたな。

「ふむ、しかし一人だけ起きんとはどうしたのだろうかのう」
「さあ？ 倒れる時に頭でもうつたんじゃねえの？」

すつとぼけ北路くん。

「で、巴月はどこだ？」

「ああ、五月雨殿なら外で誰だったかの……五月雨殿の知り合いらしき人物をしかっておったぞい。二十代ぐらいのなかなか二枚目な青年だの」

「ああ、それ嗽鏡之助さんだわ」

緊急事態に連絡取れなかったからな。怒ってんだろ。

そういえば俺もあとで説教とか言ってたけどどうだろう？ もう一発あいつに殴られたからな。出来ればそれで勘弁してほしい。というか結構善戦したんだから怒らないでほしい。というか褒めて。

「うむ？ 誰だそれは？」

「ああ、別に知らんで良い」

「む、そうか。……おお、そういえば先程警護部の奴らが来ておったぞい。多分事情徴収とかされると思うが」

「あ？ 通報したの？」

あれは頑張れば隠せる内容だったと思ったけどな。丁度体育で誰

も見てなかったし、みんな覚えてないし。俺と植釜だけ誤魔化せばなんとかなっただろ。

俺と正偽は良いとしても巳月が嫌がらなかったのかな？　ここまでの騒ぎになれば流石にもう俺が守るとは言えないし。あ、元からそんなつもりは無いけれど。

「だめだったか？」

「いや、俺は良いけど、巳月は良いって？」

「いや、確認は取らんかったが別段止めようとはしてなかったように思うぞ」

「ふうん。まあならいいか」

まあ鏡之助さん他強い人は連盟に沢山いるだろうからそっちに守ってもらう方がいいわな。

「くわわ、じゃあ俺、もう一眠りすつから。おやすみー」

「まあ、それは良いのだが。もう6時だぞ」

「マジで!？」

外を見れば確かに暗くなっていた。あれ？　さっきも外見たよな？　なんで気づかなかったんだ？

「我輩もそろそろ帰ろうと思っておったところだしのう。丁度よかつたわい」

「ああ、起きるの待っててくれたのか」

「うむ。授業に出なかった分の宿題を渡す役目を頼まれておつてな。おやすみ！」

「午後の三時間の分と今日の宿題。それと流石にそれほどの傷の治療費全ては学校側は補助できんぞうだ」

「泣きぞうだ！」

もう全身隈なく痛い。現木とかと戦った時よりも苦しい。

「おお、忘れるとこだった。五月雨殿に自分が来るまでホクロが保健室をうごかめよう言われておっただった。まあ今から寝るなら関係ないか」

「ちよつと用事を思い出した！　じゃあまた明日！」

「まちなし。ホクロを帰すと我輩も怒られてしまう」

「放せ！　俺はもう帰る！」

どうやら許されないらしいかった。敵さんと仲良くしたぐらいで敵しいな、あいつ。

「我が名は神、煌々たる光の権化！

我の命に従いて目前の敵を燃やせ！

その魂を以て燦燦と光輝け！

神は力の解放を許す！

火炎魔法天啓冥呪！」

「ぬしまさかこの局面で魔法使うのか！？」

いやー、俺もまさか使うとは思わなかったね。体が勝手に。魔法、使わない主義のはずだったんだけどな。

丁度良いところに曉札があつたのが悪い。

「安心しな！　死なない程度に力は緩める！」

「それ自体結構高位の魔法だろうが！」

知ってたか。

でもそんなの関係ないさ！　死ねえええええ！

「……何してんの？」
「あれ？」

なんか聞き覚えのある声。ドアの方へ目をやると。

「あんだ、敵の女の子とイチャイチャしてたと思ったら……」
「……」
「あーいやーそのー」

不味いな。非常に不味い。正偽の方を見ると、彼も気まずそうに目を逸らしていた。

「ごめんなぶおあつ!!」

……謝ったのに。
俺は再び意識を失った。

【第二十一話】 洲王再び

「貴様に頼みごとがある」
「だが断る」

巳月が俺をぼこぼこにした事件（本当は現木襲撃事件）から2週間が経ち、俺の傷も癒えてきた頃、そいつはやってきた。
洲王だ。

今日は折角の土曜日で俺が惰眠を貪っていた時、ウチのドアを叩く音が聞こえるな！。それもかなり強いな！とか思ってたら、（インターホンという物はこのアパートには無いのだ）洲王だった。

因みに今はリビング（ちゃぶ台ある方の部屋）に居るが、残念ながらお茶は出してない。誰がこの間殺されかけた奴に茶なんて出すってよ。自分の分しか用意しなかった。

「というか頼みごとしようってのに貴様は無いだろ」
「黙れ。逮捕すつぞ」
「権力乱用だ！」

巳月から聞いた話に寄れば、洲王は警護部の中でも結構実戦向き、そして出世頭らしい。因みに今までちよくちよく出てた警護部つてのは魔法連盟の中の組織の一つで警察と同じ様なもんと考えて欲しい。魔法警察だな。

まあ実際俺は犯罪者なので乱用って訳でもないが。

「つーか民間人に協力を依頼すんな。てめえらは守るのが仕事だろ」
「いろいろ事情つてもんがあんだよ。あれだぞ。働いた分の報酬ぐらいなら出すぞ？」

「やだね。俺はお前と違って実戦向きじゃない」

「30万」

「話を聞こう」

いや、違うんだ。これは別にお金に目がくらんだ訳じゃなくて、みんなの安全をだな……。うん。誤魔化すのは無理か。にしても流石にそれだけあつたら何でもできるな。

「すずなり「わいろ」 鈴生声色が危ない。守れ」

「誰だよ」

説明が適當すぎる。それじゃあやりたくても出来ないじゃないか。

「鈴生家は五月雨家と同じ幼少からの魔法の鍛錬が認められてる家系だ。まあ裏ではな。前に言っただろ、日本には二姓いるって」

「だっけか？」

「そうなんだよ。それでそここの坊ちゃん、鈴生声色がサッカー観戦に行くらしいんだ。それを前には影ながら護衛して欲しい」「ちよつと待て、聞きたいことが山ほどあるが、まずはここから聞こう。何で俺？」

普通にお前らがやれ。職務放棄すんな。

「ああ？ お前魔法知識は無駄にあるんじゃないのかよ。巳月さんから聞いてるぜ？ 魔法使い及び魔法取締法って知ってるだろ？」

「ああ」

流石にそれぐらいは。てか、内容まで知ってる奴は少ないだろ。まして俺まだ高校生だぜ？

「そこに3000人以上の人が集まるところには魔法使いは入っちゃいけませんってのが書いてあんだよ」

「マジで!?!? なんで!?!?」

「そりゃ、あぶねえからだよ。俺達は常に武器を携帯しながら闊歩してるようなもんだしな」

そうか、いろいろ大変なんだな。

「でだ、そのサッカースタジアムってのは……何人だったけかな? まあ3000人は優に超えてるから俺達連盟の輩はおいそれと入っていけねえんだよ」

「ふうん。じゃあその声色君は? そいつ魔法つかえんだろ? 入れんの?」

「そりゃあくまで体面上は鈴生家は普通の家だからな。魔法が使えるってことは基本秘密だから」

「ああ、そっか」

「同じ理由でお前も入れる」

「ああ俺、正規の魔法使いじゃないもんな」

どちらかと言えば犯罪者。

ちなみに、最近は厳しくなったようでそういう所に入るには身分証明が必要らしい。

「じゃあ次の質問。守れてことはその声色くん、誰かから狙われ
てんの?」

「んー。まあな。穂摘将門ほつまさかどってのがてっぺんやってるテロ集団だ。
前にお前の学校に来たことは違う組織だが似たようなもんだな。
多分要求は鈴生家の所有している魔器」

「まきい?」

「ああ。刀工、みこころきんじ深心欣司が作ったと言われている複製不能の日本刀型魔器『屑葉』くずは深心の名前は聞いたことあるんじゃないか？」

「はあ！？ 深心欣司といえば日本、いや、世界で一番有名な刀鍛冶じゃないか！ 国宝級の宝だろ！？なんでそんなもん持ってんの！？」

「言っただろ。特別なんだよ、鈴生家は。金持ちだしな」

「どうやら鈴生家当主は魔法連盟本部に勤めているらしい。わお、通りで。」

「で、その屑葉だが、たとえ極東の島国の小さなテロ組織が手に入れたとしても、それだけで相当な脅威になるだろう。少なくとも警護部や撤却委員会が出てくるのは必至だな」

撤却委員会。警護部の精鋭480名で構成された魔法連盟日本支部最高戦力のことを指しながら洲王は言う。

「だから大事になる前に済ませたい。たぶんあいつらはノコノコ出てくる鈴生声色を見逃さないはずだ。俺達もできるだけのことはするがそれでもスタジアムの周りの警備が精一杯だろう。あいつらがどんな手段を使って攻めてくるか分からない以上それだけではやはり心もとない。だからたのむ」

「うーうー」

確かに洲王の言いたいことは分かる。それに俺も俺の周りで怪我人や死人が出るのは勘弁だしな。しかし怖い。超怖い。前まで戦ってられたのはそうせざるを得ない状況だったからだ。まさか自分から飛び込んでいくなんて考えられない。

「なあ、その声色君に頼んでサッカー観戦に行かないように頼むっ

てのは駄目か？」

「あその人間は変わってんだよ。危機感が全く無い。それに鈴生家は日本支部の人間じゃないから五月雨さんでも基本的に助言ぐらいしか出来ない」

「じゃあそれってどっかに頼んでその取締法免除とかしてもらえないのか？ 緊急事態なんだろう？」

「無理だな」

俺のそんな一縷の望みもばっさり切られる。

「俺達魔法使いと政府の奴等とはどこの国でも仲が悪いんだよ。いや、政府と言うよりは非魔法使いとか」

「ふうん」

なんだか、魔法使いの闇を見た気がした。

「それに多分鈴生がやられたら次は五月雨家行くと思うぜ？ なんせ名家だからな。あ、いや。狙われるのは五月雨家ではなくてあくまで巳月さんだと思うけど」

「うぐっ」

「こんどは守るのむずいだろうな。なんせ鈴生と違ってまだ実質的被害が出てない状況でいきなり『屑葉』を持った敵に襲われるんだから」

「うぐっ」

「多分上に巳月さんの警護申請しても被害が出てない以上大した警護は出来ないだろうな。下手すりゃ嗽一人だけってものあるかも」

「ぐがっ」

「そして今度の要求は魔器か金か。もしくは捕らえられた仲間の釈放っていう線もあるな。なんせ今度の交渉相手は日本支部支部長だ。やりたい放題だろうな」

「……分かったよ」

「え、なに？」

あーもう！ 面倒くたらないな！ くそっ、ふんだり蹴ったりとはこのことか！

「その鈴生声色の護衛、やってやるっじゃねえかこの野郎！」

「あ、そう言ってくれとありがたいな」

そう言っつが否や洲王は立ち上がりすたすたと出口の方へ向かって行ってしまった。おい、それだけ？

「詳しいはなしなんも聞いてねえぞ！」

「ああ、それだけ聞きゃ十分だから。あとはイコールからきいてくれ」

それだけ言っつと本当に出て行ってしまった。はて、イコールってなんだっけ？

「よし、なんでも僕に聞け。ぴよ」

そこには、サッカーボール大のファンシーな顔をしたひよこが、ふわふわと重力を無視する形で浮かんでいた。

【第二十二話】 びっくりさせ

でっかいひよこ。もといイコールから聞いた話によると、この相談は洲王の独断らしく、他の魔法使いは誰も、五月雨工広さんでさえも知らないらしい。

「まあご主人もあれはあれで正義感があつたりするんだよ。ぴよ。というかぶつちゃけお前に断られたらご主人なにするか分かんないからそこは感謝しよるぜ。ぴよ」

イコール曰く、こついう事らしい。

まあそんな感じでやっぱり出来ませんと言える雰囲気でもなかった。俺は流れのままとりあえずは話を聞いてやることにした。

「護衛って言ってもあんまり緊張しなくていいぜ。ぴよ。鈴生声色の近くで怪しい奴がいたら僕に声をかけてくれ、そしたら僕はそいつに張り付いて魔法使いである証拠を見つけるから。ぴよ。それが魔法使いであることさえ分かったら流石にご主人達も中に入れてもらえると思つしな。ぴよ」

口癖うぜえ。

こついう奴は長文喋んじゃねえよ。

でもこれは安全そつだ。どうやら今回はバトル展開にはならずに済みそうかも。

「そつ思つてると足元すくわれるぜ。ぴよ」

「ああ、気をつけるよ」

「ご主人も下手すりゃ報酬なんて払わないからな。ぴよ」

「それは聞き捨てなら無いな！」

じゃあ俺は何のために行くんだよ！ 自ら危険を犯しになんて絶対行かないぞ！

「だから自分の仕事はちゃんとしろってことだ。ぴよ」

「う、そうか」

「じゃあはいこれ、明日のチケット。ぴよ。席は鈴生声色の近くに
しといたから。ぴよ」

そういつて、イコールはどこからか一枚チケットを出してきた。

「ああ、ってこれ、魔法で作ったやつとかじゃないよな。ちゃんと
あいつ買ってきたよな」

「……」

何故黙る！

「ははっ、やだなあ。偽者のはずないじゃないか」
「お前口癖忘れてんぞ！」

まあ毎回忘れてるようなものだが。
不安だ！ とても不安だ！

「ん？ ていうか明日？」

「ぴよ」

……今のは肯定と受け取っても良いのだろうか？ まあ良いのだろ
うが。

「なんか不味かったか？ ぴよ」

「いや、明日の予定は無いんだが、一応仲間誘おうと思ってな」

「五月雨巳月ならだめだぞ。ぴよ。絶対的に五月雨工広及び周りが気づいて止めさせようとするからな。ぴよ」

「いや、違う奴だよ」

「うん？ まあそれなら構わないけど、多分チケットももう一枚ぐらいならつく……用意できるし。ぴよ」

「そうか。それなら良かった」

作る、と言おうとしてたことはスルーで。

とりあえず俺はそいつの電話番号に掛けてみる事にした。

みなさんご存知（？） 火之迦具正偽だ。

あれ？ そういえば正偽の電話番号知らないや。どうしよう。ってそれほど悩むことでもねえな。鉱跡に聞けば一発じゃねえか。

数回のコール音の後、

『やつほー。こちらはガダムシャイド経済エリア特務機関長兼旋盤城島監査委員副委員長のドヴァン・ケイミスだよー』

「間違えました」

俺は即座に電話を切ろうとする。

『わーごめんごめん！ 僕はちゃんと早涯鉱跡だよ！』

「なんだ今の自己紹介は。中盤なんて漢字が多すぎて読む気すらなくなっただぞ」

仕方なしに出る。いや、仕方なしっていつか、俺が用事あるんだけどな。

『いや、おもしろいかなーって』

「不愉快だ」

『うわーん!』

「まあ鳴くな泣くな。俺がもっと良い自己紹介考えてやるから」

『ホントに?』

「ああ本当だとも。過去に俺がお前との約束を破ったことなんてあったか?」

『数十回単位であるよね』

「過去に捉われてはお前に未来は無いぞ」

『……最初に過去について話して来たのはホクロなんだけどね』

そうだったっけか? まあそんなことはどうでも良い。

『自己紹介の話だっけか?』

「おお、いいのが思いついたぞ」

『なにになに?』

「早涯鉦跡、ウメカラウマレッタ星出身の永遠の18歳ですっ」

『僕がものすごく残念なことになってるけど!?!』

「そう? 自信作なんだが」

『もしかして普段の僕こんなイメージなの!? というかウメカラウマレッタ星ってどこだよ! 適当過ぎるよ! そもそも僕まだ1』

6だし!』

『趣味は恋愛小説の読書、特技は裁縫、将来の夢はお花屋さんですっ』

『僕のプロフィールが乙女チックになってる!?!』

いや、まあ男だって特技が裁縫だったり、将来の夢がお花屋さんって人はいるだろ。多分。

でも鉦跡って何気に女顔なんだよな!。背も小せえし。言ってなかったと思うけど。

『そういえばホクロ、何の用なの？』

「ああ、すっかり忘れてたな」

ちよつと鉢跡との会話が楽しかったからな。出来ればもうちよつと話していたかったが時間も時間も聞こう。

「正偽のケー番知ってる？」

『知ってるよー』

流石。

「おおじやあ教えてくれ」

『うん、良いよー。でも今回はなに？ また魔法使いのなにか？』

「そんな感じだな」

それから俺は鉢跡から聞いた番号のメモを取るとすぐに正偽に電話をかけた。

それにしても正偽の普段の生活って予想できないよな。なんだが常に町をパトロールしてるイメージ。テレビ見て笑つてるところとか、布団で寝てることとか、とりあえず隙つて言うものを誰にも、自分にも見せない気がする。

そんな正偽の電話の第一声はいかなるものだろうか？

『誰だ』

はい喧嘩腰でしたー！

つてそりやそうか。正偽からしてみればいきなり知らない人から掛かってきたようなもんだもんな。

『誰だと聞いているのだ。もしかや脅迫か？ 我輩が火之迦具正偽と』

知つての狼藉か』

「俺だよ」

『おお！ ホクロか！』

テンションかえんの早いな。そっちの方が助かるけど。

『して、ホクロが何用か？』

「ああ、明日さ空いてる？ ちょっと一緒にサッカー見に行こうかなーって思ってる」

多分こいつの性格だと、犯罪絡みだと分かればどんな理由があるうと来る気がしたのでとりあえずはぐらかしておいた。

サッカー好きかな？ とか思っていたが、その時正偽から発せられた言葉は、信じられないことだった。

『む、そのサッカーはもしかして四季スタジアムでやる物か？』

「え？ ああ確かそうだった筈だけど？」

たしかさっきの説明でイコールがそんなことを言っていたはずだな。

『では残念ながら我輩はいけぬな』

「え？ なんてだよ。あそこに嫌な思い出でもあんのか？」

『いや、そういう訳ではない。理由は一つ。我輩が魔法使いだと言うことだ』

「え？ いや、正規の魔法使いでなければいけないし」

それとも正偽はやはりそうだったルールを破ることを良しとしないのだろうか？

『だから、我輩は正規の魔法使いだと言っことだ』

「え！？ どういうこと！？ だって日本では魔法学校は大学を同じ扱いでその試験をクリアしないと……」

俺が混乱に陥ってるからか、正偽はゆっくりとした口調で言う。

『我輩が言ってなかったのが悪いの。我輩は帰国子女だ』

ええええええええええええ！？ 何その展開！？

『一応飛び級を利用して大体の学習は終わったのだがな、どうしても探し物があってこっちの高校にはいらさせてもらったのだ』

だから歳を誤魔化してるわけではないぞ。と正偽。

そんなことどうでも良い。

「なっ、なんで言ってくれなかったんだ！」

『言っタイミングがなかったのだ。わるかったな』

……またそれが。まあいいか。

「分かった。じゃあまたな」

『なんか済まぬかったの』

電話を切る。

しかしとすれば一人でやらなくてはならないのか。まあ最初っからそのつもりだったから良いか。そんなことより今は正偽のことがびっくり過ぎて、とりあえずばーっとしよう。

「……………」

「どうしたんだ？　びよ」

あ、イコールいたの忘れてたな。

「あ、すまんすまん。明日、俺一人だけで行くことにしたから」
「そうか。びよ」

という訳で俺は明日の準備を始めた。

……にしてもサッカー観戦の準備って一体何すりゃ良いんだ？

【第二十三話】 電車の中にて

「うわーマジかよマジかよマジかよ。有り得ねえ有り得ねえ有り得ねえ。わー本当にどうしょ」

「うっさい。ぴよ」

俺の言葉にイコールが突っ込む。

まあ、自覚ありますし素直に反省はしますが。

「お前それ、昨日から言ってるだろ。ぴよ。いい加減黙れ。ぴよ」

「いやあ、そんな事言ったって驚くじゃん。電話では結構クールに対応できたけどさ、実際は恐恐諷諷ですよ本当に」

「たとえそうであつても一日経つたんだからもう少し現実受け止めても良いだろってことだよ。ぴよ。そもそもお前電話でも全然クールじゃなかったからな。ぴよ」

「え!?! マジで!?!」

そんな感じで日曜日。サッカー試合当日ですね。

俺は今から鈴生声色が向かうという四季スタジアムまで移動中だ。といつてもそこが結構遠い場所にあるため電車移動なんだけど。

イコールは目立つから今は小さくなって俺の頭の中に居る。あ、頭蓋骨の中とかそう言う意味じゃなくて普通に髪の毛の間な？

そのままイコールと喋ってる訳だからこっちの方が目立つかな？ 傍から見れば独り言喋ってるようにしか見えない。

「そついえばイコール。これって電車代とかもあいつから出るんだよな」

俺は駅で切符を買いながらイコールに聞く。

「男の癖に小さいことでケチケチすんな。びよ」

出ないのか。

「あ、そろそろ電車来るぞ。びよ」

「え！？ マジで！？」

俺は走り出す。が、相当遅い。

「遅いよ。びよ」

「うっさい。人形ヒトガタ付けるの初めてなんだから仕方ないだろ」

「一枚だけどな。びよ」

イコールが言うように俺は今人形をつけている。一枚。……まっ
て、聞いてくれ！ これは別に俺が体力無いかさそう言う問題じゃ
ないんだ！

えーつとだな、俺も知らなかったんだが人形って拒絶反応つての
があつてだな、普通三枚もつければ「うわっ、キモッ！」つてなっ
てそれ以上付けられないらしいんだ。俺はそれが人より強かつただ
けなのだ。あ、拒絶反応つて言つても前述したとおり「キモッ！」
つてな感じだけで痛みとかはないんだけどな。

でもこれが地味に辛い。

それに体が重い。

「なあイコール。これって逆に負ける確立上げてんじゃねえの？」

「細かいことは気にするな。びよ」

まあなるようになるか。

「あ、それとこれ持っておけ。ぴよ」

ぼん、とイコールがまた何か吐き出す。(?)お札だ。っていうかそれ今じゃなきや駄目か？俺、とつても急いでいるんだが。

「何これ？」

「『呪い返しのろいがえし』この前お前が襲撃された時みたいな不特定多数の呪いを弾く作用のあるお札だ。ぴよ。まあ名前みたいに返すってわけじゃないんだけどな。ぴよ」

「へえ、知らなかった」

「最近出来た奴だからな。ぴよ」

「手触り変だけど、何で出来てんの？」

「塩」

「……」

「いや、お清めの塩とかってあるじゃん。ぴよ。その力を増幅させた奴らしいぜ。ぴよ」

なぜか言い訳口調だった。

まあでも確かに舐めてみればしょっぱかった。

「仮にもお札を舐めるってどうよ。ぴよ」

残念ながら蛇又北路はそんな細かいこと気にするような男じゃない。

と、そんなことを話しながら走っていれば、何とか電車に間に合った。

「ぜえ、ぜえ、無駄に疲れた。人形はずしちや駄目なの？」

「それ、貼った直後は身代わり作用しないから駄目。ぴよ。いつでも臨戦態勢じゃないと。ぴよ」

「んなこと言っただって、電車の中に敵が居るわけでも……」

と、その時

「にははー、どっかで見たことある面だとおもったら五月雨の腰巾着じゃないか」

という声が聞こえた気がしたが、多分気のせいだろう。

「無視とか酷くない!?!」

「空耳空耳空耳……」

「空耳じゃねーし！俺だよ！」

「あ、オレオレ詐欺は間に合ってますんで」

「オレオレ詐欺でもないよ！　　というか電話じゃないんだから無理だろうが！」

そろそろ本気で鬱陶しくなってきた。というか周りの人たちに迷惑だ。

振り向いてそいつを見てみれば、ああ今日もチャライ。全く機能性とか考えた服じゃない。

「ちっ、なんだようつつぎ。ここであつたが百年目とかベタなこと言うなよ。というか魔法使いなんだから電車で移動すんな。箒使え箒」

「いつの時代の魔法使いだよ。そもそもお前も魔法使いだろうが」

「あ、そういえばうつつき、お前どこに向かつてるんだ？」

もしかしたらこいつも鈴生声色を狙ってスタジアムに来るかもし

れない。洲王はこいつらとは別勢力とか言ってたけど、その可能性も充分にあるだろう。

そのことを言うと、うつつぎは俺の降りる駅のもう一つ前の駅名を言った。ふむ、じゃあ大丈夫か。まあこいつも普通に移動で電車とか使うだろうしな。

「あーにしてもお前よく逮捕されねーな。日本の警察は何やってんだか」

「にははー。あれだよ少年。魔法使いって言うのは基本的に現行犯じゃないと逮捕されないんだよ。魔法で変装して犯罪してるかも知れないからな。まあ取り調べとかは出来るけどウチにはそれをもかわす有能な魔法使いがいるからねー」

「記憶操作が出来るってことか？」

前に取調べで人の記憶見るってのを聞いたことがある。プライバシーに関わるからなかなか出来ることじゃないけども。

「そんなとこ。いい見解だな少年」

「少年って言うな」

精々離れていても3つか4つってところだろ。

「因みにお前のところってなんていう組織？」

「『楔』。一番上やってんのが楔原幻狼くわくげんげんろうっていう馬鹿がやってるからそう名づけたって言った」

「仲良いのか？ そんな言い方して」

「まあウチ、サークルみたいなものだしねー」

「そんな気軽さで犯罪犯してるの!？」

「歳は20。俺と同じ年だし」

「へ」

「あ、そこは関心無いんだ」

そんな不毛な会話をもう10分ほど続けていると、うつつぎの方から「じゃあ俺、ここで降りるからー」といって電車から降りていった。

「今のだれだ？　びよ」

イコールが頭の中から聞いてくる。さっきまではうつつぎがいたから黙っていたのだろう。

「うつつぎって言って前に襲撃して来た奴等の片割れ」

「そんな奴とお前談笑してたのかよ。びよ」

あ、そういえば。

電車がどうやら駅に着いたようだ。

キキーツと高い音がして、慣性の法則に従い俺の体は進行方向に傾く。

電車の扉が開き、幾人かの人間が腰を上げ、出口を目指し歩き出す。俺もそれに従う。

さあ、少しだけ前置きが長くなってしまったが、ここからが本番だ。

【第二十四話】 行列の中にはソフトクリームと外国人

さて、前回ここからが本番とかどっかの奴が言ってたけれども、その認識はどうやら間違いだっただようだ。

すごい行列。

うわ、こんなだったらもっと早く来るんだった。並ぶのめんどくさい。

しかしまあ並ばないことには中に入れてもらえないのでとりあえず最後尾。

ふむ、しかしこんなに人気あるんだな。これ。まあ大事な試合とか言っただような気もするし。

と、視界の片隅に多分スタジアムの警備をしているのであろう魔法連盟警護部の皆様が見えた。

なぜ警護部の連中が分かったかと言うと、そいつらは一様に昔前のそういう映画にでも出てきそうな不自然に怪しいローブを身につけていたからだ。右胸にはフクロウを象った連盟のマーク。

多分この中に洲王も居るのだろう。

なんか嫌だな。絶対声とかかけないで欲しい。まあ大丈夫か、あいつの性格的に。

「うわーーーーー！」

と、そんなことを思っていたらすぐ後ろでそんな声が聞こえた。本当にすぐ後ろだったので振り替えざるを得ない。気になるし。

俺が振り返ると、見えたものは白。

ああ、これは多分ソフトクリームだなあ、とか。そう思ったのはそれが顔面に直撃した後だった。

……いつの時代のコメディーだよ。

「ああ！ ごめん！ ちょっと待って今拭くからっ！」

そんな声と同時に顔を何かで拭き取られるような感触。まあハンカチかなにかだろう。視界が見えるようになった俺は改めてその人の方を見る。

「ごめんねー？ 大丈夫だった？」

綺麗な女性だった。

多分外国人なのだろう。人目で生まれつきとわかる金髪は腰の辺りまでとても長かった。瞳の色は蒼。肌もこれ以上ないくらい白い。しかしながら俺はそういう民族的な知識は乏しいのでその姿だけでは一概にどこの人とは分からなかった。

しかしまあ何だ。時々すごく若く見える人とかも居るので安易にこういう発言は出来ないが、それでも言わせてもらえるのならその女性はたぶん俺とそう変わらないような年齢だった。

なのに何故か年下に物を言うような喋り方。

はっきり言おう。もしこれが男だったら有無を言わず殴ってる。

まあ美人だから許すけど。美人なら大概のことは許せる。

……なんだか今俺の高感度が急に下がった気がするな。

「うん？　どうかした？　もしかして怒っちゃってる？」

流石に何も言わない俺に不安を覚えたようだ。まあそれでも口調は変わらないが。

「あ、大丈夫ですよこれぐらい。ちょっと考え事をしていただけです」

対して俺は敬語。やっぱり初対面だし。

「そう。ならよかった。ああ、でもこんなところで転ぶなんてついてないわ」

その女性が少し俯きながら言う。

「それにしても日本語、上手ですね。もしかして日本人ですか？」

とりあえず元気づけるといふ訳でもないのだが、俺も中に入れるまで暇なので少し世間話でもしようと思って声をかけて見た。

「ううん。生まれも育ちもちがうわよ。ただ、日本に来てからもう

5年ぐらいになるけど」

「へえ、留学ですか？」

「いや、どちらかと言えば仕事」

やっぱり見た目よりも年上なのか。

「ああ、そつだ名前教えて頂戴。お詫びもしたいし」

「いいですよ。怪我とかもなかったですし」
「あ、そう？」

意外と引く身の早い人だった。最初からお詫びなんてする気なかつたのだろう。

「まあでも名前ぐらい教えて。ここであつたのも何かの縁つてこと
で。因みに私はマリアちゃん」
「まあ、いいですよ。蛇へびまたほくる又北路です」
「なんと」

と、ここでマリアさんは露骨に驚いた顔をする。いやいや、おかしいだろ人の名前聞いてその反応は。

「どうかしたんですか？」
「いやいやどうもしないよ。あたしってば蛇が嫌いできー。蛇と言う単語を口にするだけでもう鳥肌がねー」
「出てないですね」

マリアさんの格好の上はサッカーのユニフォームだ。まあ試合を観戦するに当たってはさして珍しい格好ではないのかもしれないが、マリアさんはスタイルがいい。というか胸が大きいのでまあ目のやり場に困る。

って話が逸れたか。で、半そでだから分かつちゃうのさ。うで丸出したらね。

「いやいや、でも蛇が嫌いなのは本当だよ？ この前だつてハブ酒飲んでた時さー」

「それ、蛇が嫌いな人の発言じゃないですよね」

「あー、違つた違つた。たしかシチミアドモグロス蛇の血をさー」

「なんすかそのおどろおどろしい蛇の名前は!？」

そして一体血をどうしたんだ!？

「ところで北路ちゃんはさあ」

「ちゃん付けは止めてください。俺は男の上高校生です」

「ところで北路きゅんはさあ」

「ちゃんでもいいです!」

どうやらどんどん酷くなってゆくシステムらしい。

「こんな所で何してんの？」

「え？ いやそりゃサッカー観戦ですけど」

そりゃユニフォームは着てないかも知れないけど、そんな人俺以外にも沢山居る。しかしマリアさんの言いたいことは別のことらしい。

「ふうん、一人で？ 寂しいのね。お姉さん心配だわ」

「誰すかそれ」

そもそもマリアさんだって一人だろうに。

「いいのよ、あたしは中で人と待ち合わせしてるのだから」

なんだかそっちの方が面倒そうだが。まあここは口出しすまい。

「あ、そろそろ入れるみたいよ」

マリアさんのそんな言葉に前を見れば、成る程確かに長かった行

列はもうすぐ俺の所まで来そうだった。

「じゃああたしはこれでね。変なお兄ちゃんに声かけられても付いて行っちゃ駄目よ」

なんて、小学生にでもするような別れの挨拶も早々に、マリアさんは足早にスタジアムの中へと消えていった。

ふむ、じゃあ俺もそろそろ行くか。まあ俺の場合はこれこそ仕事だけだ。

えーと、指定された席は……………。

ここから一番遠いところだった。

【第二十五話】 犯人はお前だ

あー疲れた。

試合見る前に人ごみの中を移動。それだけで疲労困憊いやあ最近の若者は体力がなくてけしからんですなあ。
なんて。

指定された席に行つて見れば、俺の隣の隣の隣、まあつまり3つ左には件の鈴生声色と思わしき中学生ぐらいの歳の人物がなにやらはしゃいだ様子で隣の30代半ばぐらいの大人になにやら話しかけていた。少し耳を傾けて聞いてみるに今からやるサッカーのチームの解説みたいなお話をしている。しかしまあはつきり言つてそのお隣の大人の方は迷惑そうだ。まあ会話から察するに大人の彼は声色少年のボディガードのような物らしいから無下には出来ないのだろう。

その黒服さん（声色の隣の大人のこと。黒服着てるからそう名づけました。俺が）は俺の隣の隣。つまり俺と声色の間に座っている。この俺の隣の席は今だ誰も座っていない。

因みに前は誰も居ない。なんてつたつて一番前の席だから。

ふわわ、にしても暇だな。あ、でももうそろそろ始まるか。

「あれれ〜？ そこにいるのは北路ちゃんじゃない。こんな所で会うなんて必然だね」

「あ、そこから来るのはマリアさんじゃないですか。偶然ですね」

暇なところに知り合いに会えた嬉しさはこの人の面倒臭さを黙っ

て天秤にかけてみたらやつぱり嬉しさの方が勝ったのでとりあえずこんなところの返事にしておいた。

しかしこの人俺より先に出て行ったよな。何で今頃。

「まさか北路ちゃんあたしの近くの席だったなんて。もしかして北路ちゃんあたしのストーカー？ やー、なんか照れるね」

そんなことを言いながら俺の隣、黒服さんとの間の席にマリアさんは座った。

……てか、その呼称は確定なのか。

「まあその言葉は面倒なんでスルーしますけど。マリアさん誰かと待ち合わせしてたんじゃないんですか？」

「zzz……」

「寝ているっ!?!」

何しに来たんだこの人。

あー、試合盛り上がっております。ただいま赤のユニフォーム着たほう（チーム名すらわかんない）が一点とって勝っております。さっきまで寝ていたマリアさんも起きてなにやら声を張り上げておられるようです。あ、もしかして俺、浮いてるかも。

なんて、一人冷静なのはサッカーに興味がないから。じゃあ何しに来たんだよって何も知らない人には突っ込まれそうですが、まあそんなことはどうでも良くて。

……さっきから歓声と共に悲鳴のような物も聞こえてきたり。

それは明らかに段々大きくなってきて俺の目にも倒れていく人が見て取れたり。

というか俺の周りでもどんどん人が倒れてたり。

「イコール！　おいしい緊急事態だぞ！　洲王を呼べええええ！」

「えーひよこから蛇に連絡しますひよこから蛇に連絡します。ぴよ」

「変なコードネームをつけるな」

「ひよこから馬鹿に連絡します」

「さつさと話せ！」

「ご主人と連絡が取れない。ぴよ」

「はあああ!？」

どういうことだよ！　あいつも連盟の一員なら呪い返しの一つや二つ持ってもおかしくねえだろ！

「いやあ、持ってるはずなんだけどなあ。ぴよ」

「じゃあなんで？」

「まあ魔法でやられたとは限らないからな。ぴよ。まあとりあえず当初の計画通りお前が犯人確保しろよ。ぴよ」

「そんな計画立てた覚えはない！」

そんなこといつてる間にも人はどんどん倒れて選手も観客もどんどん倒れて、ついには悲鳴も聞こえなくなった。まあ全員倒れればそうなるか。ってそういえば声色くんはどうなんだろう？　何か対

策してきてんのかしら？

そう思い声色くんの方を見ればぶっ倒れていた。役にたたねえ。ついでに黒服さんも。でもまあそんなことはどうでもよくて、本当に大事なのはここからです。マリアさんが立っていた。

「だーちきしょー！ 薄々気づいてはいたけどね！ 声色君の席の隣とか俺より早く行ったのにここについたのは俺の方が早かったこととか、というかどっからどう見ても怪しいんだよ！ ふざけんな！ もっと予想外の展開になれよ！」

たぶん遅れてきたのは魔法式か魔法陣の準備または最終確認の為だろう。

そんな理不尽な理由で憤慨している俺に対してマリアさんは、

「いひひひ」

笑った。

「いやーあたしの方はわかんなかったわ。というかこっちに連盟側の人間がいること事態予想外でびっくりだわ」

「いや、俺連盟の人間じゃないし」

「そお？ でもあたしの敵でしょ？」

「まあ、そおつすねえ」

まあ別に進んで敵対したいわけではないのだが、ここはやっぱり止めるほかないので肯定しておいた。

「でもまあ一人なら問題ないか」

そうマリアさんが呟く。と、そこからの言葉は俺には理解できなかった。

外国語？ まあ英語ではないことは確実なんだけど何語だ？ てかなんでいきなり外国語喋りだしたんだ？ …… ってああ、魔法詠唱の外国語バージョンかな？

「ってそんなこと暢気に考えてる場合じゃない！」

なにせ椅子が隣同士だったのだ。距離がめつさ近い。こんな所で攻撃系の魔法ぶちかまされては敵わんと俺は転がるように逃げる。

だが、辺り一帯倒れてる人がいるわけで、それを避けながらの移動はとても難しく、思うように前に進めない。

「……」

ブオツという音と共にマリアさんの左手から投げられた曉札が光弾に変わり飛んでくる。

「えええ！？ ここで発動したの！？ せめてラストはテンションあげて言おうよ！ いつ来るか分からないじゃないか！」

完全にこつちの都合だが。

その光弾は見た目のわりに速度が遅く、難なくと言っほどでもないがそれなりに余裕をもって交わすことが出来た。

どんなもんだ！

が、その所為で足を踏み外し、スタジアムの中へ真っ逆さま。

「いだ！……くない？」

ああ、人形ヒトガタのおかげかあ。助かったぜ。

「全然助かってねーよ！一枚しかない人形こんなアホなところで使ってどうすんだよ！いきなりピンチじゃねえか！」

頭の上でイコールが怒っていらっしやる。口癖も忘れるほどに。しかしまあなんだな。サッカースタジアムのなか、20人余りの人間が死屍累々と倒れているこの状況と言っものはなかなかどうしてシユールだ。

ぼこっ。

？

ぼこぼこっ。

何かと思えば俺の周りに木が生え始めた。そいつらは目にもとまらぬ速度で俺の四肢を拘束する。おいおい、ここって人工芝だろ？つていだだだだ！枝が腕にめりこんどる！

「あーあ、言わんこっちゃない。びよ」

おっしやるとおり。

「いひひひ。まあそのまま首でも捻って気絶させてやってもいいんだけど観客も一人くらい居た方がいいでしょ」

そんな意味不明なことを言いつつ、マリアさんが観客席から跳びおりてくる。……のを途中でやめて普通に階段使ってきた。まあね、

結構高さあるしね。

「じゃあいつくよー」

マリアさんが明るくそんなことを言うと、詠唱を始めた。すると、いままで陰鬱呪にでも隠されていたのだから、魔法式、いや魔法陣が姿を現した。

っていつかでか過ぎる！ もうスタジアムだけじゃ足りないから観客席まで書きちゃってるじゃん！

マリアさんが外国語を使って詠唱している以上俺にはそこから魔法の種類を区別することは出来ないのとおりあえず魔法陣を見ることにした。

それだけでもわかるんだ。

……………。

「うおおおおおい！ ちよとまでー！ お前始めから鈴生り声色が狙いじゃないな！」

そんな俺の声が聞こえたのかどうか、マリアは詠唱しながらニヤリと笑って見せた。

【第二十六話】 アナウンサーには向いてない

現在の状況確認。

俺、マリアの拘束魔法によって身動きが取れません（木みたいなタイプ）。マリア、呪文詠唱中。

うわ、俺これもう駄目じゃん。

なんて諦めずにとりあえず出来ることだけでもやってみましょうか。

「なあイコール。俺のポケットから曉札とってくんね？」

俺は動けないのでイコールに頼みます。因みに曉札ってのはあらかじめ魔法式が書いてある紙のことな。忘れた人も居ると思うので一応。

「どれ？びよ」

「えーといや違う違うその隣の奴」

まあそんな感じでどうせまだ詠唱時間掛かるかなあとか思ってたんたらやってたらですよ。

「……………」

あれ？もしかして詠唱おわっちゃった？

マリアが急に黙ったんで心配になったんだけどどうやらその予感
は正しかったみたいで、……………なんかスタジオム全体が光りだしてる！

その光はどんどん中央に集められ、それと比例してどんどん光が強くなっていった。

そしてその光は次第に何かの形を作り始める。獣か……？

「ここで北路ちゃんに問題です」

と、マリアがはなし始める。もう勝ったみたいな顔しやがって。

「この魔法陣はなんでしよう？」

「召還魔法」

間髪入れずに俺は答える。まあ魔法陣としては一番無難な使い方だしな。

「1912年ポーランドの数学者アルフレド・コーレンが作り出した最も有名だが最も安定した召還魔法だ。大体この魔法陣から見るに召還獣はアキレスヴァーレル・ウルフだろ」

「おおすごい。じゃあその狼の説明もお願いできるかしら？」

茶化すようにマリアが言う。てか、お前知らないで召還しようとしてたのか。幸いか、まだその光は形を成していない。召還まで時間が掛かるということか。

「アキレスヴァーレル・ウルフ。主にロシア北部に生息する大型の肉食魔獣だ。平均寿命は200歳程度でその体長は大きな物だと5mに達する。赤い瞳に蝙蝠のような羽が特徴だ。」

7歳から8歳にかけて成長期がありその頃に人間の“生氣”を食べ成長する。人語を理解し、頭も良い。現在は絶滅危惧種指定され、500頭いるかないかだったはず」

「へえ」

「いやいや、召還しようとしてるんだっいたらこれぐらいのことは知っておこうぜ。俺が言うのもなんだけど。」

「でも北路ちゃん、しってる？」

もったいつけるようにマリアが言う。なんかさっきから癪に障る言い方だ。

「第二次世界大戦のさなか、人間の殺気を大量に食べさせられた可哀想な狼ちゃんがいることを」

「魔獣を戦闘用に訓練したってことか？ よく聞く話だがそんなの成功例を聞いたことがない」

主には魔獣が“味方”の人間を殺して脱走するるのがよくある例だ。召還儀式をしないと魔獣が人間の言うことを聞くなんてありえないし、召還儀式は魔法使いにしか出来ない。そして魔法使いは戦争には参加しない。

ほら無理だ。

「いやいや、無理なのは成長した魔獣の制御でしょ。例えばそう、7、8歳ぐらいのアキレスヴァーレルウルフ程度なら、人間を殺すことは出来ない」

「……まさかっ！」

「そう、その成長期の狼ちゃんを戦場の最前線に立たせ、その異様なまでの殺気の中、急成長を期待した。……まあやっぱり他の例と同じで最終的には敵味方関係なく暴れまわって失敗におわっちゃったんだけどね。その狼ちゃんの生き残りがこれという訳」

月もピンチなのでここで生気が食われるのを黙って待ってるわけにはいかない。

と、いうことで。

「火炎魔法 炎雀紅蓮！」

さっきイコールにとつてもらった魔法発動！ 冒頭でも喋ったがこの拘束魔法は木だ。木は炎で燃える。それはいくら魔法でできた木だからといって変わることはない。

それなら燃やすべし。

「あつちいいいいいいいいいい！！！」

でも何回もは出来ない。火傷で死ぬ。

しかしこれで自由になったぜ。俺はマリアと狼がいるところへ走っていく。生気を食われる前に先手必勝だ。

「なあイコール。俺あのでっかい狼やるからあお前あの女倒せねえ？」

走りながらイコールに聞く。

「無理。びよ。僕は戦闘要員じゃない。びよ」

「お前俺と戦った時結構俺に体当たりしてたよな」

「敵が弱そうだったらいけるぜ。びよ」

「傷ついた！」

しかたない（泣）。イコールは当てにならないので自分ひとりで頑張ることにした。

えーと、この中で一番攻撃力が高いのは……。
暁札を選び、一人と一匹に標準を定める。

行くぜえええええ！！

「我が名は神、煌々たる光の権化
私の命に従いて目前の敵を燃やせ
その魂を以て燦燦と光り輝け
神は力の解放を許す
火炎魔法天啓めいしゅっ……」

……… 噛んじゃった。

【第二十七話】 敵の敵も敵

……結果的には普通に攻撃するよりも効果があつたのかもしれない。だってマリアは今もずっと笑い転げてるんだもの。まあでも俺も現在ずっと体育座りの格好で落ち込んでるから結局変わらないんだけど。

いじいじ……。

「あー笑った笑った。いやーこんなに笑ったの久しぶりだね。なに？ 北路ちゃんってお笑いの方なの？」

「……」

俺、今だ回復せず。

「まあどっちにしる関係ないけど。じゃあそろそろ終わらせてもらうよ。○○○……」

後半は狼に向けてロシア語（多分）で喋っていた。そろそろ回復しないとやばいか。

よし、気合だー！

「まだまだあー！ 行くぜ、破壊魔法せんだあぁあぁ……」

今度は噛んだわけじゃないよ。普通に生気を食われてしまった。まあ致命傷って程じゃあないけど俺が結構疲れた上あっちの狼さんは元気になっちゃったからこれは元々勝率低かったのにまた更に勝率が下がってしまった。お腹一杯で寝てくれれば嬉しいけど御生憎様そついう奇跡も起こらねえだろ。

ふむ、じゃあどうしようかな？

「逃げるっ」

方向転換、出口に向かってダッシュ。

かつこ悪い？ 主人公失格？ んなもんしるか！ 命には代えられねえ！

ズンッ

わお、流石に狼、人間とは比べ物にならないくらい足が速いのね。あつという間に回り込まれちゃったよ。やべっ。

「因みに結界二重に張ってるからたとえ狼ちゃんから逃げれたとしてもここからは出られないよー。ああ、勿論携帯も使えないからねー」

後ろからマリアの声。これぞまさしく前門の虎後門の狼ってやつですな。まあ今の場合前門に狼がいるわけだけけど。そして確かに携帯には圏外の二文字が。やべ、泣けてきた。

でもなんで結界二重に張ったんだろ？ 俺レベルなら普通に一つでも逃げれないぞ。時間があればまあ別だけど。

「それは一つはこのスタジアム全体を包み込んで北路ちゃんみたいな誰かが逃げれないようにするのは、もう一つそれよりも一回り大きな結界でスタジアムの周りに居た魔法連盟の奴等を隔離するようにしたのよ」

丁寧な説明をどうも。

「そういえばさつきから魔法連盟の奴と連絡が取れないでいるんだがそれってお前の仕事か」

「そうよん。今魔法連盟が居る所に睡眠ガス撒いたから今は寝てるはずよ」

「……お前本当に魔法使いかよ。魔法使えってーの」

「魔法使いに魔法使ったところで対処されんのが落ちでしょ。こついうときは敵の専門外の武器で攻めるのが効果的なよ」

それはそうかもな。

まあただ、俺の場合だと普通に魔法で負けると思っけど。はっはっはっはっは。

「ねえ知ってる？ あたし戦闘要員じゃあないのよ」

「へえ、知らなかった。そいつはなかなか良い情報だな」

「だから狼ちゃんにあんたのことは任せるわ」

「マジでかつ」

全くよくなかった。と言うかこの子、手加減とかしらなそうだから怖い。

「○○○……」

またなんか喋ってる。まあ今度は確実に予測できる。『北路ちゃんをやっっちゃってー』とかそんな感じだ。絶対。

ほらなんか襲ってきた！

しかしまあなんてったって全長30mを超える化物だ。動きもそれなりに緩慢かなあとか思ってたらとんでもない。速いのなんのって、かわせませんよこんなの！

背中を向けて走っていたらその背中に思いつきり狼の前足がぶち

当たる。名古屋の鯨並に背中を仰け反らせ、肺から酸素が全て飛び出してくる。ついでに背中からゴキリという嫌な音がして口からは血の味が。そのまま10mほど吹っ飛ばされ、マリアの足元に着地。見下ろされる感覚に少しの苛立ちを覚えるも、全く立てる気がしない。

一発でこの威力ってどうよ。規格外すぎる。

「まあ殺すことはないでしょ。じゃああたしはさっさと声色ちゃんの身柄確保に移りますか」

そう言って離れていくマリアを睨むことしかできない。ああ、自分の非力さが恨めしい。ついでにあの狼の強さも恨めしい。奪ってしまおうかしら。

と、ここでマリアが立ち止まる。何かあったのか。寝転んでる姿勢だと確認できない。

「どづいつこと？ 将門」

あ？ ちゃんと自己紹介したよな。俺の名前は北路だってーの。そもそもお前さっきまでちゃんと呼んでたじゃねえか。

「どづいつことだと？ この状況を見てわからないのかね？ 君はもっと賢い人間だと思っていたが」

と、どこからか別の声がした。ここでさっきのどづいつこと？ が俺に向けられてではないことを知る。……少し恥ずかしい。

そこで俺は気合を出して起き上がることにした。背中がボキボキなるが気にしないで生きてゆこう。まあ最終的には寝ている姿勢と

大差ないかも知れなかったが、それでもその光景は見れたのでよしとする。

そして俺の目に映ったのはマリアとその数メートル手前に立っている40代ほどの壮年の紳士らしき男、それにその二人を隔てる半透明な紫色の壁。

「……………」

あることに気づきまわりを見渡す。前後左右上、五方向に同じ壁がある。やっぱりこれは“結界”だ。それも俺と“マリア”を捕らえている。

そういえば洲王が言ってたよな。主犯は穂摘将門ってのがやってるって。すっかり忘れてたな。

「……………あたしを裏切ったのね」

そう言いながら何かを取り出すしぐさをするマリア。まあ絶対曉札だろうが。

「ふふ、そう怒るな。そして今すぐ死にたくなければその危ない物も仕舞った方が良くぞ。これは結界などではなく、爆弾だからな」

将門（多分）が薄い笑みを浮かべながら言う。成る程、確かに結界とはちよっと手触り違うなあと思ったならそう言うことか。……………やばいじゃん！

「あたしはこの子を街に放って魔法連盟が混乱している隙にあんたらが日本支部に攻撃を仕掛けるって言う作戦を聞いたんだけどね。どこか間違ってたかしら？ それとも何かミスをした？」

んな作戦立ててやがったのか。過激派だなおい。

「そもそも君に伝えた作戦事態が違うものだったからなあ。ミスはしてないぞ、君はよくやってくれた。それにはお礼を言っておこう。ただ私は君をここで消さなければならぬ」

「何故」

マリアは冷静に問う。

「ほら、よく言っただろう？ 魔獣は主人が消えた時、最も狂い暴れると。それに私達がわからないとでも思ったのか？」

そこで将門（多分）は一拍置く。

唇をなめて見下すような視線をマリに向けながらそれを言った。

「なあ、デスニータよ」

【第二十八話】 困った時の神頼み

ここで預言者デスニータについての説明が必要だと思う。

元々デスニータは一人ではない。魔法連盟発足の折、最初の16人に組み込まれていた最年少魔女が最初のデスニータだ。年齢、出生、血族、本名、全て分かっている謎の魔女だった。唯一分かっていたことといえば、魔法連盟入会当時16歳の若さでその16人の中に入れた才能の持ち主と言うことだけであろう。それから預言者という役職に就いた魔女は全てデスニータと名乗るようになった。襲名のような物だ。しかし襲名と違うのは決して「代目」と言わないところだろう。預言者デスニータはどこまで行っても預言者デスニータなのだ。それ故、今まで何人の預言者が誕生してきたかは誰にも分からない。唯一知っているそうなのは魔法連盟上層部がデスニータ本人だろう。

さて、話を戻そう。今将門はマリアのことをデスニータと言った。しかしデスニータは1999年に死んだ筈である。新しい預言者が入ったという話は10年以上立つのに聞こえてこない。と言うことは前、デスニータか。いや、それも有り得ない。顔立ちが全く違う上に今彼女が生きていたら91歳だ。ここまで若々しくはないだろう。

とすると途端に分からなくなる。では違う同名のデスニータのことを言っているのか？ そんな人間ほかにいるのか？

と、一人で悩んでいると、マリアが口を開いた。

「はあ？ 何言ってるのかな？ デスニータ？ あたしそんなおばちゃんじゃないわよ」

「ふふっ、しらばっくれても無駄だ。しかしまさか君のような大物

魔女が私達のような小規模テロ組織に入ってくれるなんて夢のようだよ」

「だから人違いだったの」

「まあ別に君を論破しようと言う気は私にはないよ。いずれ分かることだからね。……残り22分か」

「なによそれ」

「ふふつ、君達を囲んでる爆弾が君の体に着手し始める時間だよ。じゃあ私は高みの見物とでも洒落込もうか。ああ、アキレスヴァーレル・ウルフのことなら心配しないでくれ。すでに転送魔法の準備を始めている。ふむ、彼らの実力ならあと30分と言ったところか」

そう言うのを将門はどこかへ歩き出してしまった。

みれば、狼は魔法をかけられたのか気絶してしまっている。んだよあんなでかい凶体の癖に簡単にやられちゃったの。

それはそうと。

「あの、……デスニータさん？」

一応ね。聞くだけ。いやいや、多分違うと思うよ。本人も否定してたし。でも万が一ってこともあるしさ。

「ちつ、あの野郎一体どこで気づきやがったんだ」

これは肯定と受け取っても良いのだろう。

「えーとじゃあなんだ。マリア、これはあれか？ 協力してここから脱出しようぜ的な展開か？」

めんどいんで名称はマリアで統一。

未だに腰が痛いも何とか立てるまでには回復した俺。かんばって立つ。

「どうやらそのようね。……ってことでこれからヨロシク北路ちゃんっ！ こっとうとき協力しあってこそ仲間だよねっ！」
「しーらじーらしー！」

そもそも数分前まで敵同士だったのにこの切り替えの速さは！？

「まあいいとして。これからどうする？」

「北路ちゃんはこの結界をどうにかして。あたしはその後将門をぶん殴りに行くから」

「大切なところ丸投げじゃねえか！」

「ていうかさつき将門が言ってた『爆弾が体に着手し始める』ってどういうこと？」

無視かよ。

「あれだよ。あんたらが話してる間にちょっとこれ調べただけど、多分これ融合魔法喘律斗爆だ」

「あん？ なにそれ？」

「あのー、人間の脳にある魔法知識を媒体にしてその知識量によって威力が変わる特殊な魔法だよ。ただ普通はこんな結果みたいな形にしないし使用者の安全も多少のリスクは伴うけど確保されてるはずなんだけどね」

「ああ。○○○○のことが」

どうやら日本名を知らなかっただけで魔法自体は知っているらしい。まあこの人なんていつてんだが全くわかんないんだけどね。

「で、たしかにその魔法だともし仮にあたし達が使用者だとしたらダメージは殆どないはずだけど。あの人何をしたいのかしら」

「それがこの魔法、すごーく厄介なんだ。使用者は確かに俺たちなんだが標的もまた、俺たちなんだ」

「へ？」

「ああ、この言い方は違うか。これ、書かれてなければいけない安全装置の魔法式が書かれてないんだ。つまりまあ自爆テロみたいな感じ」

「分かりやすいわね。じゃあどうすれば助かるのかしら」

「まあ逆算していけば何とか相殺できると思うけど、ただ、数がね

……」

「数がどうしたのよ」

「これ、十六重に同じ魔法が展開されてるんだ」

「じゅっ……！」

驚いた表情のマリア。まあだれでもそうなるかも知れないけど。

「まあできるだけのことはやってみるけど。さっき言われた通り俺は魔法式の逆算やってるからマリアはこの魔法式発動した人探してくれないか？」

「え？ 将門じゃあないの？」

「この魔法、まだちゃんと完成してないんだよ。たぶんあの狼の転送魔法とかもそうだと思うけど、どこかで呪文ぶつぶつ唱えてる奴がいると思うから。この魔法だけでも16人。相当複雑な魔法でも使っていない限り半径200m以内に入るはずだから。本当はそいつ叩くのが一番手っ取り早いんだけどな」

「成る程。任しといて。伊達に預言者やってないわ。見る聞く話すは得意分野よ」

「見るは分かるが聞くと話すは関係ないのでは？」

俺の声を無視してマリアは作業を始める。

俺も鞆からボールペンを取り出して目の前の壁に逆算した魔法式を書いていく。書いた傍から消えていくが問題ない。相殺されてる証拠だ。

「そっいえばマリア」

「んー？」

何してるのかは分からないが、とりあえず作業が落ち着いたようなのでさっきから気になっていることを聞いてみる。

「お前っていつのデスニータだ？」

まあ彼女達に順番などないらしいのだがここは目をつぶってもらおう。

「全部」

そんな俺の問いに短く答えるマリア。

「は？」

「ぜんぶー」

「いや、聞こえたし」

しかしどういう意味だ？ 全部ってことはなにか？ 歴代全てのデスニータをコイツがやっていたということか？

「その通りだよ。一番最初のマリア・克蘭シスタも、その次のソフィア・ヴァシリエヴィチの“体”も、その次のテレジア・クローリーの“体”も、その次のエレン・スロー・ギートの“体”も、

その次のメリー・ラインドセイドの“体”も、その次のセピア・マ
ークイラトン・トクワの“体”もその次のレミアス・セカンドの“
体”も、その次のアート・タートの“体”も、その次のリリー・マ
ツキヤイの“体”も、その次のワークドーク・マタセイルも、その
次のベツキー・ノーランドの“体”も、その次のミーナ・エトラン
フスコも、そしてこの、アンナ・ヘルムホルツの“体”も全てそう
よ。

全部、デスニータよ」

今の発言から導き出される結論は一つだ。

「転生魔法か……」

「その通り。禁止魔法って言ってもまああたしの生まれた頃にはな
かったしね」

転生魔法。幻の魔法とされ、幾人もの学者がその魔法の研究をし、
そして捕まった。研究するだけでも犯罪なその転生魔法の使い手が
今日の前に居るとはとてもじゃないが信じられない。

はは、通りでずっと名前がデスニータな訳だよ。深い意味なんて
何もなく、ただ同一人物がやってるって理由か。

「ってことはあれか？ さっきの将門もそのこと知ってるのか？」

「さあ？ でも大方最後のデスニータが自殺したと見せかけて実は
顔変えて生き残ってましたって思ってるんじゃない？ 流石に転生
魔法はあんまり人に言ったことないからばれてないと思うけど」

うん、同感だな。だったら転生魔法の魔法陣の書き方ぐらい聞き
だそうとするはず。

「だったら不味いな」

「うん？」

「お前、そんだけ生きてたら相当な魔法式や魔法陣頭に入ってるだろ」

「うん。合法非合法関係なくたぶん平均的な魔法使いの100倍ぐらいは知ってると思うよ。転生した時そいつの頭の中もついでに貰えるし」

「ああ、やっぱりな。そして俺も自慢じゃないが魔法式魔法陣は相応知ってる。あんたにや遠く及ばないだろうがあんたの三分の一ぐらいは知ってると思う」

「うん、で？」

「この魔法の爆弾の特性忘れたか？」

「あっ！」

「そう、“知識の量”に比例して爆発が大きくなるってこと。そして俺×マリア×16は？ どんぐらいの威力になるか。まあ俺にや分からないが」

「まって今計算するわ。……………少なくとも半径50キロは壊滅状態になるでしょうね」

それは思っでより酷いな。

「じゃああの程度の結界で爆発防げると思っ？」

俺は将門が自分の周りを囲んでいる結界を指指しながら言う。

「絶対無理ね」

「だろうな。まあ教えてやらねーけど」

「当たり前よ」

そんなことより半径50キロというと俺の家は勿論のこと日月や正偽や鉞跡まで確実に死ぬ。これは本格的にピンチだぞ。

「あ、そういえば見つかった？ 魔法発動させた人」

200m程度なら何とかここからでも攻撃する手段がないわけじゃない。勿論、マリアの援助が必要だけど。

俺が聞くとマリアは残念そうな顔をした。これだけで結果は分かるってもんだ。

「なぜが見つからないわ。16人どころか一人も」

「……まあ遠距離からやる方法もない訳じゃないからな……」

くそ、ちゃっちいテロ組織の癖してなかなか面倒なことしてくれるよ本当に。

「仕方ない。最後の手段ね」

「ん？ なんか隠し玉でも持ってんのか？」

俺が聞くとマリアは片膝を付いて両手を組み、祈るようなポーズをした。ふむ、俺は知らない儀式みたいだな。

「……神様どうか助けてください」

……どうやら本当に祈っているだけのようだった。

「何してんの？」

「はあ？ 困った時の神頼みでしょ？ ほら、北路ちゃんもやりな

さい」

何故か怒っている。

ええいやケだ。どうせ逆算も間にあわないんだからやってやる！

俺もマリアと同じポーズで祈る。

「神様どうか助けてください！」

その時、空間が歪んだ。

【第二十九話】 ちっちゃければ大抵可愛い

まさか。

「うえええええええ！？マジでか！？」

おい、お前まで驚いてんじゃねえよ、マリア。言いだしっぺはお前だろ。

見れば、もう俺たちを囲んでいた魔法は綺麗さっぱり無くなっていた。予想外の出来事なのだろう、将門も驚いている。こっちもびっくりだよ。

「なあマリア、一つ言って良いか？」

「何よ」

「俺のさっきまでの努力はなんだったんだよ！」

こんなことならさっさと神頼みしとくんだった。まあそれが原因でなっただとは思えないけど。

きつと実際に魔法をかけていた将門の仲間の身に何かあったんだろっ。

「何でも良いわ。とりあえずこれで将門をぶちのめせる」

「まあ頑張れよ。あれもなかなか強い魔法使いみたいだし」

まだ結界張ったままだし。あれは自分でやったのな。

「ふっ、勿論あたしが直々に手を下す必要はないわ。クロスちゃん」

「誰それ」

「狼ちゃんの名前。今思いついたわ」

じゃあ呼ばれても分からないだろ。とか思っていたんだが、以心伝心かクロスは普通に起き上がったって将門の方へ襲い掛かっていた。

(やっぱりクロスが倒れていたのも遠距離魔法だったようでこれも解けたようだ。理由は分からん)

元々攻撃力の高いアキレスヴァーレルウルフだ。それに加えあれは異常に進化したタイプだし。多分普通のやつよりも6乗ぐらい強いだろう。

無論、将門の作った結界なんてないに等しい。たった一回吠えただけでその結界は跡形もなく壊れてしまった。どういう構造してんだあの狼。

ここで慌てるのはやっぱり将門。と思いきや結構冷静だった。なれてんのかしら？ まあ歳も歳だしね。これぐらいの修羅場は経験してんのかも。

「ふっ、こんなこと予想外だがまあ良い。次こそは完全に息の根を止めてやるぞデスニータ！」

将門はそう言つと霞のようにその場から消えてしまった。おいおい、曉札も使つてねえぞあいつ。

「……なあマリア、なんでお前そんなに怨まれてんの？」

「あたしが魔法連盟の高官だったからでしょ。あれみたいなテロ組織にとつてはまさしく敵そのものだからね」

なんだかマリアが言つと嘘みたいに聞こえたがそれ以上何を聞い

てもどうせ答えないだろうと予想出来たので、その答えに納得してやることにした。

「で、あのクロス君どうすんの？ 故郷に返してやる？」

「うーん。出来ないこともないけど、出来れば傍に置いてやりたいのよねえ。あの子の種族もう残り少ない上にあの凶体でしょ？」

だから仲間がいなくて寂しかったみたいだから」

「お前いつの間にかいつとそんな会話してたんだ」

「たかが動物の頭の中見るなんてお手の物だわ」

これも嘘っぱい。まあ事前調査でも何でも出来るしな。あれ？

そうするとマリアはクロスを寂しくさせないが為に呼んだってことか？ こいつが？ それはないか。

「で、どうすんだ？ お前も言ったがあの凶体じゃ住むとこないだろ」

「うーん、そうなのよねえ。これからドンパチ始めようってならどうせ目立つし構わないかなあって思ってただけ」

「放浪生活か？」

「暫くはそうなりそうね。つぎのテロ組織が見つかるまでは」

「別にそれに限定しなくて良かったって良いだろ。それにあいつ連れてだとそれもきついだろうし」

「そこが悩みどころなのよねえ」

「……うーん、手がないわけじゃない」

「え！？ ホント！？ さっすが北路ちゃん、なにに教えて!？」

「ただあれだぞ、リスクはあるし、時間はかかるし、クロスのを失わせることになるけど良いか？」

「構わないわ」

……俺も出来ればやりなくなかったんだけどな。そこまではつき

り言われると今更断るってのは出来ないだろうし、まあクロスが可哀想ってのもあるし、やってやるか。

「じゃあ転送魔法で俺とクロスをどっか人がいなくて広いところに飛ばしてくれ」

「あたしはいちや駄目？」

「駄目」

別に魔法に影響がでるとかマリアが危険とかではなく、単に俺が嫌なだけだ。マリアの頼みなんだからこれぐらいの我侭は許されるだろう。

「分かった。じゃあ送るわ。終わったらここにまた戻ってきて……って駄目か。じゃあ終わったら駅前公園に来て。出来るだけ近いところに飛ばすから」

「分かった。……あ、そうだ。イコール」

俺が呼ぶと、イコールが巨大化して俺の頭から出てきた。

「何だ。ぴよ。まあ大体分かってるけどな。ぴよ」

「うわっ、何この生き物？ 面白っ！」

「俺の知り合いの魔法使いの使い魔だ。下手に触ると突っつかれるぞ気をつける」

「つつつかねーよ。ぴよ」

「でだ、お前洲王のところに戻れ」

「やっぱりなー、分かったよ。ぴよ」

「マリアのことは……別に言っても良いや」

「おい」

「別に捕まらないだろ？」

「まあね」

「へーへー、じゃあ僕はさっさとご主人のところに戻るよ。ぴよ」
そう言うとイコールはまた小さくなってふわふわとどこかへ飛んで行ってしまった。

「んじゃ、お願い」

「うん」

マリアが曉札を一枚取り出す。

「おそーい」

まあマリアがこう言うのも無理はなかった。あれから夜は更け、日にちを跨ぎ、現時刻は午前3時を過ぎたあたりだ。

「時間がかかる魔法式だったんだよ。言ってなかったけっか」
「言ってなかったわよ」

「それにしても大変だったぞ。魔法式を書いたはいいが言葉が通じないからクロスが言うこと聞かねえんだよ。最初なんて襲い掛かっ

てきたからな」

「ただのスキンシップだよ」

「あっちはそのつもりでもこっちは命がけだけだな」

おかげでまた切り傷が増えちまったし。まあ気にするほどじゃないけど。

「それに電話通じなかったしな。どこに飛ばされたんだ俺は？」

「中国奥地」

「全然近くじゃねえじゃねえか！」

通りで戻ってくるのに疲れたわけだ。国も違うよ。

「日本だといいい所ないと思ってね。そんなことより、それ、クロスちゃん？」

マリアが指差すその先には、体長60cmほどの子犬がいた。ただし、未だに蝙蝠のような羽はちょこんと言つ表現が正しいぐらいに小さくなつてはいるがあるし、その人を殺さんとする瞳は赤いままだったが。

「そうだよ。まあこのぐらいのサイズなら一緒にいてもさして迷惑じゃないだろ」

「うん、ありがとね」

……うおっ、人からの直球な感謝の言葉はこうも人間の心を打つ物なのか。ちよつとドキツとしたぞ。

「じゃあこれ、少ないけどお礼に貰つてよ」

そう言ってマリアが取り出したのは、白濁の色をしたこぶし大の石だった。

「断罪石？　　というかこれ、どっからだしたんだよ」

「まあそこはどうでも良いじゃん。とりあえずこれあげるよー」
「まあ貰っておくけど……」

確かこれ、結構高価な代物だったよな。

「んじゃ、まあ機会があつたらまた会いましょ」

そう言うとマリアはクロスを連れてどこかへ行ってしまった。
うーん。こうやって見ればただの犬の散歩にしか見えないね。

真っ暗な公園に残ったのは俺一人。うわ、結構恐いぞ、この感じ。
さっさと帰ろう。

【第三十話】 そのころ現木

「じゃあ俺、ここで降りるからー」

「おう、現木^{うつつき}今度見かけたら問答無用でぶっ倒すからな」

「にはははー、楽しみにしてるぜい」

そんな会話をしながら、俺は電車を降りる。

……そんな感じで現木です。どうも初めまして。

ここに来たのは幻狼がここに行けって言ったからで、実を言うと俺はこれから何をすれば良いのかまだ何も知らなかったり。さっきの五月雨の腰巾着に関係あるのかね？（本名わすれた）あ、幻狼っていうのは俺たちの仲間のリーダーみたいな奴。性格が気持ち悪いから俺は嫌い。けどまあ仲は悪くはない。

改札口を出て、外に向かう。今日は少し暑めなのでちょっと自販機でジュースでも買っていこう。

ぶー、ぶー、ぶー

ちっ、こんなときに電話か。まあいつでも買えるから良いけどさ。誰だろ？ 棧橋かね？ そう思っって携帯を確認すれば、噂をすればなんとやら。幻狼だった。

「へーい。何のようだー？」

「お、やあやあ現木君。どうやらまだ生きてるようだね。私はとても安心したよ。最近は何で魔法使いを対象とした連続殺人事件なんかも起きてるからね。現木君も注意したまえ。といっても現木君の実力なら多少強い相手でも大丈夫だと思っっているがね。しか

し過信はいけないよ。どんなに弱い相手でも油断と過信によって形勢逆転なんていうのはいつの時代、どんな状況でもありうるからね。そんなことより私は何で電話したんだっけ？」

「俺が知るわけねえだろうが！　と言っか話が長いんだよ！」

やっぱりコイツ嫌いだ。

『ああ、思い出した。用件は3つ。一つは今日は棧橋君は休みだということだ』

「え、そうなの？　なんで？」

棧橋っていうのは俺とよくペアを組んでいる魔女だ。まだ17歳ながら結構協力的な魔法使いで『楔』は大抵5人一組で行動するんだが俺と棧橋はそれから外れている。まあ大抵といっても半分ぐらいだけ。結構『楔』はアクの強い面子が多いから下手に団体行動させたりすると弱くなっちゃう場合が多いからな。単独行動のやつも結構いたりする。

『棧橋君、今日は部活だそうだ』

「はあ！？　そんな理由！？　と言っか前学校サボってたじゃねえか！」

『棧橋君にとっては学校より部活のほうが大切らしいぞ。まあ大会近いらしいしね』

これだから楔は……。

「で、もう2つは？」

『今日の仕事内容だ。今日は穂摘将門一派の殲滅が仕事内容だ』

「まさかどお？　誰だそりゃ？」

『最近はそれなりに有名な一派らしいのだが。現木君は楔の第三班』

班長としてそう言うことは知っておいた方がいいと思うぞ』

「雑魚には興味ないんだよ」

『ふふふ、その言葉を聞いて安心したよ。まあそれなら君一人でも大丈夫だろう』

それから幻狼から詳しい場所や将門一派の情報を聞いた。

将門一派はそれほど大きな組織ではないそうだ。現在確認されているのは27人。しかも今回にかするよういで二手に分かれるらしい。とすると俺が相手するのは14人前後だろう。それぐらいなら何とかなるかな？

「で、最後は？」

『まあ言うほどのことでもないのだがね、現木君、財布忘れたよ』

「え？」

ポケットをまさぐる。うん、確かにない。

『まあジュースは買えないと思うががんばって仕事に励んでくれたまえ。健闘を祈る』

ブチッ

電話が切れた。

……俺、やっぱりあいつ嫌いだな。

「はいっ、てことで現木、現場に到着しましたー」

……寂しい。とても寂しい。いつもなら無口ながら棧橋が隣にいてそれなりに会話とかもあったんだけど。これはテンション上がらないな。っっていうか棧橋が来れないなら別の奴用意するとか出来ないのかねあの馬鹿は。

まあいいや、さっさと終わらせましょ。

俺が来たのは本日定休日と言う文字の掛札が掛かっている某学習塾。外からは中の様子が全く見えないが、どうなんだろう。いるんだろうか？ いなかったら恥ずかしいぞ。

「失礼しまーす」

ガコンッ！

魔法使うのも面倒なので普通にドアを蹴破る。ここは人通りも少ないので通報される心配は少ないだろう。手はポケットに突っ込んだまま。

「なっ、何だお前は！？」

良かった。中にはちゃんと人がいて、魔法式なんかを書いている。これで完全にクロだろ。あれ？でも人数多い気がするな？ まあ二手つつつても完全に二等分ではないのか。

あと、机とか椅子とかは物の見事になかった。まあ邪魔だからよけたんだろうけど。でもここ結構な広さあるから全部よけなくても良かったのに。

「あー？ みんな大好き現木ちゃんですよ。って言ってもわかんないかな？」

ひいふうみい……。

「う、現木だっ！」

「あの楔の現木か！？」

「なんでそんな奴がこんなところに！？」

あれ？ 意外と俺って有名？ それとも俺が世間知らずなだけかしら？ まあそんなことはどうでも良くて、

「二手って一人と二十六人じゃねえか！」

幻狼あの野郎だましやがったな！ 絶対この事知ってたよ！ くそっ、今度会ったらぶん殴ってやる！

「取り乱すことはありません。多勢に無勢です。落ちついてやりなさい」

その中で40代ぐらいの壮年の紳士が声をあげた。多分こいつが将門だな。

ふ、だがしかし26人ぐらいで俺を倒せると思ったら大間違いだぜ！ 俺はポケットから暁札を取り出し……、ってあれ？

「……暁札、忘れた」

俺がそのことに気づいたのは敵の魔法を伴ったパンチが顔面に直撃した後だった。

「おや？ 目を覚ましましたか？ おはようございます、現木さん」

ぼんやりと意識を取り戻した俺はどうやら縛られているようだ。イスに座らされているが、俺のからだの周りをロープが幾重にも重なっている。おいおい、いくら俺でもここまでやらんでも大丈夫だよ。

因みに声をかけてきたのは良くわからない人。女。

「ん、おはよう」

「寝起きのご気分はどうですか？」

「最悪だな」

「そうですね。私はとても気分が良いですけどね。しかしまさかあの楔の中でも五指には入る実力者の現木さんがこんなに簡単に倒せるだとは思いませんでしたか」

「っせーな。ちょっと忘れ物しちゃったんだよ」

「そうですね。失礼ながらお体を調べさせていただきましたが、曉札、魔器、一切なくて驚いたものです」

「おい、何か盗んでねーだろうな」

「はい、財布もございませんでしたので」

そうだった。

「あれ？ っていうか将門は？ さっきいたよな？」

「現在はお勤めに行っております」

どうやらもう一つの方に行ってるらしい。そういえば急がしそうにしてる奴が多いな。っていうかあれここの奴等が書いたのか？ 結構複雑な魔法陣じゃねえか。俺でもできねーよ。

「ああ、あの魔法陣ですか？ あれは将門様がお書きになられました。私達では出来ませんよ」

そんな俺の表情を察したのか。女が答えてくれた。

ふむ、どうやら魔法の効果の数キロ離れたところまで飛ばす魔法陣らしいな。マイナーだし複雑だし、将門ってのはどうやら物好きな奴らしい。

「っていうか、顔面いてーんだけど」

「はい、さっき気絶させる時に殴らせていただきましたので」

「おいおい、俺の顔大丈夫？ 来週合コンあんだけど」

「もともと女受けする顔ではありませんでしたよ」

……このアマ、ぶっ殺すぞ。

「せめて服装だけでも趣味を変えたほうが……」

「おいタロちゃん、出番だぜ」

むかつく女の言葉を遮り、俺は言う。その途端、俺を縛っていたロープが煙を上げて燃え始めた。魔器がなくなっただって曉札がなくなっただって、戦う方法はあるんだよ。具体的には使い魔とか。

「ヘイヘーイ！　いつまで待たせるかとドキドキしちまったぜ！？　現木ちゃんよあ！　ようやく俺っちの出番かい！　ひっさしぶりだからテンションマックスで行くぜ！　ヒーーーーハーハー！」

通常時でもこんな感じな俺の使い魔の名前は太郎（俺命名）。種族は確か火の鳥みたいな感じ（絶対違うけどまあそんな感じ）名前の通り本当に火が鳥の形を成しているだけ。火だけに大きさは自由自在でいつもは金属で出来た入れ物に入れて持ち歩いている。ちゃんとした時には普通に開けるが今みたいな緊急時には夕口ちゃんを入れ物を溶かして出て来る。

「あちちち！　おい、火力を考慮ろ！　これ、俺のお気に入りの服なんだぞ！」

「そんなこと言ってる場合じゃないだろ！？　で、おれっちは何すればいいんだ？　この建物全焼させて良いのか？」

「んなわけあるか。適当にここにいる全員ぶっ飛ばせ。手加減はしろよ」

ようやくロープからも炎からも解放された俺は言う。こいつが本気を出したら洒落にならない。

「みつ、みんなあ！　来てください、現木が脱走しました！」

「おお、その敬語キャラは緊急時でも健在なのな。でもそんなこと言わなくてももうみんな気づいてるぜ？」

音もなく蹴り上げる。狙いは彼女の喉。どっかの誰かさんは女性に攻撃することをためらっていたりするみたいだけど戦場じゃあそっちはいかなえ。……って誰にいつてんだか。

「がポツ!？」

「あ、力強すぎたかね？ まあいいや。死んだらゴメンね」

まあコイツが弱いのが悪いんだし。

そして隣を見れば、今にも攻撃してきそうな若者が一人。曉札持つちゃってるよ。でも近いなあ、7mぐらいしか離れてないってのに。

「発射魔法豪天ぎうつ……!」

「遅せえよ。こんな近距離だったら呪文詠唱よりも殴りかかってくる方がいいだろ」

またもや喉を足刀で蹴る。万一目が覚めても声がでなきゃ脅威じゃないしな。

「おい、もう最低限の奴だけ残して戦闘に参加しろ!」

「爆弾班は一人で良い!」

「とりあえず転送班も全員参加しろ!」

うーん、何言ってるかさっぱりだけど。とりあえず計画の邪魔しちゃったみたいね。悪い悪い。思ってないけど。

「おい、タロちゃん、そっちはどうだい?」

「死ねえええええ!」

「聞いてねえな」

まあ物理攻撃が効くタロちゃんじゃないから、そりゃ相手も苦戦すると思うけど、それにしても弱すぎるだろ。あと何人? 4 / 5 人か……はやつ。

1分後。

「おいおい、タロちゃん。俺、3人しか殺れなかったんだけど」

「自分の弱さを怨みな！ ヒーヒーハーーーー！！」

「何それ？ はまったの？」

死屍累々、25名の人間が横たわっている学習塾において、俺とタロちゃんは暢気にそんな話をしていた。てか、やっぱりお前力の制御できてなくて所々燃えてるじゃねえか。ちゃんと消しとかないと火事になる。

まあそんなことはどうでも良いや。まずは幻狼に電話だ。と、思ったらあっちから掛かってきた。

相変わらず何考えてるか分からない野郎だな。

『どうやら終わったようだな。どうだ？ 顔面いたいかな？』

「どっから見てんのかてめえは」

『そんなはしてない。まあしかし上手く行って良かった。私はとても安心しているぞ』

「へーへー、あ、そうだ一発殴らせる」

『まあまあそんなにいきり立つな。私だってそんなこと予測できる』

わけないじゃないか』

「……おい、そんなことってどういうことだ。俺はまだ何も言っ
ねーぞ」

『……』

「ぶっ殺す！」

『落ち着きたまえ。ここは一つ平和的に最高級羊羹で手を打とうじ
ゃないか』

「だっ、誰がそんなんで釣られるか！」

『じゃあもう一ついろいろも付けよう。これは私の手作りだ』

「……え、何？ お前いろいろ作れるの？」

『うむ、最近現木君の好みに影響されてか和菓子も作り始めたのだ。
羊羹も作ったのだがあまり良い出来とはいえないので捨てようと思
っている』

「ちよつと待て！ 捨てるかどうかは俺が判断する！ だから捨て
んなよ！」

『ではすぐに帰ってきて欲しい。もう買ったものも含めて少し遅い
がおやつとして楔のみんなに振舞おうとしていたところだからな』

「わ、分かった！」

携帯を閉まつた俺は急いで駅へと走り出す。あいつらのことだ、
もしかしたら全部食っちゃう可能性だってある。

「現木よお、お前、和菓子好きだったんだ。ちよつと意外だぜ……」

そんな太郎の声は無視することにした。

【第三十一話】 汗と涙の運動会

「私の出番んんんんんん！！！！」

バキッ！（巳月が俺に頭突きをする音）

「頭があああああああ！！！」

ボキッ！（俺の頭蓋骨が砕け散る音）

「てめえ何すんだ！ 今頭から出てはいけない音が出てたぞ！ というかお前はなんで平気そうにしてんだよ！ 石頭か！」

「知らないわよ！ っていうか私がるまる10話も放って置かれるってどういうこと！？ しかも最後に出たのはオチとしてだし！ 私ってヒロインじゃなかった訳！？」

「それこそ知らねーよ！ 俺だって前話の語り手現木に取られたんだよ！ そしてヒロインは鉾跡だ！」

「あれは男だろうが！」

「お前よりは女らしいわ！」

……因みに今はHRの前の時間。つまり遅刻してる奴以外はちゃんと教室にいるので、そんなところで朝っぱらから騒いでたらそりゃあもちろん注目は浴びてしまうわけですね。巳月が吹っ掛けてきたのが悪いんだが。

でもまあ、視線が痛い。

「あの、ホクロ？ 保健室に行った方が良いんじゃない？ あとぼくはちゃんと男だよ」

そんな中、件の鉋跡くたんが遠慮がちに俺にそう言ってきた。消極的なこの男がこんな緊張状態の中喋りだすとは珍しい。

「あ？ 保健室？ なんで？」

「いや、頭」

鉋跡が指差すは俺の額。ああ、そういえば今日月に頭突きされたところか。確かに血が相当流れてる。

「ん、ああ。まあいつものことだしこれぐらいなら大丈夫だ………
…ぶっ！」

普通に倒れた。

後から聞いた話によれば、どうやら血が足りなかったらしい。まあ、あれだ。貧血ってやつだね。

目が覚めた。

「ここはドコ？ 私はダレ？」

誰がいるか分からないけどとりあえずボケてみる。まあここはこの間来た保健室だし、俺は勿論蛇又北路なんだけどな。

そして確認するまでもなく俺はベットに寝かされていた。1時間ぐらいは寝てたかな？ カーテンでベットが仕切られているので時計を確認することは出来ない。

「おお、良く分かったな。此処は土子市だしお前はダレ・エマートだ。なんだてつきり記憶喪失にでもなったのかと心配したぞ」

「出鱈目言わないでください。万が一俺が本当に記憶喪失だった場合自分の認識が大変なことになります」

「というか誰だよ、ダレ。ああややこしい！」

「なんだ。記憶喪失だったら面白かったのに」

「あんた生徒に向かって何言ってるんだ！」

「あと何発か殴れば記憶喪失になるかな？」

「恐ろしいこと考えてやがる！ ホントに教師かコイツ！？」

「半分冗談だよ」

「残りの半分は！？」

と、さっきからさして面白くもない会話をしているのは我が学校の保険医、名を

「ピアンククルゼンドレイズ・兇善刃・アバイルゼークルココロイ
ウバックテンだ。よろしく」

「黙れ。赤鷹宝。あかたかたから 何でお前は事あることに外国人になろうとするんだ。そして名前クソ長げえよ」

「うーん、確かにこのミドルネームは読みづらかったかな？」

「論点はそこじゃねえ！」

赤鷹宝。男性、34歳、保険医なのに白衣を着ない、暇な時は踊っている、しかもかなり上手い、多少の怪我だと追い返される、実家が金持ちらしい。

まあコイツの紹介文を書くとしたらここらへんが適当だろう。まあ要するに変な奴。

「そんなことより男子生徒A」

「蛇又北路です。ヨロシク」

「お前、どうしてここに担ぎ込まれたか知ってるか？」

「貧血」

「確かに血が貧しかったのは確かなんだがな。どうやらゆとり教育の被害者がここにもいるらしい」

何だお前は、哀れな目でこっちを見るな。自分が可哀想に思えてくるだろ。

「いいか、交通人A」

「階級が下がっただと!？」

「残念ながら俺は頭をぶつけて昏倒した人間に保健室の数少ない大切なベットを貸してやることはしない。頭に絆創膏でも貼って叩き起こして授業に参加させる」

「お前人間じゃねえぞ」

「それでだ」

今度は真剣な表情で俺を見つめながら言う。先程までとは違い、

どんな嘘でも見抜いてしまいそうな目をこの人はしていた。

「おまえ、その背中の骨折と全身の火傷、どうしたんだ？」

「わお、制服で隠してたのになんで分かったんだ？」

「質問に質問で返す生徒は俺は嫌いだな。まあ強いて言うなら保険眼だ」

「保険眼！？ 何だそれは！」

「どんな怪我でも見逃さないお医者さんなら誰しも持っている超が付く能力のことだ」

「それって超能力じゃねーか！ え、医者なら誰でも持っているの？
すげえ！」

いい感じに話題が逸れた、と思ってたんだが。

「で、どうしたんだ？」

まあ誤魔化すのは無理だったか。でもなんて言おう？ 悪い魔法使いと戦ってる時に敵の魔法から脱出する為に自分の体を焼いて、その後敵の使い魔の全長30mの狼に後ろから思いっきり蹴られました。なんていう訳にもいかないし。

「あーえーつと車にぶつけられました」

「火傷は？」

「その後爆発炎上です」

「お前良く無事だったな」

「お褒めに預かり光栄の至りですね。じゃ、俺は目も覚めたんでこれ」

できるだけ自然な動きで保健室から立ち去る。ことは出来なかった。

「さてや」

腕を捕まれた。

「まあお前がどこで暴れようが、無茶しようが勝手だけどよ、学校では大人しくしてもらおうぜ？ 俺の責任になるからな」
「勿論そのつもりです」

まあ巳月に頭突きされたけど。

「わかってねーんだよ。来週の運動会、お前でんなよ」
「え？」

運動会なんてあつたんだ。と言うか来週なんだ。最近忙しくてそう言うこと忘れてた。まあ、別にいいか。

「分かりました」

「ん、意外と素直なんだな。あんまりこういう行事事嫌いかな？」

「そう言うわけじゃないですけど、まあ進んでほしいって程じゃないですねえ」

「まあそっちの方が都合つてもんだ。じゃあさつさと教室に戻りな」

大体行事事に関する情熱は小学校で概ね使い果たしてしまってもう残り少ないのだ。嫌って程じゃないにしろありがたかったのは事実。

「あ、ちょっと待て」

「なんすか」

今まさに扉を開けようとした俺を保険医が引き止める。

「お前か誰かしらねえけど、包帯の巻き方相当下手だったぞ。直してやったから」

確かに今気づいたが痛みが前より少なかった。包帯は師匠にやってもらったからな、まああの人も多少経験あるとは言え殆ど素人だから仕方ないのだろう。

「ありがとうございます」

「ん、ちゃんとお礼いえるのは偉いこった。じゃあ怪我しないようにしろよー、少年B」

「ついにAですらなくなつた！」

「じゃー、これで決定でいいかー？」

俺が教室に戻ると、どうやらLHRだったらしい。さっき話した運動会の種目について話し合っていた。倒れていたとは言えなんだか疎外感があるなあ。まあどっちにしるでれないらしいけど。

「うーっす。蛇又北路、復活しましたー」

そんな感じで俺も教室に入る。時間を見ればどうやらもう終わりそうだ。

「あ、蛇又君、大丈夫だった？」

「大丈夫ですよー。今はこんなに元気っす」

今話しかけてくれたのはクラス委員の女の子。巳月じゃないぞ。念のため。

その後、当たり障りのない会話を一言二言続けた後、俺は自分の席に戻ってゆっくり睡眠タイムを取っていた。元々自習みたいなもんだし、もう終わる時間なのでそれをとがめる人はどこにもいない。そのまま何もなく、その時間が終わった。

そして話しかけてくるのはやっぱり鉦跡。俺の睡眠タイムを邪魔するな。

「いやー、ホクロ、運動会楽しみだねー」

「ソーダネー」

「いよいよ来週かー、ぼくもちよっとは運動しないとね」

「ソーダネー」

「ホクロの活躍も楽しみにしてるよ」

「ソーダネー……ん？」

あれ？　なんか違和感が。

「なあ鉦跡」

「なんだい？」

「俺って一体運動会どの種目にでるんだい？」

「ああ、そういえばいなかったもんね。ムカデリレーと騎馬戦とクラス対抗リレーだよ」

「そういえば誰にも言っていなかった！」

そっかー、このクラスの連中にはいない奴のを勝手に決めるのか。っておかしいだろうが！　そもそも鉦跡始め何人かの男子は1種目とかしか出ない奴とかもいるのに何で俺3種目！？　いや、問題はそこじゃねえ！　俺が委員長に出れないこと言い忘れてたってことだ！

俺はとりあえず周りを見る。委員長はどこだ？………いねえ。

……ま、いつか。

【第三十二話】 汗と涙の運動会 その貳

「たっ、頼みがありまひゅっ!」

「……それ、言っの学校で良くなかつた?」

俺が学校から帰り、ボロアパートで少し早めの夕飯（カップラーメンチヨコレート味）にお湯を注いでいた時に俺の家のドアがノックされた。まあ巳月だっただんだけどね。

で、開口一番これだよ。

「いや、学校ではあんたずっと保健室に居たじゃない」

「うん、それを知っていたなら依頼より先に言うことが有るんじゃないかな?」

「?」

「謝罪だよ!」

「?」

「あれえー!? もしかして覚えてないの!? お前が頭突きしたんだろうが!」

因みに、学校では1時間ぐらい倒れてたのかなーとか思ってたけどところがどっこい、実際は5時間以上気を失っていて俺が目覚めた頃にはお昼も終わっていたのだ。

「そんなことより!」

「何だコイツ、意地でも謝らねーのな」

「お願いがありまひゅ!」

「また噛んだし」

「北路って虫の知らせで聞いたけど昔陸上部だっただんでしょ?」

「それを言っなら風の便りな気もするがまあそうだ」

それだと俺が死んだみたいじゃねーか。

「それでね、ちょっとどうやったら足が速くなるかなーって思っ

て……」

「ああ、成る程。運動会で皆に良いところ見せて人気者になりたいけれど、自分はまったく足が速くないから屈辱を我慢して俺に聞いてるってことか」

「……………っ！！……………」

………「そうよ」

「随分渋ったな」

恐らくは巳月の中で相当の葛藤があつたに違いない。

でもまあ最近忘れていたが巳月友達100人計画（俺命名。今）も全然やってなかったし良い機会か。

「友達の頼みだ。やってやるよ」

「……………ありがとう」

「随分渋ったな」

「つてことでまず、お前の今の実力を測りたいと思いまーす」
「はい」

場所は移動して学校グラウンド。時間はもう7時過ぎて真っ暗だがそれはそれ、魔法使いである。巳月がなんかこちゃこちゃやって今は夕方ぐらいには明るい。勿論人払いもしてるから誰かに見つかる心配もなし。

「偉そうに言ってるけど全部私がやったんだけどね」
「さーてやるうか!」

巳月、位置について、よいい、どん! あ、100mでじぎいます。

「……………23秒」

遅いっ! 限りなく遅いっ! そういえば前に現木が来たときのマラソンとかも人形ヒトガタ付けてはいたけど普通に最下位だったもんな。

「どう……………だった?」

「うーん、まあ走ろうか」

「何それ!?! どういうこと!?!」

つてことば。

「はい1、2、1、2、1、2、1、2、1、2。ほらキリキリ走れー。そんなんじゃ全国いけねーぞ」

「全国……………なんて……………行く気……………ないわよ……………」

現在巳月にグラウンドを延々と走らせている最中。まあ体力が基

本だよ。走りながらの突っ込みなので覇気がない。

「もう無理……」

「はえーよ」

「ねえ北路の中学時代も陸上部こんな感じですよと走ってたの？」

「しらね」

「ん？」

「だって俺、基本的に幽霊部員だったし。まあ大会とかには出させてもらってたけど良い成績じゃあ無かったわな。ってあれ？ 巳月さん？　どうかしたんでしょうか？」

さっきまでまったく無かった覇気がここぞとばかりに出てきやがってる。もうなんかオーラみたいなのが出てて怖い！

「それを先に言えええええええつ！」

「俺の頭蓋骨がああああああ！！！」

今回は普通に殴ってきた。やっぱり前回痛かったのかもね。

「ふう、とても無駄な時間を過ごした気がするわ」

「……同感だ」

「しかしどうしたのかしらねえ。あんたが使えないとなると」

「いやだから走れよ。きつといつかは速くなるって」

「来週までに速くならないといけないのよ」

「ああ、運動会来週だもんな」

そういえばそのために練習してたんだもんな。

「うーん。じゃあ魔法使っちゃええば？」

「イカサマは嫌いよ」

「えー、そんなこと言ってる場合じゃねーじゃん」
「それで勝つても気分が良くなるわ」

真面目なことだな。まあ悪いことじゃないけどそれだともう方法がないんだが。

「うーん、もう人形一枚ヒトガタぐらいははずせないかしら」

「……あれ？ お前もしかしてまだ人形付けたままなの？」

「そうよ？ だって最近は何騒だっかっていつて鏡之助が無理矢理貼るんだもの。もう自分じゃ取れないようになってるわ」

通りでそんなに遅いわけだ。っていうか鏡之助さん何してんだよ。

「ちよつとみして」

「はい」

そう言っただけは腕を捲くる。巳月の細い二の腕に人形が三枚貼ってあるのが見えた。確かに上から魔法式ではがれないような仕掛けがしてある。

「右は三枚で左が二枚。合計五枚ね」

「この間も思ってたけどお前何気にすごいよな。拒絶反応あつて普通三枚ぐらいが限界なのに。俺なんて一枚でもうまともに動けないぜ？」

「家系よ家系」

と言うことは何か？ 実質最低プラス10キロですつと運動し続けてきたのか。

「じゃあ運動会の日、朝一で俺の家に来い。剥がしてやつから」

「出来るの？」

「こんなのただの逆算だよ。というか出来ないの？」

「その上から発言は少々目に余る物があるわね。性格が悪いと見たわ」

「上から発言なんてしてねーし」

「まあ私の寛大な心でその発言は聞かなかったことにしてやっても良いわよ」

「へーへーどーも」

あれ？　なんで俺がお礼言ってるんだ？　普通逆じゃないの？

「じゃあ今日はもう遅いし帰ろうぜ」

「えーまだ8時よ」

「もう8時だよ。良い子は帰る時間だ」

「私あんまり良い子じゃないし」

「……」

「なにその沈黙」

「さーて帰るか！」

【第三十三話】 汗と涙の運動会 その参

「いいいいいいいくぞおめえらあ！！」

「「「おおーっ！」「」」

はいっ、てことで運動会当日でございます。というか俺の最初の種目のムカデリレーの直前です。

因みに今の『いいいくぞ』は植釜な。あいつは意外と統率する才能があるらしい。まあ統率だけだけ。

『始まりました。〇〇高校第5万回、大運動会。そして解説はわたし、放送部2年の乙三おとみつがお送りします。最初の種目は百足競争です。1コースは赤組、三年Aチーム、2コースは……』

まさかそんなに歴史ある高校だとは思わなかったし、記念すべき5万回目のだがまあそこは嘘だろうしどうでも良いね。

俺は前から二番目で前が植釜で後ろが野球バットだ。もう足を結んだ状態なので容易には動けない。

「いい加減柳生だつて言うの疲れてきたから手短に突っ込むぞ。死ねっ！」

「あだっ！ 頭突きはねーだろ！ ちょっとトラウマなのに！」

「じゃかしいわ！ 人の名前覚ええないのが悪いんだ！」

「おいホクロ！ さっきお前の頭が背中に当たって痛かったぜい、なにすんだ」

「植釜までうるせーよ！ さっきのはバットマンの頭突きの所為だから文句はコイツに言え！」

「誰がバットマンだコラア！ 最早原型とどめてねーじゃねえか！」

「おい、バットマン。あやまれい」

「なんで定着してんの!? 植釜てめえ歯あ食いしばれ!」

「あでっ! 結局俺に攻撃してんじゃねえか!」

「植釜まで頭が届かないんだよ、伝えてくれ」

「あいさ了解!」

「ホク口てめえなんで急にテンション上がったんだよい! ……いてっ! おま……顔面は止めるっで!」

『では位置について』

「おいいいいい! もう始まるぞ! 位置につけええええ!」

「いやいや植釜よ。位置ってどこだ」

『よい。どんっ』

「あ、始まったな」

「始まったなじゃねーよ! 早く行くぞ!」

「どっち足から?」

「じゃ、じゃあ右から行くぞい! せーの、いちっ……」

『おおーっと赤組2年Bチームいきなり倒れたー! チームワークがまったくないぞー!』

赤組2年Bチームってのは俺たちのこと。

およそ6人の暑苦しい男の塊が、見苦しく地面に倒れ伏した。はつきり言おう。気持ち悪い。

そのとき、そいつがミスったのか後方の一人が喋りだした。

「なあなあ、右ってどっちだったけ? テンパリすぎて忘れちゃった」

「あれだ、お箸持つ方のがわ」

「ああ。わかった」

「じゃあ、行くぞ！　せーのっ、いちっ……」

どうやらそいつは左利きだったらしい。

やべ、どんだん前のほうと差が離れていく。

「ああもう面倒だ！　全員匍匐前進ー！」

植釜が叫ぶ。つられて皆で匍匐前進。こういう時だけ意思疎通ができるのは自慢になるのかしら？

『なんとということだー！　赤組2年Bチーム、百足競争のルールをどこかにすっ飛ばして匍匐前進で進んでいるぞー！　これはどうなんですかねえ、解説の小田おただ々さん』

『考えられないですねー。まあ脚力以上の腕力さえあれば話は別ですが』

『しかし先程から他のチームをどんどん追い抜いていますか？』

『うわ、あのチームのみなさんおおよそ高校生ではありえない表情をしていますね。まるでニアに追い詰められた月のようですよ。ぶっちゃけそこまで本気になってもらいたくなくなかったですね』

『あ、いま怒涛の進撃を見せていた赤組2年Bチームがその動きを止めてしまいました！』

『まあ体力の限界でしょうね。おそらくもう彼らは一步も動けないでしょう』

『しかしゴールまであと5mほどですが？』

『あと5m動けるなら倒れる前にやっているでしょう』

なんだか放送席のほうでおかしな会話が聞こえるぞ？　俺たちがもう動けないだって？　はっ、たかが5m動けないでどうするんだ。

「なあみんな、行けるよな!？」
「「「おおー!」「」」

パーン

『今最後尾がゴールしました! 最後にゴールしたのは白組1年Aチームです。では結果を発表します!』

一位 白組3年Aチーム 二位 赤組3年Bチーム ……………十
一位 白組1年Aチーム

リタイア 赤組2年Bチーム

「…………あんたら馬鹿じゃないの?」
「「「返す言葉もございません」「」」

現在植釜はじめムカデリレーメンバーは委員長からお叱りを受けている。俺は逃げた。今は皆が居るところから少しはなれたところで水分を取りながら巳月と話している。こいつが近くに居れば大抵のやつは寄ってこないからこういうときは便利だ。

委員長の名前なんだっけ? たしかブサカワウサギとかだったよな。まあいいか。どうせ呼ぶときは委員長だし。

「宇佐川宇佐美だよ」

「あん?」

「うちのクラスの委員長の名前」

「ああ、惜しいな。響きが似てる」

「惜しくないでしょ。なんで自分のクラスの委員長の名前も知らないのよ」

「そういつお前はよくみてるんだな」

水分補給。ああ水がおいしい。

「そういえば北路、もう次の種目じゃない？」

「え！？ そうなの？ はやくね？」

「この次ね」

「お前の女子100mは？」

「もう少し後。まあクラス対抗リレーよりは前だけど」

「まああれは最後だもんな」

「うん」

「ん、じゃあいつてくるよ」

「いつてらっしゃい」

そういつて植釜達のところに戻っていく。確かあいつらも騎馬戦出るんだったよな。

「うおーい、次騎馬戦だろー」

俺が植釜達に呼びかける。

「はあ、やっぱり駄目駄目だなあ。ホクロお」

「あ？ 何の話だ？」

騎馬戦はまだしてねーだろ。

「五月雨ちゃんだよ五月雨ちゃん。さつきから一人で寂びそうだったんだからもう少し相手ぐらいしてやってれば良かったんだ」
「……ああ」

それは失念してたな。確かに気づかなかった。そして何より植釜にいわれたのが悔しいな。まあずっとは無理にしてももう少し居るべきだったかな？

巳月の方を向く。あ、目が合った。手を振られたので振り返す。うん、楽しそうだから良いか。

「うし、行くか」

「良いのか？」

「手、振ったから大丈夫」

「いくぞコラぁー！ー！ー！！」

「「おおー！！……つてなんで俺達が下なんだよ！」」

「仕方ねーだろ。馬が居ないと始まらないんだから」

俺が人で柳生と植釜に乗っかる形をとっている。ジャンケンだし平等の筈なのに文句を言うとはこれいかに。

「ちっ、分かったよい。じゃあ絶対最後まで生き残れよ」

「鉢巻取られんじゃねーぞ」

「ふっ、誰に言ってるんだか」

「お前だよ。なんで急にキアラ変わってるんだ。うわ、コイツすげー心配なんだけど。俺が変わっちゃダメかい？」

「絶対渡さない」

『さあさあ始まりました、対人型騎馬隊鉢巻先制奪取選手権。通称騎馬戦!』

「絶対そんな正式名称じゃねえ」

『今宵、その命とプライドを賭けてこのグラウンドに花々しく咲散る戦士ただれだあ!』

「そんな大仰なもんじゃねーだろ」

『さあ行けえ! その本能の命令のままに今まさに駆け出すのだあ!』

「あと2分時間あるけどな」

『始めっ!』

「始めるんだ!」

まあその後の結果については書いておく必要は無いだろつ。え? 書かなきゃ駄目? …… まあ俺なりに健闘したよ。1分持ったし。

さーてクラス対抗リレーの方でも頑張るか!

【第三十四話】 汗と涙の運動会 その四

そんな感じで騎馬戦も終わり（早々に散っていったので後半暇だったのだ）やっとこさ休憩に入る。もうここまで来れば後は最後のクラス対抗リレーだけだから、高みの見物と行こうじゃないか。

自分のクラスのところへ戻る。向こうから長い髪を揺らしながら小走りにかけてくるのは巳月だろう。

「お疲れー」

「うーん、疲れたかどうかといえばまあ疲れかかな？」

植釜達との口げんかで。

あいつら全責任を俺に押し付けやがって。自分達が俺の指示したところに行かないのが悪かったというのに。

「すぐ負けちゃって残念だったね」

「まあ赤組が勝てたからいいよ」

「そういえば早漕くん見なかった？ さっきから探してるんだけど見つからなくて」

早漕くんってのは鉾跡のこと。

「鉾跡はどうせ他の奴に捕まってるんだろ。こういう行事の日にあいつのスキル、「知人集め」がいつも以上に発揮されるからな。フリーになるのは運動会が終わってからだと思っぜ？」

「……そう」

うーん、こういう普通の日だと巳月の反応がいつもと違って大人しくて困るな。確かに友人の少ないコイツにとって行事ごとの

は些か辛い物があるのかも。はっちゃけられないしな。やっぱり話し相手がいないってのは……、

「あれ？　そういえば親父さん来てないの？」

「うん、仕事が忙しいんだって」

あー、まあ確かにそうか。そうなるかあとは嗽鏡之助さんかな。というかあの人は頼まれなくても来るだろう。

「来て欲しくなかったから今日運動会だと言ってないわ」

「相変わらず鏡之助さんに厳しいな」

「そしてパパに頼んで今日は外国に出張に行ってもらってるわ」

「ひでえ」

俺のそこはどうだろう？　まあ両親は来ないとして妹は……まあ部活で忙しいか。あとは師匠は……あいつは来ないな。

「じゃあ俺と一緒にだ。一人」

「ひとりー」

「イエー」

「いえー」

ハイタッチ。

妙なところでテンションの上がる俺達だった。

「そんなことよりお前の競技そろそろじゃないか？」

「巴月は100m徒競走です。」

「あ、確かにそうね」

「さつさと行って来いよ。せつかく人形外したんだからいいとこ見せるよ」

学校来る前に外したのです。

「当たり前よ。あんたに私の走りっぷりを見せてあげるわ」

そう言う巳月はいつも以上に頼もしく見えた。

が、しかし。

運命の女神はいつだって気まぐれなもんです。

結果で言えば、巳月の走りは悪くなかった。と言うか流石にいままで重石を付けながら生活していただけあって他の女子とは比べ物にならない程にその走力は突出していた。ドラゴンボールにそんな場面があったように。ただ、いくら筋力があっても運動神経が巳月はとてつもなく残念だった。

簡単に言えば転んでしまったのだ。それもゴールまであと少しと言ったところで。しかし後方とは相当の差を広げていた巳月である。すぐに起き上がり歩いてでもいいから前へ進めば楽々と悠々に第一位でゴールインできたであろう。

が、ここでまたもや運動神経の悪さが不幸を招く。

人間には反射と言う物がある。それは緊急の時などに脳が感じる前に体が動いてしまうことである。そう、例えば転んでも頭を打つ前に手でその衝撃を緩和するとか。

しかし巳月にはそれが出来なかった。お前は地面に突っ込んでいるのかといわんばかりに頭から地面に着地してしまったのである。そして巳月が今まで走っていたスピードがそのまま力に変換され、巳月は気を失ってしまったのだ。

因みに以下はそのときのナレーション。

『おおーっと6コース赤組抜きん出たー！ 速いぞ、これは速い！
ダントツだー、二位とすでに5m近く放している！ いくかいく
かいくかー！？ そしてそのまま6コース赤組みゴー……………
……………、あれ？ 大丈夫ですか？ おーい保険委員会！……………
……………一位、白組。二位、白組。三位、赤組……………』

「……………リタイアなんておそろいじゃん。俺もだよー」

「まあでも大した怪我じゃなくて良かったじゃん」

「……………」
「いやいや、実際すごかったって。これでクラスの連中もお前のこ
と見直したんじゃないの？」

「うっうっ……うっく」

やべえ、泣いてる。どうしよう。

「これに……これに、かけてたのに……それに、ほくろにも、てつだつてもらったのに……うう」

「で、でもさ、友達作る機会なんていくらでもあるし」

「でも、ほくろにも、てつだつてもらったから、せいこうさせたかった。……どりよくが、むだになっちゃた。……ごめん」

「無駄になつてねーよ」

「……」

「さっきも言つたろ？ お前のこと見直した奴だつて相当いるはずだし、まあ結果はともかくあんなに頑張ってる奴が恐い人間じゃないつてことぐらい分かつただろ。それに何より……その、……なんだ」

「……？」

「……俺も巳月のこと見直したぜ？ うん、こんなにすごい奴が俺の友達なんて誇らしいことこの上ないぜ。自慢してきてもいいか？」

「……ありがとう」

くしゃっ、と。少し赤くなつた目を細めながら巳月は綺麗に笑つた。

「んじゃ、これから俺のクラス対抗リレーが始まるけどよ、ちゃんと見とけよ。俺のスバライシ走りを」

「うん。転ばないようにね」

「胆に命しておきます」

いや、これはかなり負けられない。今までののはまあ自軍の勝敗しかかかってなかったけど、これは駄目だ。負けたらホントにお通夜みたいな空気みたいになってしまう。これは本気を出さないと。つてまあ今までも普通に本気だったと思うけど。

靴紐を締めなおす。最初からしっかり締めてあったけど何かしてないと落ち着かない。

そしてどうやら俺はアンカーらしい。さっき知った。最良の結果を残せばいいけどそうでなかったら最悪だぞ。というかアンカーにすんな。俺より速いやつ沢山いるだろ。ってああ、誰もやりたがらないからあの時いなかった俺にしたのか。馬鹿じゃねえの!?

しかしやれと言われりゃやる男、蛇又北路ですよ。やりましょう!

「ドクターストオオオオオオツップ!!」

背骨が粉碎した。

あれ? 背骨って破壊されると下半身不随とかになるんじゃないかな? たけ?

「いいいいいいでええええええええええ!! 何しやがんだ! 赤鷹宝!」

何を隠そう今後ろ回し蹴りで俺の背骨を粉碎したのは本来怪我人を助ける為に存在する我が学校の保険医赤鷹宝だったのだ。というかマジで痛い。動けない。おい。保険医が怪我人増やしてどうすんだよ。

「なにすんだはこっちの台詞だコラ。なーに何事も無かったかのように運動会エンジョイしちゃってんだ。足の骨折るぞ」

「リアルで恐いな！」

「っーか参加すんなって言ったの覚えてなかったのかよ」

「いやー、俺の調子も良さそうだったし大丈夫かなあと」

「てめえの調子なんざどうでも良いんだよ。さっさと立て。本部に連れてくから」

「なんで本部なんて」

「あそこは救急道具とかもあるからな。マジでお前のそれ、悪化してるかもしれねーぞ」

「そしてお前が止めを刺したと」

そうと分かれば話は別だ。確かに赤鷹も真面目に話してたので、真面目に聞くことにした。俺は痛い背中を必死に我慢しながらなんとか立ち上がり、本部へと向かう。

「ちよ、ちよー！ 蛇又くん、どこ行くのさー！」

歩き出した俺の後ろから元気な声が聞こえてくる。振り向かなくても大体分かる。委員長だ。

「ああ、すみません。俺ちよつと怪我したんでやっぱりリレー出れませんわ」

「ええー！？ それは駄目だよ蛇又くん！ 他にやりたがってる人

もないんだから！」

「別に俺もやりたくてやってる訳じゃないんですけどね」

「とにかくそれは困っちゃうからさ、強制失格になっちゃう！」

「委員長が出れば？」

「え？」

「いや、だつて男女混同ですよ。確か委員長これに参加してなかったから出ればいいじゃないですか。問題解決」

「いやー、あたし女の子だし」

「女の代わりに男ならともかく男の代わりに女なら何とか説得が聞くんじゃないですか？　ここは委員長の腕の見せ所ですよー」

「えー、いやー、そのー……」

「つまりあんたもやりたくない」と

「うん」

「素直だな」

「うん」

「あー、それなら一応心当たりも無いわけじゃないですけど」

「え！？　マジで！？　あたし助かつちやう！」

「まあ多少のリスクは伴いますがね……」

「……暇だ……」

あれから本部に言った後、そこで保険医・赤鷹宝からのまさかの「あ、やべ、ゴメン。思ってたより酷いわ」発言により、半強制的にグラウンドからも退場させられ、現在は保健室にて一人寂しく休憩中という訳なのです。

しかし忙しいであろう鉱跡はともかくクラスの連中とか赤鷹とかも来ないってどういうことだ。俺、見捨てられた？

時計を見れば、一応予定ではもう20分前に運動会は終わってる筈なのだ。それなのに誰も来ない。……酷く寂しい。

「北路」

「うおっ！ びっくりしたー。なんだ巳月居たのか」

声に反応して振り向けば、そこにはリレーではきつと活躍してくれたと信じている我が友人がそこに居た。

しかし俺に気づかせないでここまで来るとは巳月、なかなかやるな。

「北路、ありがとう」

「ん？ 何の話だ？ 俺はさっきからここで寝てただけだぜ？」

「委員長から聞いたよ。リレー、私のこと推薦してくれたの北路なんだってね」

その言葉に少し安堵する。「委員長から聞いた」と言うことは委員長とは少なからず会話が成立していたということだ。そしてリレーに参加したということだ。他の人に頼み込む可能性もあったのが、流石は委員長だな。

「んーまー、そうなんだけどさ。そんなことより結果はどうだった？」

「うん、私が最後の最後で追い越されちゃってね。二位だったよ……」

多分他の全てのクラスがアンカーを男子で固めてきているであろうから、この結果はすごいことだと思う。しかし、もしかしたら巳月は責任は自分にあるか思っていて自己嫌悪に浸っているかも知れない。

「あの子……」

そう思っただけで何とか巳月を励まそうと、口を開いた瞬間、その必要は無いと感じた。巳月は困ったような、泣いているような表情を浮かべながらも、それでも確かに笑っていた。

「終わった後にね、みんなのところに行こうと思ったんだけど、その前にみんなの方から来てね、褒めてくれたの。笑ってくれたの。『良く頑張った』『惜しかった』って」

「そっか……」

「だから北路にお礼を言おうと思って来たの。リレーのことも勿論そうだけど、初めて友達になってくれたこととか、私のこと助けてくれたこととか。私、北路がいなかったら運動会なんて参加すらしてなかったと思うから。だから、本当に」

北路、ありがとう」

その時の巳月のその表情は、本当に綺麗で、俺はこの巳月の笑顔が脳裏に焼きついて離れないという現象がこの後2週間ほど続いたのであった。

今思い返せば、この人を何があっても護りたいと思ったのは、これが最初だったのかもしれない。

【第三十五話】 一般的なそれ

朝、嫌な汗で目が覚めた。

布団から起き上がるも、纏わり付くような嫌な気配は消えない。

何かを振り払うように俺はいつもよりも早く登校の準備を始め、そしていつもよりも早くに出かけた。

それがいけなかったのだろう。

いつもよりも早い時間に外に出てしまったために、道路には全く人の姿が見えない。それでも俺は何か追われるようにいつもより速めに自転車を漕いで、学校とは真逆の方へ走らせる。

なんてことは無い、巳月の家に行く為だ。

別に巳月である必要は無かったのだ。ただ他の人に、他の誰かに会いたかった。会って安心したかったのだ。

しかしここでイレギュラーが発生する。

悲鳴。それはすぐ近く、死に行く人間が最期の力で搾り出したようなそれはとても情けないような悲鳴だった。

本当は無視したかった。

その証拠に俺の手足は面白いほどに震え、俺の目は決して悲鳴のあった方向を見ようとはしなかった。

しかし、行かなくてはならない気もした。ここでそれを確認をしないと何かが終わってしまうような、何かが始まってしまつような気がしたからだ。

自転車を降り、悲鳴の聞こえた路地に入っていく。

そして俺はその判断を後悔することになる。

目の前には二人の人間。

いや、正確には一人と“一つ”である。なぜなら、もうその人間は、人間であつて人間でなかったからだ。

その男は、切れ味の悪い刃物で無理矢理切つたように、首、上半身、下半身と綺麗に三つに分かれていた。

つまり完全に絶命している。

そしてその絶命している男は、歴史に残る天才預言者、デスニータとこの俺をぎりぎりまで追い詰めた男、穂摘将門であつた。

もうあの紳士的な顔も、見るも無残な表情となつている。体中の血があたり一面に跳び散らかつていて、その血を見ただけで俺は吐きそうになつた。

「あれ？　こんなに朝早くにこんなとこ通る人間がいるなんて思わなかつたな。お兄さん、誰？」

そして将門の印象が強すぎて忘れていた。ここにいるもう“一人”の方の人間。見た目、俺より下か同い年ぐらいの歳である。多分女性であろう。そして女の子にしては短すぎるその髪は金髪に染められていた。

返り血は一滴もない。

返り血は無い、と言うことでこの少女もこの将門とはまったくの無関係で将門が殺された後の第一発見者であることを一縷の望みをかけて祈つただけだが現実はそのうは甘くない。

続く言葉でその妄想は打ち崩される。

「お兄さんもこうはなりたくなかつたら、今すぐ逃げた方が良いでしょう。僕の気が変わらない内に。まあでも安心してよ。僕は基本的に“魔法使い”しか狙わないからさ」

「つつつ！！」

その途端、その少女の右腕が変化し始めた。

「ぼこぼこっ。」と右腕から蠟のようなものが出始めたかと思ったら、それがそのまま形を成して、その右腕は2mを超える巨大な一振りの刀へとかたちをかえたのだ。

「逃げる？ 死ぬ？」

もう、答えることすらできない。

俺は転がるように路地からでてきて、そのままの勢いで自転車に乗るのも忘れ、巳月の家まで走った。最終的にはなんと自転車で行くよりも速くついたので、巳月の家まで行く20分間は、地獄のように長く感じられた。

「……ってなことが今日の朝にあったんだー」

「あんたそれもっと早く言いなさいよ！」

現在お昼の時間。いつもなら俺、巳月、鉦跡の三人で食べるのだが、今日は鉦跡がどこかのだれかに引つ張られていつてしまったので今は二人だけだ。なので魔法の話するには好都合と思い、今に至

る。

「はあ、朝からどうも様子がおかしいと思っただら、……それって国際的犯罪に巻き込まれたんじゃないの？」

「国際的って……そんなに有名なの？ あの子」

「犯人は誰かは聞いたことは無いけれど、魔法使いを対象とした連続殺人事件が起こってることは相当前から有名だったわよ。1932年の時の犯人の再来だって」

「ああ、そういえばそんなこと言ってたような」

家にテレビはあるけどあんまり見ないからなあ。

「まあどつちにしろ上手く逃げられたみたいだから良かったよ」

「そうね、北路の実力じゃ絶対に殺されてたものね」

「でもお前危ないんじゃないか？ 工広さんの娘だし」

「まあそのときはその時よ。私なら勝てるかも知れないし」

「……まあ確かにそうかもな。あ、でも正偽にはこの事言うなよ」

「なんで？ 火之迦具くんも魔法使いなんだし危ないんじゃないの？ しかも正式だし」

「あ、お前知ってたんだな。でもあいつの性格からするとなりふり構わずあの子を捕まえようとする可能性があるって言うか絶対そうするだろうから、それは避けたいんだ」

「火之迦具君が死んじゃうかも知れないから？」

「うん、あいつどんな無茶するか分かったもんじゃないからな」

いざとなったら俺は逃げるけど、正偽の辞書に『敵前逃亡』の文字は無い。死ぬまで戦うやつだ。

「分かったわ。それにしてもその子、一体どんな魔法使ってたのかしらね」

「全くだよな。この俺でさえ聞いたことすらない魔法だったぜ。もしかしてあの子の創作なのかも」

「それはなかなかどうして我輩も気になる所だの」

「本当だよなあ……って正偽！？いつからいたの！？」

いつ間にやら正偽がいた。結構ナチュラルに。

「『朝、嫌な汗』のところからだの」

「最初じゃねえか！」

「で、ホクロ、その話を詳しく聞きたいのだが」

しかしそこまで聞かれてしまっているのなら仕方が無い。変に隠さない方が賢明だ。

でも、詳しくって言われてもなあ。ほとんど喋っちまったし。強いて言うならその子の使っていた魔法が、本当に、掛け値なく、俺の知らなかった魔法だったということぐらいだろうか。

俺がそのことを話すと、

「うーん、ホクロの知らなかった魔法か。それって何か手がかりになるのか？」

「いやいや、火之迦具君は知らないかも知れないけどさ、北路の魔法知識って半端じゃないのよ？今まで魔法に関することで北路に聞いて答えが返ってこないことなんて無かつたんだから」

と、ここで巳月。なかなか嬉しいことを言ってくれる。

「そうか、では相当マニアックな趣味を持つ魔法使いと言うことでいいのか？しかしそれが何の手がかりに……」

「おい待て正偽。なんでお前は犯人を捕まえることを大前提として考えてるんだよ」

「？ 何を言っているホクロ。我輩の周りで物騒な事件が起きている。そして我輩にはそれを止められる力がある。簡単なことだ」

「いや、まあそうなんだけどさ」

「それに聞くとところに寄れば、魔法連盟に通報してもすぐにどうこうなる類の話ではなかるう？」

「まあそれもそうなんだけどさ……」

実際に魔法連盟の輩も何人もやられている。しかも警護部の奴等もだ。

「だったら我輩がやるしかなかるう！ この火之迦具正偽、我が命を賭してもその連続殺人鬼の首を討ち取って見せようぞ！」

ばばーん。

絶対今正偽の後ろでそんな効果音が流れた。そんな気がした。

「……ねえ、絶対火之迦具君一人にするのは危ないと思うんだ」

「……奇遇だな。俺も同じことを思っていたよ」

かくして、ここに全員のジョブが魔法使いの妙なパーティーが結成されたのである。

……まあそう簡単に見つからないよね。

あれから一生懸命探し回って（正偽だけ）、相当時間が流れた。あたりは真つ暗で三日月が綺麗に輝いている。つまり正偽の時間だ。（皆さん忘れてるかも知れないが正偽は狼男です）

「ねえ火之迦具君、そういえば狼男って満月の夜しか狼にならないんじゃないかなかったっけ？」

いい加減搜索にも飽きてきたのか巳月が雑談を始めようとする。

「種族の違いだ。確かに満月の夜しか狼にならぬのが一般的だが、他にも色々あるのだ。月さえ出てれば何時でも良かったり、一度狼になれば数週間戻れないタイプとか。我輩は前者だのう。日が沈み、月が顔を出せば我輩の時間だ。まあ狼の状態になってない時でも身体能力が上がるタイプは珍しいがのう」

「因みに現在確認されてる狼男の全ての種族の総合でも、500いかない程だ。更に正偽と同じ種族となると、まあいても3、4つてとこか」

「あ、それでその首輪を付けてるわけね」

「うむ、この首輪は狼化を押さえることが出来るらしいのだ。我輩は親からこの体質を受け継いだので、2歳の時から愛用してある」

うだうだ喋ってる間に、だだっ広い公園についてしまった。もう遅い時間のため、公園内はおるか、周りにさえ人っ子一人いない。

「ふう、仕方ないわね。ここで私の出番かしら」

「ん？　なんか作戦でもあるのか？」

「うん。まあ周りに人が居ない事と、広い場所が条件だったからこの作戦するのにここまで時間掛かっちゃったけど」

「どんなの？ やってみてよ」

すると巳月が得意げに言う。

「ふふん、良い？ 犯人は魔法使いばかり狙ってるんでしょ？でも外見からは魔法使いかどうかってのは分からないじゃない。北路が見逃してもらえたのが良い例ね。だったら犯人はどうやって魔法使いと判断しているか。まあ勿論連盟の人たちは記章付けてるからそれを見たんだと思うけど。それ以外はどうしてたと思う？ 私はね、魔法使いが魔法を使ったところを感知してそれに寄って来てると思ったのよ」

いつの間にもやら巳月が曉札を持っている。

あ、こいつに任せなければ良かった。

「爆破魔法洗忽恋瓦！」

一般的なそれとは桁違いの爆発音が轟いた。

【第三十六話】 新手はぞくぞくと

現実はその上手く行くものではない。

結果から言うと、朝の少女は現れなかった。

だがしかし、なんか変なおっさんは現れた。

「なんだ、こんな所で元気に遊んでる人がいるなーと思ったら、やいばー先生じゃないのか。んー、君達、魔法使いで良いの？」

その男は20代後半といったところか。なかなか落ち着いた雰囲気
の大人だ。

黒っぽいコートを着ていて、背中に細身だが2mほどの長さの十字架を10本ほど背負っている。その色は漆黒。確かあれは……、

「っ……！」

その人物に真っ先に反応したのは意外にも正偽だった。

「さあああああああるうっつうっつうっつとおおおおおおびいいいいいいいい……！」

直訳、さるとび。

正偽が何に対して怒っているのかは分からないが、とりあえずこの人達は知り合いつづかった。

「君、誰？」

ちがった。

「うあああああああああああああああああああ！！」

正偽は叫びながらそのさるとびさん（仮）に飛びかかっていった。こんな正偽を見るのは初めてだ。

いつもは冷静沈着とまでは言わないが、熱い男ではあるが、それでもここまで激昂するような人間だとは思わなかった。この人たちには何かある。誰でもわかったことを口に出してみよう。

「なんだ？ 危ないじゃないか」

気がつけば正偽はさるとびさん（仮）に締め上げられていた。

これもまた珍しい。正偽は師匠を除けば俺の周りでは肉弾戦において最強といっても差し支えない程の実力者だからだ。

しかし、これはあのさるとびさん（仮）が強いとかではなく、ただ正偽のほうに我を忘れてただ我武者羅に飛び込んだ結果だろう。

「ああ、俺の名前は猿飛ね。猿が飛行すると書いて猿飛。いつまでも（仮）じゃ俺が可哀想でしょ」

猿飛さんがそういった。

「貴様っ貴様っ貴様っ！」

「なんだよ五月蠅いなあもつ。ん？ あれ？ もしかしてそれ、その首輪って。君、火之迦具正偽？」

どうやら猿飛さんが一方的に忘れていただけのようだ。しかし猿飛さんはなおもその拘束を解かない。

「その通りだ、猿飛なづな奈綱！」

「あはは。久しぶりじゃないか。元気にしてたかい？」

猿飛さんは軽快に話しかけるも、正偽としては話し込む気などさらさら無い様で、必死に猿飛さんの拘束を解こうと躍起になっている。

助太刀に入った方が良いかな？

「ああ、君達は動かないでくれ。流石に三対一は面倒だから。もし君達が俺に手を出そうとしたらこの子の首が飛ぶよ」

「ホク口、五月雨殿！ こやつには手を出すな！ これは我輩の問題だ！」

二人同時に止められてしまった。

しかし手を出すなどいっても以前正偽が危険なことには変わりはない訳で、猿飛さんもそう思ったのか、正偽に問いかける。

「かつこいいこと言ってるけどどうするつもり？ 君は今完全に俺に捕らわれてるよ？」

「忘れたとは言わせぬぞ。我輩は狼男だ」

ぶちい。と、正偽が空いている方の手で、乱暴に首輪を引き剥がす。

すると前回と同じ様に、正偽の体の変化し始める。その変化に伴って体が巨大化するため、猿飛さんは手を放さざるを得ない。

「ウガアアアアアアアアアアアアアアア！」

そういえば前に正偽が言っていた。

首輪を外せば正偽の理性は1分と持たない。そして、一度野生の本能に負けてしまえば、彼は目の前にある物全てを破壊する悪魔に

成り下がると。彼が耳を傾けるのは同属の吠える声だけ。つまり俺達も殺戮対象。

「やばいな」

「やばいわね」

同じことを思ったのか、巳月も言う。

「このままじゃ火之迦具くんやられちゃうわ」

「あれ？ そっち？」

「他に何かあるって言うの？」

あ、そういえば途中で正偽の声に遮られてて忘れてたな。

「猿飛イイイイイイイイ！」

正偽がその狼化した腕を乱暴に猿飛ほうのほうにぶつける。これまただの暴力で、正偽らしくない。

「あの十字架といえば」

猿飛さんは冷静に背中から両手に一本づつ十字架を取り出す。あ、正偽がまずい。

「エクソシストのもんじゃないか」

ズンツ。何かが倒れる音がする。

見れば、いや、見なくとも分かっていたのだが、案の定正偽が吹っ飛ばされて地面に倒れていた。自身にはダメージはあまり感じていないのか、痛がってるというよりは、不思議がっている顔をして

いる。

「エクソシスト。魔法使いが生まれる前から存在すると言われるそれは、地獄のような訓練と寿命を縮める儀式の代わりに魔物的な、悪魔的な、魔術的なものに対し絶対的な力を誇る。現在でも数は少なく、日本にはその数は0と言われていた筈なんだが」

俺の言葉に対し、猿飛さんが答える。

「おしいね。本当におしい。確かにこのコートも、この十字架もそれから勝手にパクってきたものだけれど、俺はエクソシストじゃないんだ。これらを使っているのはただ単に使い勝手が良いだけだね。どれも独学で独自の物なのさ」

と言うことはコイツもやはり魔法使いか？

「ただし」

と、そこで猿飛さんが俺の心を読んだかのように付け足す。

「でも俺は魔法使いなどでは“絶対に”無い」

絶対にの部分強めて猿飛さんが言う。

「あっと、そろそろ正偽が起きそうだね。よっと」

そう言いながら、猿飛さんは無作為にその二つの十字架を放り投げる。

多分さっきの正偽の攻撃を弾いたのがコートの方だとして、その十字架は確実に攻撃用だな。

と思っただらその通りだった。

放り投げた筈のその十字架は確かなスピードをもってはつきりと正偽の方へ向かって行っている。そしてそのまま十字架が貫通。

魔法関係のことなら大抵分かる俺でも、エクソシストの使う道具となると畑が違う。これは何に使うのかさっぱりだ。まあそれでもエクソシストかどうかぐらいは知ってたけど。有名な道具だし。

「正偽っ！」

見る見る正偽の体が人間に戻っていく。出血は思ったほど多くは無いが、それでも命に関わる怪我だということは分かる。早く手当てをしないと不味い。

「まあ運が良かったら生きてると思うよ？」

あっけからんと猿飛さんは言う。

「でも、まあ、生かしておくつもりは無いけどねー」

背中から一本取り出し、再び十字架を構える。どうやら本当に正偽を殺す気のようなだ。理由は分からない。

「奈綱」

新しい声。

いつの間にか。それはいつの間にかとしか言いようが無かった。その人は今までずっとそこにいたかのように、俺と巳月の間に胡坐をかいて座っていた。少々眠そうである。

「おい、奈綱何してんだよ。メールチェックしてねえのか？ 仕事だっつってんだろぅが、大物だぞ？」

「え？ あ、ゴメン。ちょっとこっちが忙しかったから」

「成る程、まさに『緊迫の第三話！ 孤独と喧騒の果てに』って感じだな？」

「うーん、前から言おうと思ってたけど、その例え全く分からないよね」

いきなり出てきて、全く緊張感の無い会話を始めやがった。とうか今出てきたほうは明らかに大学生といった風なので猿飛さんに敬語を使わないのはどうかと思うがまあそこら辺は気にしないでいいか。人事だし。

「あー。じゃあ今回のところは時間もなし、引き上げてあげるよ。正偽にそう言っというて。まあ生きてたらの話だけど」

そう言っつて、本当に彼らは消えてしまった。

「火之迦具くん！」

巳月が正偽の方へ走っていく。おお、そうだった。やばい、救急車呼んだ方がいいかな？

「救急車は、いい。……呼ぶな。……大丈夫だ」

奇跡的に正偽に意識があった。

じゃあここは俺の魔法で頑張っつて治すか。

「それも……いい」

巳月と俺によって十字架を引き抜かれた正偽がまず最初にしたことは、怪我の回復ではなく、自身の過去について話すことだった。

【第三十七話】 回想。

回想。

火之迦具家。それは今現在の苗字で、元々は違っていたらしいのだが、ここでは火之迦具家としておこう。

火之迦具家は三人家族だったらしい。父親と母親と正偽だ。

父親はイギリス人で、狼男だった。母親は日本人で、魔法とも狼男のような妖怪とも何も関係の無い普通の主婦だったそうだ。

正偽は地元（といっても日本では無い）では少しばかり有名な神童で、曰く、10歳の時点で5ヶ国語を使いこなしている。曰く、13歳で世界一難関とされる魔法学校ノースデレス魔法学校に入学。曰く、武道の達人で、たとえ10対1であっても1分もあれば殲滅可能らしい。

これら全てが本当のことで、だからこそ正偽はもっと学びたいと魔法学校に入学したのだ。

尤も、武芸の事に関して言えば、自身の体質が大きなアドバンテージとしてあったため、本人はあまりおっぴらには自慢しなかったのだが。

そんな正偽はやはりノースデレス魔法学校でもトップで入学するほどの成績優秀者だった。

しかしこの頃の正偽はまだ今の熱血、気合、正義を三本柱とした性格ではなかった。どちらかというと冷めていて、どちらかというと非人情だった。

そんな正偽を変えたのは誰であろう、若き日の猿飛奈綱である。

片や最年少魔法使い候補火之迦具正偽。片や一度普通の大学へ行き、この学校に入学し直したといていた当時24歳猿飛奈綱。そ

んな二人が仲良くなるのは多少理解し難いところがあるが、どうやら猿飛の方から半ば強引に交友関係を持つたらしい。

最初は正偽は猿飛のことをあまり快くは思っていなかったらしい。もつと言うと嫌っていたそうだ。

しかし結果として、猿飛と友好関係を持つたのは正解だったようだ。

当時から底抜けに前向きで、正偽よりもいろんなことを知っていた猿飛は、今まで武道と勉強しかなかった正偽の視野を少しづつ広げた。

その過程で正偽は人と人との関係や、友人を作ることの大切さを知ったのである。当初学年トップであった成績も中の下にまで下がってしまったのだが、正偽もそれに正偽の両親も猿飛にはとても感謝していた。

そんなことが2年も続いた春のことである。

嬉しいことに、正偽が正式に魔法使いの承認試験に合格したのである。成績が落ちたとはいっても最高峰の魔法学校である。一般的に見れば、充分魔法使いとしての素質はあつたのだ。

無論正偽は喜び、もうすでにその頃には存在していた熱血キヤラもどこへ行ったか、先ほど貰った認可状を片手に一目散に自宅へと帰り、両親を探した。

「父上殿！ 母上殿！ 見てください、合格しました！」

まあこの頃は日本語で話していた訳ではないのだが、訳すとこんな感じだろう。

しかし、そこに見えていたのは、地獄のような光景だった。

否、地獄だった。

「あれ？ もう帰ってきたの？ いつもならあと15分は帰ってこない筈だったのに」

最初に見えたのは初めての親友、猿飛奈綱。

その次に見えたのはその奈綱が左手に持っていた母親の首から上。そして最後に4つに分解された父親が見える。

「なっ……あ、ああああああああああああアアアアアアアアアアアア！」

正偽は全く事態が飲み込めない。

なぜ親友、猿飛奈綱がここにいるのか。なぜ両親は死んでいるのか。なぜ猿飛はこつちを向いて笑っているのか。

「うーん、できればまだ君とは戦いたくないんだよね、さっきの狩で武器は全部壊れちゃったし。ホント、君のお父さん強すぎだよー」
「な、なにが……？ なんで……？」

最早正偽の言葉は会話にならない。しかしそれでも正偽の言いたいことはわかったのか、猿飛はあっけからんと言った。

「何って、ただの化物退治だけど？ ほら、こいつのがいたら危ないじゃないか」

猿飛はそれがさも当然であるかのように言う。

猿飛のその表情にはなにも感情と言う物が無い。罪悪感や恐怖感はおろか快楽や悲哀もない。ただそれが当然で、こつちなるのが必然なだけと知っているようだった。

そしてその“当然”の為には何の関わりも無い母親のような人物

だって何のためらいも無く殺すのだ。

正偽はかつての親友にこれ以上ないほどの恐怖感に襲われた。

「んー、本当は君も殺そうと思ったんだけど、さっきも言った通り武器もないし何よりこれで妖怪系はもう15体駆除したからなあ。ノルマクリアだし……うん、君は今日のところは見逃しといてあげるよ」

そう言うや否や猿飛は正偽と逆の方を向いて歩き出した。

その時初めて正偽は今ここで起こったことを理解した。つまり、猿飛が両親を殺した。分かってしまえばこんな簡単な図はない。

「う、うあああああああああああああああああ！！」

その時、正偽は初めて自分の意思で狼の力を抑えるための首輪を外した。

正偽は戦うことを選んだのだ。

しかし現在は夕方。首輪を外したところで多少は身体能力が向上するものの、狼化したときの足元にも及ばない。勿論猿飛はそれがわかっていたからこそこの時間に正偽の父親を殺しに来たのだろうが。

だが正偽は武術の腕にも長けている。しかも正偽は猿飛が運動をしているところなどこの二年間でほとんど見たことがなかった。正偽は勝てると思っていて疑わなかった。

その過信がいけなかったのか、はたまた単に実力に差があり過ぎたのか。5分後火之迦具家リビングに倒れ伏していたのは正偽の方だった。

猿飛は宣言していた通り、武器を全て正偽の父親の為に使ってしまったのか素手で戦ってきた。それでも正偽は勝てなかった。何がいけなかったのか、どうして負けたのか、正偽にはさっぱり分からなかったがそれでもあふれる涙止まることなく溢れ出てきた。

正偽は猿飛が最後に言った言葉を思い出す。

「俺に再チャレンジしたいなら日本にきなよ。俺はそこにいるから。ただ、その時は本気で殺しに行くから覚悟しといてね」

日本。たしか母方の祖父母がまだ日本に住んでいた筈だ。あと、今からの年齢だと高校からやり直するのが妥当か。日本語はあまり得意じゃないしな。

この時点で正偽は日本に行くことを決めたそうだった。たとえ自身命が無くなるうと、猿飛に一矢報いるつもりだった。

今なら分かる。猿飛は正偽の父親を殺す為に正偽に近づいたのだと。そしてこの手際の良さからするとこういったことをするのは初めてではない。寧ろ、何度も経験している。

そして猿飛は人を殺すことに何のためらいもない。それは殺人に恐怖を感じる人間よりも恐ろしく、殺人に快楽を感じる人間よりも危険だ。

正偽はそれら全てを理解したうえで、両親に誓った。

「父上殿、母上殿、少々待っていてください。この仇は必ず討ちます」

正偽は両親の葬式が終わった後、すぐに日本へ向かったという。

【第三十八話】 平日の朝なのに

……状況を整理しようか。

昨日の朝にいきなり連続通り魔（多分）に遭遇したと思ったら、その日の夕方には正偽の知人に襲われて、なんとか助かった（正偽は危なかったけど）と思ったら正偽が俺達が聞くには荷が重過ぎる昔話をして、

「北路ちゃん、朝ごはんまだー？」

何故か今朝起きたらマリアさんが蛇又家の玄関に倒れていた。

「ご飯の話よりも今はあなたの体のほうが重要でしょうに。ほら、動かないで下さい」

そして更に厄介なことにマリアさん、全身傷だらけの満身創痍で倒れていたのだ。朝一でこんな物見せられて俺が死ぬほど驚いたのは言うまでもない。

そう言うわけでただいま治療中。まあ治療といっても消毒してガ―ゼを当ててるだけなのだが。大きな傷は魔法で治したし。

因みにこうしてゆっくりしているが今日はまだ平日だ。もういつもより出る時間を20分過ぎているのだがまあこうなってしまっは仕方ない。今日はサボろう。

「やーん、嬉しいこと言ってくれるじゃない。でも大丈夫よ。もう動けるわ」

「そう言う問題じゃ……」

「さ、早く朝ごはんを」

「あ、結局そこなんですな」

マリアさんに催促されるがまま俺は台所へと向かう。まあ別に作る訳じゃないんだけどな。面倒なのでいつも朝はパン食だ。因みに昼夜はカップラーメン。

「あ、そうだ。犬……じゃなくてクロスには何あげれば良いですかね？ ウチ、ドックフードとかないですよ？」

俺はマリアさんとセットで付いてきた小さな狼を見ながら言う。付いてきたというか今回はこのクロスがマリアさんを引っ張って来たのだらう。そもそもマリアさんを発見する原因となったのがクロスの鳴き声だし、俺が治療する前は声を出すことも出来なかったマリアだ。歩くことなんて出来ないだらう。

しかし小さくなくても流石は狼。自分より身長の高い相手を引きずるなんてすごいぜ。

しかしそれでもマリアを助けることは出来なかったか。まあ力は根こそぎ俺が奪っちゃまってから仕方ないといえば仕方ないんだらうが。

「俺はドックフードなんて食わねえよ！」

と、ここで第三者の声。

というかもろにクロスだった。

「うええ！？ なんでお前日本語しゃべれんだ！？」

「あたしが教えたに決まってるじゃーん。でも流石はクロスちゃんね。たった一週間で日常会話が出来るようになったわ」

な、成る程……。しかし自分はロシア語話せて意思疎通には不便
しないはずなんだがなんで日本語なんて教えたんだろつか？ ……
ああ、暇つぶしか。

「俺もパンで良い」

「おおそーか」

「ピーナツクリームを塗ってくれ」

「お前嗜好が完全に人間だな。良いのか？ 狼として」

「雑食だから良いんだよ」

「いや、狼は普通肉食かと……」

まあ本人がそれで良いと言っているのだから（何故か上から目線
なのはいただけないが）別に良いかと思ひ、クロスの言うとおりに
して食べさせてやる。その間マリアさんは勝手に物色して朝食をと
っていた。おいおい、ここ俺の家だぞ。

「っていうかそろそろ本題に入らせてもらいますけど、マリアさん。
その怪我どうしたんですか？」

「んー？ ちよつとゴミ捨てしようと思ったら階段から転げ落ちち
やっつてねー」

少しだけ体を捻らせてこっちを向きながら言うマリアさん。あ、
俺のアイス食ってる。

「本当の事言わないなら出て行ってもらいますよ」

「あーごめんごめん。本当は魔法使いっばい子達に襲われちゃった
のよー」

大方予想通りだ。

ここで気になるワードは二つ“っばい”と“達”だ。

「“っばい”って言うのはどういうことですか？」

「おおよそただの人間でないということは予想が付くんだけど、完全に異能の力は使っているんだけど、それが何故かあたしの知らない魔法だつて事よー。まああーゆーのは魔法以外考えられないから多分魔法使いなんでしょうけど。オリジナルの魔法かしら？」

ここは俺が遭遇したケースと同じだ。

「“達”ってことは複数人いたつてことですか？」

「うんそーよ。良い男が二人がかりで」

ここは違う。俺の場合は一人だったし何より女だった。と思う。つていうか、二人で男つて……。

「もしかして片方はエクソシストの格好してて、もう片方は大学生のおにーさんみたいなの感じじゃなかったですか？」

「そうだけど、……もしかして知り合い？」

んなわけあるか。

でもこれで裏は取れた。恐らく俺が昨日の朝であった女と夜に出会った男達は仲間で、そして連続魔法使い殺害事件の犯人だ。

そういえば昨日のあの大学生のおにーさん、『大物だ』つて言うつてたもんな……。

確かにデスニータ、大物だ。

「うげえ、話がこんがらがって訳わかんねえよ。一体なにをどうすればこんな危機的状况になるんだよ」

俺への襲撃

正偽への襲撃

マリアさんへの襲撃

全部一日で起きたことで全く理解が及ばない。どう対処しているのかも、どうすればこの状況を打破できるのかも、そもそも自分はどういった位置に立っているのかも分からない。

まあ俺は別に襲撃されたとかじゃないんだけどな。

「因みに北路ちゃん。最近、それも昨日今日というごく最近にこんなに立て続けにこの近辺であたしとかが襲われていることに対して何か気づくことはない？」

「どういう意味だ？ まあ二人がかりとは言えお前を倒すぐらいなんだからその相手つてのは相当強いんだろうぜ？」

「というか良く逃げれたと思う。今まで襲われた奴は一人残らず死んでいたと言うのに。やっぱりマリアさんは只者じゃない。」

しかし俺がそういうとマリアさんは首を横に振る。的外れな回答と言うことだろう。

「まあ力もそうなんだけど、ここで大事なのは“目的”と“距離”よ。いくら無差別と言ってもあつちが組織立ってるってことは何かしらの目的があると考えるのが妥当でしょ。」

そしてその目的、といったも最終目標は当然違うだろうけど、とりあえずの目的は「

ここで気づく。さすがの俺でも気づく。

「というか『魔法使い限定の無差別殺人事件』という“魔法使い”の単語を聞いただけで確信を持ってもでは言わないが、せめて心配ぐらいはしてあげるべきだったであろう。なにをしてたんだ俺は。」

「五月雨工場。ひいては非公式ではあるけれど裏の世界では大抵知

ってる将来有望天才魔法使い五月雨巳月でしょうね」

マリアさんの声はもう聞いている暇はなかった。

気づけば俺の両足は動いていて、気づけば学校へ向けて走り出していた。

巳月が危ない！

【第三十九話】 敵、敵、敵？

「あんだそんな汗濁でどうしたのよ？ また変な人にでもあった？」

まああれだ。危ないとは言ったけれどそんなに緊急な感じでもなかったってことだ。つまり早とちり。そりゃそんな人が沢山いるところで襲いなんかしないか。

やべ、恥ずかしい。

「あ、いやあ寝坊しちゃって」

「それで鞆も持たずに走ってきたと。せめて自転車で来るぐらいの余裕は無かったの？」

そうなのだ。あまりにも急ぎすぎて学校で使う道具はおろか曉札や魔器さえ持ってきていなかった。何しにきたんだ俺。

そして自転車は昨日の朝に紛失した。

「うん、そーだな。一回帰るか。荷物何も持ってきてないし」

「ほくろほくろ、それは駄目じゃあないかな？」

と、ここで会話に入ってきたのが鉾跡だ。席が近いので大抵の会話を割って入ってくる。

因みに今は一時間目終了の10分休憩の最中。なので巳月が立ち歩いて俺の席までやってきたのだ。

「君、一年の時から結構休んでるからそろそろ真面目に学校来ないと内申やばいよ？ ただでさえ志望校高望みなんだからさういうところはちゃんとしないと」

「あー、まあそれもさうなんだけどなー」

かといってこのままここにいても何かあつたとき対処できねーし。しかし何だ。一回帰るとか言ったが、その間に巳月が襲われたりしたら大変じゃないか。さっき鉾跡に聞いたところに寄れば今日正偽は休んでるらしいし。

でも仮に今昨日の奴等が来たとしたら俺は巳月を護れない。っていうかお前学校くるなよ。今日ぐらい休め。変なところで律儀なんだよなコイツ。いや、でも巳月なら大抵の魔法使いなら蹴散らせるか。あれ？そういえば有耶無耶になってたけどあいつ等って本当に魔法使いか？

と。

ここで何かが起きた。

こんな曖昧な言い方になって本当に申し訳ないが、自分でも何かなんだが分からないのだ。急に視界が真っ白になったかと思つたら体が軽くなった。

どこかに移動させられたらしい。

どこか、って言うほどでもないか。学校の校庭だ。

しかしその校庭は毎日見ている筈の光景なのにどこか違って見えた。

当たり前か。『校庭より外側の世界が存在していない』のだから。

本来ならば建物や道路、それを通る車や人間も当たり前のようにいるのだが、今はそれが何一つない。何か外側から黒い物で覆ってしまったかのように土地はおるか空までも黒一色だ。

この“魔法”は知っている。

そして“振り向けない”のでよくは分からないが、校舎もないみたいだ。どうやらこの学校の敷地だけ転送させられたらしい。

これだけだったらまだ最悪じゃない。自分の力で何とかして見せよう。問題は今、自分が“拘束”させられているということだ。

状況をそのまま説明すると十字架に磔はりつけにさせられている。手首、足首は重ねられて一箇所に、胸部、眉間にそれぞれ大きな釘が数本づつ刺さっているが、不思議と痛みはない。

そしてさらに、もっと最悪なことには。

隣に巳月がいる。

俺と同じ様に磔はりつけにされて。

「……………どう思う?」

隣で巳月が聞いてくる。計4カ所にぶつとい釘が刺さってるって言うのになかなかどうして冷静じゃない。

「どつって…………、まあ釘で刺されるなんて初めての経験だな。気持ち悪い」

「感想聞いているわけじゃないわよ。この状況、誰がどうしてどうやってるんだと思う?」

「そりゃ、昨日のあいっ等だろ?」

寧ろ他の奴等だったら嫌だ。俺は日常生活においてそんなに敵を作った覚えはない。

……………あ、現木。

「それならいくつか疑問が出でくるのよねえ。まず、なんで昨日は私達に見向きもしなかったのに今日はこんな人が大勢いるところどころに大胆に誘拐なんてしたのかしら？」

「あれだよ。大学生のおにーさんが言ってたじゃん。大物が見つかったって」

その大物と今日会っているわけだが、それは言わない。

「それに昨日は暗かったからわかんなかったんじゃないの？」

「じゃあもう一つ。私とあんた、どうして魔法使いだって分かったの？」

「それはお前、昨日通り魔おびき寄せる為に爆破魔法使っただろうが。そもそも五月雨家は魔法使い一族で有名なんだろ？ 俺は……知らん」

「昨日の爆破、その瞬間は見られてないのよ。つまりあっちからしてみれば正偽がやったと思うのが順当じゃない？」

うーん、そうかなあ？

「それにそもそも、五月雨家は確かに魔法教育が許されてる家系だけれどね、それは魔法連盟の中でも上層部しか知らない極秘事項なのよ？ 少なくともテロリストが知ってる情報じゃないわ」

「へえ」

それは確かに初耳だが、俺の頭がいかに悪いかも分かったが、それはそれだろう。そんなこと知ったことでこの状況をどうにもすることは出来ないし、そもそも実際巳月と俺が魔法使いだってばれでいるのだ。多分。理由なんて考えてる場合じゃない。

しかし、流石に頭に釘を打たれちゃあ頭も上手くまわんねえな。

「あと、最後に。私はまあ魔法連盟日本支部支部長の娘だから分らないこともないけど、なんであんたまでここにいるのかしら？」
「あ、……ああ」

確かに今まで危ない目には幾度となく逢ってきたが、それは自分から首を突っ込んだ結果だ。恐らくは自分はまだ何もしてないのにこんなことをされるというケースは初めてかもしれない。

曉札も魔器も何も持ってない俺、つまり無力な俺をこうして磔にしてもなんら意味がないということだ。体力の無駄。

「その答え、知りたいなら教えてあげよう」

三人目の声が出た。確実にここで出てくる奴は敵だ。
というか声的に猿飛だった。

「今日は全員大集合だ」

いつの間にか、ずっと前からそこにいたかのように、そいつらはそこにいた。しかも今日は昨日の二人だけじゃない。一、二、三、……全部で6人だ。

昨日の大学生風のおにーさんはいるが、俺を攻撃しようとした少女はいない。あれ？ 今全員集合って言ったよな？

「あんた達……だれ？」

隣で巳月が聞く。うん、俺もそれ聞きたかった。切実に。

「その質問をまっつたぜ！ 正に『第一話！ 俺様が鯉こいがみ？ 刃やいばだ！』
つてかんじだな。そんな訳で鯉？ 刃、ヨロシクな！」

大学生風のおにーさん。もとい、鯉？刃がそうだった。

「俺は昨日も言ったけど猿飛奈綱でーす。よろしくねー」

30近くの良いおっさんがそう名乗った。今日も昨日と同じコートに身を包んでいる。

「私は、真心疎美まごころのひびと言っらしいんだ。仲良くしてね？」

今度は二十代前半ぐらいのおねーさんがそういった。黒く、長い髪の毛で顔が隠れていて、表情が読み取り辛い。

「初めまして！」

「僕達は！」

あかたかつばめ

「赤鷹燕だよ！」

すずめ

「雀だよ！」

「よろしくね！」

「よろしくね！」

今度は明らかに双子の二人が名乗った。燕は男で、雀は女らしいが、どちらも茶髪に短髪で、表情も似ている為、少し見たただけで見分けが付かない。歳は大体鯉？刃と同じぐらいだろう。

「………いじめぎしゅう蠢木集一浪いひろです。………お友達から始めましょう」

今度は男子小学生だった。小学校3、4年辺りか。恥ずかしがりやなのか赤鷹兄妹の後ろに隠れてしまっている。全身を自分より一回り大きな服で隠し、帽子も深くがぶっている。さっきの真心疎美よりも表情が分かりづらい。

「っていつか面倒そうなのがほいほい出てきやがって。一体全員集合で何の用だ？ 言っとくが家は貧乏だぞ？」

「金目的じゃねーよ。だったらこんな面倒臭いことしねえっつーの」

俺の言葉に鯉？刃が答える。まあ俺も本気で言ったわけじゃないけど。

「じゃあ何の用だ？ さっき猿飛が言ったよな、質問には答えるって」

「おー、言つてやるぞ。目的は勿論、五月雨巳月、及びその父親の五月雨鉞跡」

やっぱりな。だとすると俺はただの人質か？

「じゃない」

「？」

「俺様たちの目的はただ一つ。“蛇又北路”てめえだ。この大掛かりな魔法も、人質も、お前を仲間に引き入れる為の手段に過ぎないんだよ」

まさかの通り魔からのドラフト一位指名だった。嬉しくともなんとも無い。

「！！ おいおい、冗談だろ……なんで俺なんて」

「冗談なわけあるか。ぶっそばすぞ」

「っていつか私が人質？」

いまそこ気にするとこじゃないだろ。

「っていつかあれだ。あーあ、やっぱりな。なんて言うんだらうな

「。やっぱりこうだろうな」
「？」

俺がそう言うと全ての視線がこっちを向く。全部で“8つ”の視線が。

「謎は全て解けた！ 出てきやがれマリアこの野郎！」

「麗しい女性に向かって野郎はちよつと紳士じゃないわね北路ちゃん」

しばしの沈黙の後、どこからともなく今の6人と同じ様にいつの間にか、マリア・克蘭シスタ。もといデスニータは姿を現した。

「やつほー北路ちゃん。久しぶりね」

「そうですね。時間にして大体1時間ぶりくらいでしょうか。いやあ、随分見ない間にお美しくなられて」

「照れるわよお」

「お世辞だボケ」

マリアが本気で照れていた。

「つかコイツが黒幕か！ そうだよなあ！ いろいろ不自然だったもの！ 俺の家知ってたのも謎だし、巳月との関係知ってたのも分らないし、そもそもだってこんなデンジャラスな連中から言っちゃあ悪いが逃げられると思わねーもん！ 200年生きたとは言っても所詮預言者で本人も戦闘員ではないとっていたし、クロスだって今は普通の犬と同じくらいの力しかないしな！」

そして極めつけはさっきの鯉？の『魔法』と言う言葉だ。こいつらは恐らくは魔法使いではない。だったら協力者がいるはずなのだ。しかも転送、隔離、磔を同時に出来る魔法の天才が。

「いや、あんたの家とか巳月ちゃんとの関係とかは事前に知ってたんだけどね」

「え？」

「いや、あたしその人と話すだけで大体の考えとか知識とか読み取れるし。まあ詳しいところは後から調べたんだけど」

「この人恐いつ！」

「だから最初に会ったとき北路ちゃんがあたしをいやらしい目で見てたのも知ってます」

「俺のプライベートが！」

これは非常に不味い。何が不味いってもうマリアの前でエロい妄想とか出来ない。いや、日常的にしてたわけじゃないよ？

「ねえ、北路」

巳月が小声で話かけてきた。

「あの人誰？ 知り合い？」

「あー、うん。まあ知り合いといえば知り合い……」

というか敵。

「まあそこら辺は後で説明するから」

「うんそうだな。そんなことより蛇又北路、俺様達と一緒に来るか早く決めてもらうぜ」

「まあ選択肢はないけどなー」

こいつらの言うとおりだ。俺に選択肢は無い。おそらく俺が断れば巳月は死ぬ。そのための人質だ。まあ学校に未練があるわけでも犯罪に手を染めることに抵抗があるわけでもないから良いかな、と少し思ってしまう。

「北路……」

隣で巳月が呟く。

「分かった。その話、乗った」

それを無視して鯉？に声をかける。流石に心が痛む。出来れば巳月にこんな哀しそうな顔はさせたくなかった。

「大丈夫。俺が使い物にならないと分かれば解放してくれるって。多分誰かと間違えてるだけだから」

少しでも罪悪感を和らげたくて、巳月にそんな風に言う。

「でも……」

「さあ、そうと分かれば解放してくれ。さっきから背中が痒いのにかけないんだ」

「ああ、分かった」

鯉？が何かを取り出すしぐさをする。あれ？ これも魔法だから解除はマリアしか出来ない筈なんだけどな？

「その前に、そのこのガキ、殺さねえとなあ」

「っ!!」

鯉？が取り出したのは、ナイフだった。
関係なかった。俺が仲間になろうが、抵抗しようが、巳月は殺すつもりだったのだ。忘れていた。こいつら、通り魔だった。まあここまでしてる時点でもう最早通り魔ではないが。
そんなこと言ってる場合じゃない。

「『第十三話 敵の殲滅への第一歩』」

ナイフが、巳月の心臓へと近づく。この釘は魔法だからどつってこないが、あのナイフは違うだろう。確実に巳月は死ぬ。

「止めるおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
!!!!!!」

俺の叫びは届かない。

ガッ!!

何かが何かを貫く音。俺はそれを見たくなくて、反射的に目をつぶってしまふ。

「すみませんお嬢様！ 探索に時間がかかり到着が遅くなってしまいました！」

俺が目を開けたのはそんな声を聞いたからだ。たぶんその、聞き覚えのある声を聞かなければずっと目を閉じたままだっただろう。

「蛇又様も大丈夫ですか!? 待ってて下さい、いま助けます!」

「あ、……うん」

そこには、五月雨巳月のお目付け役、嗽鏡之助さんがいた。そして、多分俺と同じ表情で驚いてる巳月と、少し先に吹っ飛ばされてる鯉？刃が、これまた驚いた表情で鏡之助さんを見つめていた。

「僕の大切なお嬢様とそのご友人に無礼を働いた償いはしっかりさせていただきますよ。」

嗽鏡之助、いざ、参ります」

【第四十話】 鏡之助の力

「ストップ！」

マリアが叫んだ。反射的に走り出そうとしていた鏡之助さんの足も止まる。続けてマリアさんは言う。きっと鏡之助さんに向かって

「あたしはこいつらの仲間じゃないからね」

誰が信じるんだ。

その言葉に反応して鯉？刃たちがマリアの方を少しだけ見るが、特に反応は示さない。鏡之助さんのほうに集中しているのか？

「いやー、ホントはあたしだってこんなことしたくなかったんだけど、こいつらに脅されて仕方なかったのよー。許して北路ちゃん」

マリアが言うとやっぱり嘘っぽいな。

「たとえそれが事実だったとしても、お嬢様を魔法でこんな目に遭わせたのもまた事実。到底許すわけにはいかない」

鏡之助さんが怒った口調で言った。

「いや、だからコレでおあいこにしてよってこと」

「？」

「ほーくろちゃん。忘れ物よー」

そう言ってマリアが取り出したのは、白い石。もといクロスを小さくした時にマリアにお礼してもらった断罪石だった。きっと俺

の家に来てる間に盗っていたのだろう。まあ慌てて学校に行っただから、マリアは一人で俺の家にしたわけで、物色する機会はいくらでもあっただろう。

ここで鯉？が反応を示した。

「てめえ、何のつもりだ」

「何のつもりって。こういうつもり。あたしがあんたらの命令いつまでも大人しく聞いてると思った？ デスニータなめんじゃないわよ」

マリアが断罪石を手元から放した。勿論その石は重力に従って落ちる。そして割れる。

「「「っ！」「」」

驚いたのは大勢。特にチーム鯉？の連中だ。

解説しよう。

「断罪石。その名の通り『罪を裁く石』。

特殊な魔法がかかっていて、それを割るとその断罪石から一定の距離にいる奴等の中の『罪を持つている者』だけが効果を受ける。

その罪の基準は謎だがそれは石が決めるらしい。魔法の効果は様々な物があるが、これはどうやら動けなくする魔法みたいだな」

「誰に解説してるのよ」

巴月は無視で。

そんなことよりチーム鯉？の皆さんは揃いも揃って時間が止まったように動かない。あ、あとマリアも。

「あれえ！？　なんであたしまで！？」

そりゃそつだろ。

「ではお嬢様、今助けます」

当然のように動ける鏡之助さんは、マリアの魔法を破壊しようと何かを取り出そうとした。

「つて鏡之助さん危ない！」

「っ！！！」

投擲された十字架を鏡之助さんが間一髪でよける。

「ありやいや、やっぱり運動神経いいーな！。羨ましいよ」

動いていたのは猿飛奈綱だった。

なんでコイツが動けるんだ？　猿飛は断罪石の『罪』の基準に引つかからなかったのか？　いや、正偽の話を聞く限り殺人まで犯してるんだろ？　そんなやつが平気ってどういう基準だよ。

つて、ああそうか！　あのコート！　確かあのコートは魔法的なものを一切受け付けない性質だって言ってたな。それで断罪石の効果も全く効かなかったんだ。

「鏡之助さん！　気をつけてください！　奴には魔法が効きません！」

俺はすでに戦闘態勢の鏡之助さんに言う。

「と、私の愛しいお嬢様の友人が言っておられるのですが本当ですか？」

「私はお前のじゃない」

「うんそーだよ。俺には魔法は効かない。ってことで諦めてくれたら俺は嬉しいな」

巳月の声は無視し、こちらもどこから取り出したか大きな十字架を担いで言葉とは裏腹に完全に戦闘態勢の猿飛が言う。

「ご冗談を。お嬢様の命が掛かっておられるのに私に逃げろとでも？」

「その通りだね」

「クエシリア、ドペイン、アーラドスクール」

「？」

鏡之助さんが不思議な言葉を呟く。直後、何かが鏡之助さんから飛び出す。それは光っていて、とても綺麗だと思えた。

そしてそれは真直ぐ直線に猿飛の体を貫いた。

「っ！！ が、はっ！」

猿飛にこの攻撃は予想外だったようで、ロクな反応も見せないまま面白いように吹っ飛ぶ。

「お前俺に一体何をした！ どうして魔法が効いた！」

地面に転がったまましかし今まで見たことないような憎悪の感情をむき出しにしながら猿飛は叫ぶ。

「あなたのそれは、基本的に魔法のような『魔』の攻撃に対してし

か防御力を発揮しないのでしょうか？ だったら話は簡単なのです。私が今使った力は『天使の力』なのですから」

「!?!」

「……ねえ北路。天使の力って何？」

「ああ、俺も良くは知らんが80年代後半にイギリスのどっかの学者が開発したもんだ。それまでの魔法と違うところは魔法は呪文と魔法式の両方必要だったのに対してこれはああ天使の力とかそういう聖なる力全部ひっくるめて神力つーんだけど、それは呪文しか必要としないんだ。そして上達すれば呪文すら必要としなくなる。」

まあそれでも殆どの奴は神力なんて使おうとはしないんだけどな」

俺は鏡之助さんの“ポロポロの体”を見ながら言う。

「どうして?! あいつ、まだ攻撃受けてないじゃない!」

「体が耐えられないんだ。神力は例外なくその力は強大で、どう足掻いても人間がコントロールできる物じゃない。実際、その天使の力を開発した学者も、学会に発表する前に死んじまった」

はつきり言っただけの鏡之助さんは猿飛よりダメージを受けている。このまま戦わせるのはかなり苦しいだろう。

「大丈夫です。……少し待ってて下さい、お嬢さま、今、助けますので」

吐血しながらそんなこと言っても全く信用できない。

「飛べええ!」

いつの間にか立てるまで復活した猿飛びが、いくつかの十字架を投げてきた。それは空中で人の大きさ程にも大きくなり、真直ぐ鏡之助さんの方へ飛んでくる。

あれ？　　っていつかこのまま行くと俺と巳月にも被害被るじゃん。危ねええええええ！

「アレケアス、ストロイド、ヴァイシユトンバ」

今度も鏡之助さんは神力を使う。多分魔法が使えないってわけじゃないんだろうけど、道具を取り出すのが間に合わなかったのだから。

呪文を唱え終えた途端また鏡之助さんから何かが飛び出し今度はそれが盾となる。襲ってくる十字架を全て落とし、それは消えた。

「おいおい、あんた。そんな大層な力二発も使って大丈夫かよ。大人しくそこで寝てた方がいいとおもっよう？」

「あなたに心配などされたくありませんね。」

しかし、確かに体がもうそろそろ限界なのは確かですね。では次の一発で終わりにしましょう」

今、鏡之助さんは全身から血が水道から水を出した時のように激しく溢れ出ていて、足元には大きな血溜まりが出来ている。立っているのが不思議なほど鏡之助さんはボロボロだ。

「そんなことはさせないよ。こっちもそろそろ本気をだすぜい」

そう言った途端、どこからか猿飛の手元に大きな鎌が現れた。多分さっきの十字架とかよりも、殺傷能力は高いだろう。対して鏡之助さんはヒカリダケを取り出した。前に鏡之助さんが俺の家に来たときに使っていた物だ。

「ソレイア、ククレント、キールミアニア、ケタレイレンドラ、ミ
ーナ、カタタルシア、テセサリクリーク、」

「死ねええええええええ！」

今度は投げずに猿飛が走りながら切りかかってくる。鏡之助さん、間に合うか。

「ススゲ、メンサイセルイト、ライントレイス、エデン」

鏡之助さんが懐から取り出したヒカリダケ、それが入っている
ビンのふたを開けて、あたりに一斉に振りまく。

猿飛が切りかかる。しかし、同時に鏡之助さんの詠唱も終わった
ようで、ってこれ、『攻撃』じゃないのか。

それは神力には疎い俺でも知っている有名な『儀式』だった。

「!?!」

猿飛が驚いたのも無理はない。猿飛が恐らくは一番強い隠し玉で
あったであろうその大きな鎌は、鏡之助さんの体に触れると同時に
壊れ砕け、砂となって土に還ったからだ。

鏡之助さん、やや剣呑な表情で猿飛を見る。

「……五月蠅い。誰が我の近くにいることを許した。早急に消え去
るが良い」

鏡之助さんキャラ変わってる！ この儀式ってそんな副作用あつ
たんだ！

「な……何をしたんだお前！」

猿飛は混乱して攻撃することも忘れ、質問しか出来なかった。

「貴様、誰に向かって口を利いているのか分かっているのか。無礼にも程があるぞ」

「っ……！……お前……」

「『キエウセロ』」

直後。

猿飛は面白いぐらいに、紙屑のように飛ばされてしまった。何か攻撃を加えたわけでもないのにどうやったんだろうか。あと、遠くで見え辛いが、どうやら猿飛の着ていたコートも木っ端微塵になっ
てしまったようだ。

「『悪魔被い』の防具か。それは貴様のような下等生物が着るには少々重すぎのようだぞ。貴様は全身に血でも塗りたくっていればよ
かるぞ。………ってちがーう……！……はあ、はあ、危なかった
……」

どうやら元の鏡之助さんに戻ったようだ。

「ちよ、あんだ、今何したのよ」

巳月が怯えた様子で聞いてきた。

「あ、申し訳ありませんお嬢様。お見苦しいところをお見せしまし
た。

今のは神力を使った儀式、『天使の召還』でございます。人間の
体を媒介にして天使の強大な力を一時的に手に入れる儀式でござい

ます。今のは、時間も道具も充分ではございませんでしたので本来の力の三分の一も出ませんでした。元々信仰心さえあればと見え、何とかなる力でございます。一種の賭けでございましたが、成功したようで安心しました」

「さっきの妙な人格は？」

「天使の力が強大過ぎるゆえ、その力に理性が負けてしまうところになってしまふのです。私は比較的早く戻れたので良かったですが、もし失敗してしまうとそのまま死んでしまいますのであまり他人にお勧めできる力ではございませんね」

「そう……」

ここで、ここで巳月が少し考えるような表情を見せる。

「ねえ」

「はい、何でございましょうかお嬢様」

「あんな、今後一切その天使の力？ 使うの禁止ね」

「分かりました。……はい！？ いまなんと仰いましたか！？」

驚く鏡之助さん。そりゃそうだろう。いったい今の術を使えるまでにどのくらいの時間と労力を書けたことやら。

「気持ち悪いのよ。あんなのさっきの俺様口調。気に障るから二度と見たくないわ」

理由がめっちゃくちやだ。まあ当たり前か。巳月はきつと神力を使って傷つく鏡之助さんを見たくないのだろう。でも年頃の女の子だからそこは素直にいえないと。……ツンデレ？

流石に鏡之助さんもすぐに察したようで、ありがとございます。と、一言だけお礼を言った。

「つていつか鏡之助さん。早く俺達助けてくれない？ そろそろ断罪石の効果切れてきちゃうと思うし、いつまでもこの格好は気持ち悪いんだ」

「ああ、すみません。今コレを壊しますので」

三分の一だが天使状態の今の鏡之助さんならきつと簡単に壊せることだろう。

「！」

と、油断したのがいけなかったのかも知れない。

いけなかったのかも知れない。とは言いつつそれは仕方のないことだろう。

今しがた猿飛を吹っ飛ばしたばかりで、鯉？、真心、赤鷹、蠢木は全て魔法で動けなくなっている。これで安心すると言うのも無茶な話だろう。

しかし安心してはいけなかった。

彼らは言っていた。『魔法使いではない』。そして猿飛は言っていた。『エクソシストではない』。

彼らの本質を見極めるまでは、決して油断などしてはいけなかった。

だがもう遅い。

確かに吹っ飛ばされた筈の猿飛は、確かに全身をボロボロにしながら、それでも手刀で鏡之助さんの腹部を貫きながらこう高々に宣言したのだ。

「甘い、甘いよ鏡之助とやら！ “俺の能力は” 『相手の寿命を奪うこと』だってーの！」

【第四十話】 鏡之助の力（後書き）

携帯で私の小説を見たのですが、どうやら鯉？刃さんの？が表示されないようです。私のだけかな？

とりあえず『鯉をかむ』と書いて鯉？さんです。よろしくお願ひします。

【第四十一話】 王の気まぐれ

鏡之助さんの背中に深々と刺さった手刀。貫通こそしていないものの、現在のポロポロな鏡之助さんには完全に致命傷であるう傷であった。

「鏡之助ツツツ！！！」

「お……じょう……さ……」

「は、はははははははははははははははは！　寿命が！　生気が流れて来る！」

鏡之助さんが微かに呟く。猿飛の能力なのか、倒れることも出来ない。

そしていつの間にか鏡之助さんが猿飛に与えた傷は、完治とは行かないまでも殆ど治っていた。

そして猿飛の目。見たことも無いほど狂っているその目はさながら化物のようでさえあった。

俺は猿飛に恐怖した。

カタ、

？　俺が磔にされている十字架で不思議な音がした。その音は少しづつ、しかし確実に大きくなっていく。動かない頭を必死に使ってその音の方を見る。

「うらあああああああああああああああああ！！」

今まで磔にされていた十字架を腕力で強引に“破壊”して猿飛に

突っ込む。幸い俺と猿飛達との距離はほぼ無いに等しかったので、猿飛は殆ど反応することなく俺の突きを顔面に受け、飛ばされた。

「はあ、はあ、はあ、すみません北路様、助かりました」

「いや、助かったのはこっちの方ですよ。ありがとうございます」

俺は鏡之助さんに近づき、お礼を言う。しかし、鏡之助さんはそれを言うのがやっとのようで、今にも倒れそうだった。

「成る程ねー、俺が攻撃してる間に最後の力を振り縛って天使の力で十字架を破壊したのかー」

猿飛が起き上がりながら言う。まあさっきの攻撃で倒せるとは思ってたかったけどしかし状況はきついな。

「おい奈綱、どうやら俺様達ももう大丈夫なようだぜ」

「本当だ。もう動けるね」

そして更に状況の厳しいことにチーム鯉？にかかっていた魔法が解けてしまった。これは不味いって。

逃げようにも俺は今自由の身だが、巳月はまだ十字架に磔にさせられている。このまま逃げることは出来ない。

「……まーいや」

俺が対策を必死に考えていた時、突然鯉？がそう漏らした。

「ちょっと俺様達、断罪石の魔法に当てられてもう疲れたんだよな。奈綱も言うに及ばずだし。まあ、そっちはあらかた回復したか。ど

つちにしろ今日はもういいや。メンドイ。つーかここまで時間食っちゃまうとそろそろアイツきちまいそうだし」

アイツ、とは魔法連盟のことだろうか？ どつちにしろこの男の気まぐれで見逃してくれるらしい。それはありがたい。

「だが、今日はもう帰るけど、また明日来るからな。それまでにとつちに付くかちゃんと考えとけ」
「やーねー、刃ったらー」

と、鯉？の言葉に続けたのは黒髪の長い女性、真心疎美だ。

「素直に言えば良いじゃないか。本当は蛇又北路が大人しくこつちに付く可能性なんて全く考えてないんだろ？ というかお前は今、このお兄さんと奈綱の戦いを見てゾクゾクしたんだろ？ 戦いたくなっただらろう？」

「うるせー。あと刃っって呼び捨てにすんな」

凶星を突かれたのだから、鯉？は焦った様子で言う。しかし真心疎美は気にしない。続ける。

「だから明日という準備期間をつくって、だからわざわざ予告までして、そうしてお兄さん達が万全の体調で自分と戦わせようとしたんだ。あーやだやだ、ホントに男って何考えてるか分かんないわねえ」

「……なんか文句あんのか？」

「いや。全く無いよ。私達はあんたの歩いた道について行くだけさ」

ここで鯉？達の会話に一区切りついたのだから。鯉？がこちらに

向かって言う。

「っつー訳だから。んじゃ、明日、ちゃんとフル装備で来いよ。なんだったらそこのお嬢ちゃんのお父親だって連れてきても良いぜ」
「いや、それは流石にどうだろうか」

赤鷹雀、燕の言葉である。

「まあなんにせよだ。けーるぞてめーら。そういやデスニータは…
…あれ？ どこ行った？」

確かにマリアさんはもうどこにもいなかった。多分体が自由になった途端に逃げ出したのだろう。なんだかあの人、すっげえ小物だなあ。イメージとのギャップが激しい。

「まあいいか。んじゃ。『第二十三話 別れ』」

そう言うが否や鯉？ 達は俺たちとは反対方向へ歩き去ってしまった。消えるとかじゃないのね。

「どうします？」

「どうって……」

「それより早く私を助けてよ」

で、所変わって、校内。の保健室。
そこで俺と巳月、そして我が校保険医が向かい合って椅子に座っていた。

あのあと頑張って巳月を十字架から解放させ、苦勞してマリアが作ったであろう空間から抜け出して、今に至る。

そして保健室に居る理由は二つ。一つは大怪我をした鏡之助さんの治療をする為。

もう一つは我が校保険医、“赤鷹”宝から話を聞くためである。

「成る程ね、燕くに雀ちゃんか。最近会ってないと思ったら鯉のトコに居たのか」
「ってことは知ってたんだな。赤鷹燕、雀のことや、鯉？刃のこととか」

俺がここに来るまでの経緯を話した結果、こういう答えが返ってきたので俺は少し安心した。よかった、少なくとも知ってる存在を知ってる奴はいた。

まあ説明できるほど詳しいか知らないし、なんならコイツも敵かも知れないが。

因みに鏡之助さんは今保健室のベットで寝ている。流石に意識を保っていられなかった。

「まーな。燕くと雀ちゃんは甥っ子姪っ子だし。それに鯉？刃も何回か会った。と言うか誘われた」

「チーム鯉？にか？」

「チーム鯉？？ ああ、彼らのこと？ あいつ等そんなこと名乗ってたっけ？」

「いや、俺が勝手に決めただけだけ」

「俺のときはたしか解放軍って名乗ってたけど」
「解放軍？」

解放ってなにから？　そして軍ってあの規模で無理あるだろ。

「そんなことより」

隣の巳月が声を出した。

「私は名前よりもあの猿飛が言ってた『能力』の方が気になるわ。
それに北路を仲間にしたいって言うのも謎だし」

ああ、確かに忘れてたな。

でも流石に宝もここまででは知らないだろ。だってただの保険医だ
ぜ？

「呪術十六姓じゆじゆじゅうろくせい」

知ってた。

「なに、それ？」

「おい少年A」

「蛇又北路だツつってんだろ。いい加減覚えろ」

一瞬ポケかと思ったが、というかそうであって欲しかったが、宝
が「ああ、蛇又ね、そうかそうか。蛇又ねえ、成る程。納得だな」
と呟いていたところから連想すると、多分本気で知らなかったのだ
ろう。傷ついた。

「で、だ。蛇又。この世界に魔法っていつから存在する？」

「魔法？ まあ概念自体は歴史に詳しくないからよく知らんが道具であるところの魔法なら1795年にオーギュスタン・ヴィクトル・ポアソンが開発したのが最初だな」

「そうだな。じゃあ日本人最初の魔法使いは？」

「1872年の横溝誠一郎が最初だ」

「それで正解だ。ただし、それじゃあ間違いだ」

「あ？ 何が言いたいんだお前」

「日本で“魔法”と言うものは1000年以上前からあって、その実、現代に浸透している“魔法”はその昔の“魔法”のただの模倣に過ぎず、それはただの劣化作品だ」

「？」

「？」

「なんてな。」

まあ昔は魔法なんてまどろっこしい言い方なんてしないで普通に呪術とか鬼道とかそう言う言い方したんだろうけど」

そんな風に、赤鷹宝はおどけて言う。

「そして昔の魔法、まあ分かりやすいように呪術としておこう。呪術は式も詠唱も必要としなかった。ただ、それは限られた人間にしか出来なかった。例えば、鯉？とか、猿飛とか、そういう“限られた一族”の中で呪術の血を引き継ぎながら脈々と今まで受け継がれてきた。という訳」

「その話が本当なら」

巴月が言う。

「北路もその……呪術の一族の一人、なんですか？」

「呪術十六姓だ。うんそーだな。」

昔昔その昔。人には出来ない不思議な能力を持った一人の男の子が生まれた。その子は天候を操り、人の心を読み、未来を見た。その子は神と崇められながらも、人として生きることが望み、そして子どもを授かった。16人な。その子どももまあ父親ほどじゃあ無いにしろ、力があつた。しかし子ども達は共に生きることがはしうとせず、それぞれ別の名前を名乗りながら暮らしていった。……らしい」

「けっ、そんな昔話誰が信じろつて。1000年も前のことだろ？」

「まあ、俺も信じてるわけじゃねーけど。それでも蛇又、お前、心当たりあるだろ？」

「……」

「どうした？俺は聞いてんだ。蛇又北路、お前には普通の魔法使いには出来ないような“何か”が出来たりしねーかって言ってるんだ」

心当たりは確かにあつた。今まではオリジナルの魔法だと思っていたが確かにそういわれればしっくり来る。

「……まあ話したくないってんなら無理に聞かないけどよ。明日のことが思いやられるぜ」

「あの、赤鷹先生、私もつと呪術十六姓のことについて詳しく聞きたいんですけど」

巳月が話しを逸らすように、いや、実際逸らしたのだろうが、そういった。

「俺の知ってることなんてたかが知れてるけどな。」

呪術十六姓つてのは基本的に『有り得ない物』で名前が作られている。魚であるところの鯉が物を噛み砕ける筈がない。翼を持たぬ猿が飛行できる筈がない。邪悪で劣悪な種族の人間に真心なんて物

は存在しない。植物である木が蠢いていたらそれはもう木じゃあない。勿論赤い鷹なんてこの世に存在するべくもないし
「一本線の蛇に又なんてあるはずが無い」

宝の言葉を遮って俺は言った。

「そう。もしそんな蛇が居たらもうそれは蛇じゃない。化物だ」

成る程な。俺が狙われる理由がやっとわかったよ。

化物は化物をなかまを集めてるって訳か。

【第四十二話】 俺の力

鏡之助さんは結局、次の日になっても目を覚まさなかった。

まああんなに怪我をしたんだから当然と言えば当然か。

ついでに言うと当たり前のように昨日の事件が連盟にばれて巳月も今魔法連盟日本支部で匿われてる。まあこっちも当然。だって重鎮さんだし。

俺は……家で朝食を取っていた。

「なーんであなたはそんなに気楽に構えてるのよ！ いいからあんたも日本支部来なさい！ 危ないでしょうが！」

巳月が怒ってる。何でだ？

「あんたが危険な目に遭おうとしてるのに私だけ安全に傍観者気取ってられる分けないでしょ！？ あんたもいつまでも戦おうとしてないでちよつとは守られることも考えなさい！ 完全に勝てる相手じゃないでしょ！」

朝一でそんなに電話で大きな声出さないで欲しい。頭ギンギンする。

「いい！？ さっきあんたも保護してもらえるように連盟の人に言っただけだから！ 家から出ないでよ！？」

「ちよ！ おいおい、俺が魔法使いって言うてねーだろうな。そしてたら鯉？より先に俺が逮捕されっぞ」

「それならだいぶ問題ないわ。私の一方的な権限で無理矢理北路を引き取ることにしたからあっちからして見たら何がなんだか分から

ない筈』

「それもそれで問題だなあ！」

五月雨巳月、やっぱり性格は悪かった。

『私の性格なんてどうでも良いの！ いいからあんたは自分のことだけ考えて』

急に携帯電話を持っている右手が軽くなったなあと思つたら、右手から携帯電話が消えてなくなつていた。あれ、いつの間にそんなマジックできるよになつたつけ、俺。

「やつほー。朝早くから失礼します。今日も一日元気全開解放軍参謀補佐赤鷹燕でーつすと」

やっぱりそこには鯉？達がいた。

鯉？達と言うのは要するに昨日来ていた6人全員だ。

「来るの早っ！ まだ朝だぞ！」

「まあ別に時間指定はしてなかったからな。俺様は12時にでも向かいたい気分だったぜ。そんな感じで解放軍参謀補佐鯉？刃だ」

「詐欺だ！ つーかお前万全の状態で戦いたいとか言つてたじゃねえか！ コレのどこが万全なんだよ！ 俺まだパジヤマよ！？」

「こちらとしてもこんな時間に来るのは気が進むことじゃなかったんだけどね。仕方なかったのよ。許してね。10時からビーチバレーの大会の予選が始まっちゃうから。そう言うわけで解放軍参謀補佐真心疎美よ」

「黙れや！ そう言うわけじゃない！ なんであんたらビーチバレーの大会に出るんだ！？ 緊張感がないにも程があるだろ！ つーかさつきから役職がなんで参謀補佐しかないんだよ！ バランス

悪いだろ！」

「……うん、良いツッコミだ」「」

……こいつら、俺の力がどうとか言ってたけど、ただ突っ込み役が欲しかっただけじゃねえのか？

『北路！？　なんかあったの！？　ちょっと、いい加減返事しなさいよー！』

あ、巳月忘れてたな。

流石に鬱陶しくなったのか、赤鷹燕が巳月の電話に応答する。

「やつほー昨日ぶりだね。五月雨のお嬢さん」

『……だれ？』

ひどく傷ついた様子だった。

見かねた燕の姉（もしくは妹）の雀が変わって電話に出る。

「ちょっと！　昨日あったでしょ！　赤鷹燕よ！　あと僕は雀！」

『ああ、もしかしてあの双子？』

「くっ……まあ覚えていただけでも良しとしてあげる。集団と言うものは目立たないとなかなか覚えてもらえないからね」

『で、あんたは兄の方？　それとも弟の方？』

「ぶっ殺す！」

勢い余って携帯バグン。っておい、それ俺の携帯。

「っーかあんまりびっくりしないのな。もしかして『赤鷹』の能力について知ってたりするの？」

「まあこっちにも情報網つてのがあるんだよ」

鯉？刃の問いにそんな風に答える。赤鷹室の名前は出さない。もしこいつらが宝の居場所を把握できていなかったなら、わざわざ情報を提供する羽目になるからだ。

『赤鷹』の能力、瞬間移動。

人や物を瞬間的に長距離移動させることが出来る。こいつらがいきなりこの部屋に現れたのもその力の所為だろう。

因みに宝もこの力を使えるが力自体はかなり弱く、せいぜい2〜3キロ程度の物を視覚的障害物のない100m先まで飛ばすのがやっとらしい。

となるとこいつらはかなり強い部類に入るな。だって二人掛りとは言え6人も人間を外からは見えない部屋の中へと運んだのだから。

「まあ良い。さあ蛇又北路、最後通牒だ。俺様達の仲間になれ」

「……その前に一つ質問があるんだが」

鯉？の誘いに応じる前に、どうしても確認しなくてはいけないことがある。

「お前らの最終目標はなんだ？」

連続通り魔、解放軍、呪術十六姓。こいつらには分からないことが多すぎる。

「はっ」

そんな問いかけをすると、鯉？は納得したと言つような表情を作

り、笑った。

「そうか、そうだよな。あいつ等のことなんにも知らないのか。じやあ拒んできたのも納得が行くぜ。」

おい蛇又北路。ちよつと質問だ。六千八百十一、この数字がなんだか分かるか？」

分からない。分かるわけがない。

「そうだよなあ、教えてやるぜ。この数字は『今までに俺様達呪術十六姓の人間が魔法の実験の一環で殺された人間の数だ』」

「!!!」

「昔はそれなりに栄えてたんだぜ？ 少なくとも全国探してたった5人しか仲間が集まらないほどじゃあなかった。」

それを、魔法使いの連中は！ 人間の血液を根こそぎ抜き取り！ 骨を砕き！ 脳をばらばらに分解した！ そうして出来たのが魔法だ！ 今世にのたまう魔法使い達が使ってる魔法ってのは、元々俺様達が血で受け継いできた物の劣化版だんだよ！」

「……確証はあるのか？」

「確証？ それは『蛇又』が良く知ってる筈じゃあないのか？ なんてったつてお前のじいちゃんがこの『解放軍』設立したんだからよお」

「なっ!？」

「あれ？ それも知らなかったのか？ 1968年の大規模テロ。表向きは魔法使いの団がってことになってるけど、その実、俺様達『解放軍』の前身たる組織がやったんだぜ？ その時のリーダーはお前のじいちゃん、蛇又へびまたせん閃だっただ」

「いやっ、でも……確か記録ではその時の主犯は鯉？ 邸だっただ……」

「そんな時は上手く逃げたんだよ。あとからお前のじいちゃんから聞

いた話によるとその時からもうすでに魔法連盟の本部に勤めていて、逃げるのはそう難しくなかったそうだ」

「え、それって……」

「別に魔法使いに屈したって訳じゃねえよ。寧ろスパイとしてあそこまでのし上がり、いろんな情報を集めたんだ。立派だったな、あの人は。」

そしてあの大規模テロが失敗したかと思うとすぐに切り替えてまたチャンスをうかがっていたそうだ。それで10年前、俺様はあの人に『解放軍』に誘われた。お前に魔法教えたのだから、きつとそれが目的だったんだろ」

「じゃあお前らの目的は」

「魔法使いの殲滅。ただそれだけだ」

「……はっ」

今度は俺が笑う番だった。何だこれ。こいつらそんなことの為に命賭けてんのか？

「お前ら……そんなことして何になるんだ？ 結局お前らは、魔法使いがしてきたことと同じこと……いやそれ以上のことをしようとしてるじゃねえか。誰も報われねえよ」

「誰も報われねえだと……？」

と、猿飛が唸るように口を開いた。

「ざっけんな！ 俺の父親は俺が六歳の時に俺をかばって一人で魔法連盟に行つたんだぞ！ 多額の金が入る、命は絶対保障する、従わないなら息子を連れて行く！ そう脅されて！ 2カ月後、父親が帰ってきたときには右腕と一束の髪しかこの世に存在してなか

った！ 誰も報われない？ 少なくとも俺と俺の母親は報われる！
魔法使いと同じ？ 俺はただ父親がどんな目に遭わされたかあい
つらに教えてやりてえだけだ！ 確かに自分でも分かっているさ！
野蛮だって、ただの仕返しだって！ でも！ 俺のこの気持ちは！
父親を殺されたこの気持ちは！ 一体どこにぶつけたら良いんだ
よ！ー！」

「どこにもぶつけなくていいよ」

猿飛のそんな告白とは逆に出来るだけ落ち付いた声で俺は言う。

「駄目だ。本当に俺は駄目だ。全く、本当に甘いんだから」

巳月や正偽を殺そうとした敵なのに。

それでも、今のその気持ちを聞いてただ見過ごすわけにはいかな
かった。

「お前は何も悪くない。だから、少し力を抜いて楽になれ」

猿飛だって敵である前に人間なのだ。そうするには必ずそうする
理由がある。そうする理由を聞いて、俺は同情せずにはいられな
かった。

「俺が全て奪ってやる」

両手を広げ、呼吸を整える。
準備は万端、後は呟くだけ。

俺だけの、力。

「だっしゅまほう
奪取魔法」

【第四十三話】 奪取魔法

例えば、赤鷹宝を含む赤鷹姓の能力は『瞬間移動』だった。
例えば、まだはつきりしないが猿飛奈綱の能力は『寿命を吸い取る』と言っていた。

それに対して俺は。

“奪う”

ただそれだけの能力だ。

でもコレがなかなかバリエーションに富んでいる。相手の持ち物や体の一部など実際に存在するものでも大丈夫だし記憶や能力、はたまたそのもの“力”と言った形ないものでも奪えるのだ。俺がクロスにやったように。

でも俺はまだまだ腕が未熟だからしいちゃんが開発した特別な魔法式と一緒に発動させないとロクに能力も使えない。……んだと思う。魔法式無しでやってみたことないからわかんないけど。

で、だ。

こいつらから一体何を奪えばいいのやら。

「てめえ……つうかコレ、魔法式だろ……いつの間に書いてたんだ……」

鯉？が天井や壁に浮き出ている魔法式を見ながら呻く。とりあえず暫定的に体力を奪ったので皆基本的に動けないのだ。

「ここは俺の家だぞ？ 書く時間ならいくらでもあるってーの」

そもそも防犯用とかにこの家に入居してすぐに書いたのだ。まあ昨日の今日だったし一応用心に書き直したけど。まさか本当に役に立つとは。

よし、とりあえず約束したし猿飛のトラウマから取り除いてやるか。

俺は更に意識を集中させる。コレに呪文の言葉は必要ない。だって魔法じゃないし。

「あ、……ああ………アアアあああああああああああああああああああ
ああああ！！！」

猿飛が声を張り上げる。ってそういえば今普通に朝方じゃん。近所迷惑にも程があるぞこれ。

……気持ち悪。

猿飛の記憶やら憎悪の念やらとりあえず負の塊がどんどん俺の方へと流れてくる。おい猿飛、お前こんなもの背負って生きてたのかよ。なんか自殺しそうだなぞ俺。

ばったり。猿飛の念が強すぎて受け止め切れなくて、俺はその場に力なく倒れる。

どんどん青くなってく俺。反対に赤くなって叫び続ける猿飛。それをただただ見ているその他諸々。うーん、しゅーるだ。

「駄目」

意識がなくなりかけた俺の手を、誰かが握ってきた。そこで俺の集中力は切れたが猿飛がら流れてくる負のイメージは止まらない。能力的に全て流れるか俺が自主的に止めるかしないとこれは止まらないのだ。

「もうそれ以上は、駄目」

その声が繰り返して言う。閉じかけていた目を必死に開けると、なんとびっくりマリヤだった。

「おま……いつからここに……」

残念ながらマリヤに関して言えば全く信用していないので敵がもう一人増えたと言う認識しかない。

「最初からよ。そんなことより、今すぐコレを止めなさい。これは、あなたの物じゃないわ」

いつにも増してシリアスモードなマリヤが言う。でも多分出来ない。半分気絶しかけてる俺は、どーにも能力を止めるだけの意識はのこっていないようだった。

「……猿飛のトラウマが抱えきれずにもう止めるだけの集中力は残ってないか。つたく、北路ちゃんはホントに世話が焼けるんだから。ちよっと痛いかも知れないけど我慢しなさい」

無言の俺を察してか、自己完結して意味不明なことを言う。

と、次の瞬間。

「じいばあ！」

マリアに腹を殴られた。

いや、殴られたと言う表現は適切じゃないかも知れない。心臓マッサージの要領で俺の胸に両手を置き、そのまま力いっぱい押したのだ。まあ攻撃力は大差ない。

「粗切れ千万、遅々外の風雨、溪谷の臥牛は消し炭に。逆流せよ」

マリアが日本語で呪文を唱えてるところを初めてみた。いや、でも呪文とは違うな。妙に短い。っていうか聞いたことないし。

朦朧とする頭でそんなことを考えていると、不意に体が軽くなる感じがした。

あれ？ 俺が奪っていた猿飛の負の塊がなくなっていく。

「な……んでだ？」

「これぞ年の功って奴ね。あんたのじいちゃんと知り合いでよかつたわ」

「えー？ じいちゃんと知り合いだったの！？」

確かにマリアの年齢を申告どおり200歳だと信じるならば矛盾はしないが、一体どこで知り合っただ？ って魔法連盟に決まってるか。じいちゃん魔法使いだったし。

じゃあ今のはなんだ？

「あんたのおじいちゃんに教えてもらったの。もしもの時の『蛇又』専用呪文。いまやったこれは強制的に奪っている途中の物を逆流させる奴ね。まあ蛇又の意識が弱かったからこそできたことだけど」
「はあ、でもまだ疑問があるな。じいちゃん、自分がそう言う能力

使えるって隠してた筈だろ？　なんでお前には教えてるんだ？」

「別に教えてもらったわけじゃないわ。北路ちゃん時々忘れるみただけどあたし、預言者デスニータよ？　見る聞く話すは得意分野。相手を見ただけで中身が分かるってのはあたしにとっては朝飯前よ」
「はあ……」

だから聞くと話すは関係ないだろ、とか言いたいことは色々あったがしかし俺にその体力は残っていないようで、俺は力なく返事するだけだった。

「じゃあこの連中どうしよっか？」

マリアが聞いてくる。とりあえず能力でも奪っというところ辺に捨てるか。そうすればもう害はないだろ。

「マリア、こいつらの正確な能力分からない？　流石に分からない物を奪うことは出来ないんだけど」

「じゃあちよつと時間ちょうだい。魔法で何とかなると思うから」
「ほう、俺様達の力まで奪うか蛇又。いい度胸してんじゃねえか」

「っておい！　なんで鯉？　立ってんだ！？　さっき体力奪っというた筈だろうが！」

「もう良い。俺様達に害があるようだったらたとえ蛇又だとしても容赦はしねえぞ。死ねや」

そう言ったかと思うと鯉？の手前に浮かぶようにいつの間にか一振りの日本刀が出現していた。そしてその日本刀が空中に浮いたまま円を描くように10に分かれる。

「コレだけじゃねえぞ」

あ、ちがった。更にその日本刀が分かれる。もう多すぎて分からん！

「鯉？流奥義百刀流」

「百刀流だと！？ 馬鹿じゃねえの！？」

百本の日本刀が一斉に俺に向かって襲い掛かってくる。出入り口は残念ながら鯉？側。逃げ場は無い。

「のわわ！ マリア！ 何とかしろ！」

「無理に決まってるでしょ！？ あたしは戦闘要員じゃないって初めてあつたとき言ったじゃない！」

ああああ！ 無理無理死ぬ死ぬ！ 奪取魔法とかもう間に合わない！ ぎゃああああああ！

急に視界が真っ暗になった。

あれ、俺、死んだ？

ズガガガガガガガ！

「ひい！」

と思っただら目の前にさつき見た日本刀の刃の部分が出現した。ってこれ、目の前に黒い壁が出来たのか。それで今のこれはその壁に日本刀が貫通したと。マリア、戦闘要員じゃないとか言っといて詠唱無しでここまでやるとは流石だな。

「え？ これ。あたしじゃないわよ？」
「は？ じゃあ誰が？」

なんていつてもマリアに分かる筈も無く。
二人呆然としているうちに目の前の壁も、刀も全て消え去り視界が開けた。

そこに見えた人間はさっきの6人プラス1。誰か増えてる！

「……よお、久しぶりだなあつるぎ」

鯉？が声をかけた先にいたのは少女。その少女に俺は見覚えがあった。この前俺が襲われそうになり、俺が自転車をなくす原因となつたあの少女だ。

「ホントに久しぶりだな。兄ちゃん」

鯉？と兄妹！？

「ん？ そのあなたはこの間の。って覚えてるわけ無いか」

いいえ覚えてます。トラウマになりそうな出来事だったので。あんな衝撃的なファーストコンタクトで一体あなたは何を持って覚えてないと思ったのでしょうか？

「っていうかお兄さん、魔法使いだったの？」

「ん？ おう、まあその一応な」

しどろもどろになりながらも答える。あ、コイツも殺人犯だった。やば、殺される。

「ふーん。まあどうでもいいけど」

いいんだ。まあ助かった。

「兄ちゃん、ここで会ったが10年目だ。覚悟しな」

「お妹妹よ。90年ほど足りねえぞ」

「僕の新しい必殺技！」

あれ？ この人たちつてもしかして敵対関係？ 兄妹なのに？

まあ状況は良くわかんないけどいいや。逃げるチャンス！

「負けたー！」

そう言いながらこっちに吹っ飛んできたのは予想通り妹の方だった。

「早い！ もうちょっと頑張ろうや！ 二行分しか戦ってねーぞ！

？」

「そんな事言ったって6対1は無理だよ」

「6対1？」

あれ？ 他のやつ体力も奪った筈なんだけどなあ。

見れば、少女の証言どおり6人とも回復しているらしく立っていた。

「あー。回復したのかー。まあ体力だもんねー」

平静を装ってはいるが汗だらだら。不味い、二度目の奪取魔法をしようにも鯉？は何故か体力すぐ回復してしまうみたいだし、能力

は未だに分からないし一体なにを奪えばいいのやら。

「ここで一つ提案が」

妹の方が俺達に声をかけてきた。

「お兄さん、お姉さん。同盟を組んで共同戦線であの憎き鯉？刃を殺しませんか？」

「共同戦線を組むことにも鯉？刃を殺すことにも同意しかねる」

「北路ちゃんに一票」

「なぜですか！」

妹の方が噛み付くように言ってきた。

「まずもって俺は一度あなたに襲われているから信用できない。そして鯉？を殺そうなんてこと考えてたら俺達のほうが死ぬ。逃げることには大賛成だ」

「くっ……！」

ここで妹の方に少し葛藤があったようで暫く黙り込むがやがて話し出した。

「分かった。じゃあ僕も今危ないところだしここは逃げることに専念するよ」

「だとしても大前提としてお前は信用できない」

「ああ、この間のことね。あれは僕がやったんじゃない。……っっていつてもどうせ信用してくれないよな。じゃあこれでどうっ？」

妹の右腕はいつの間にか刀の形を成していて、それは俺の首筋にあてがわれていた。

「僕の言うことを聞け。さもないと殺すぞ」

「はっ。……俺、ちっとお前のことが好きになりそうだけ」

「あれ。北路ちゃんってもしかしてM？」

その時、歴史が動いた。じゃねーや。鯉？が動いた。

【第四十四話】 分裂

状況的に言えばかなり厳しかった。こっちは3人相手は6人、しかもこっちの一人は預言者であってあって殆ど非戦闘員の上、相手チームは全員が全員魔法よりも何段も上の能力を持つ異能者集団なのだ。多分。

勝ち目ねーな。

「って言うことで逃げるわよ北路ちゃん！ ○○○……」

マリアさんの呪文詠唱。この人は基本的に日本語で呪文詠唱しないので今から何をしようとしているのか全く分からない。

俺の部屋に浮かび上がる魔法式。いや、これは魔法陣か。つていつの間に書いてたんだよ。

「何するかしらねーが逃がさねーぞ!」

鯉？が叫ぶ。鯉？の周りにはさっきの日本刀がまた浮かんでいた。その数およそ100。

「あああああああああああ!」

「せいや!」

もう一度襲い掛かってくる日本刀の群れを、更に鯉？妹がさっきと同じ壁の出現で防ぐ。

が、何故か鯉？妹の出した壁に日本刀が触れる前にその壁は跡形もなく消え去った。

「同じ手は二度は通用しないわよ?」

そんなことを言うのは真心疎美。鯉？の隣でこっちに手を向けて何かをしているように見える。恐らくこれは真心疎美の仕業だろう。って壁がなくなったら俺達死ぬじゃん！間に合えええええええ！

「だ、奪取魔法！」

襲い掛かってくる日本刀を全て奪う。奪った日本刀は俺の足元にぼとぼと落ちてくるが、鯉？が能力を切断しているのか、奪った端から消えていく。勿論咄嗟の奪取魔法で全部奪える筈もなくいくつか刺さってしまう。でもマリリアに攻撃が当たることだけは何とか防げた。

っっていうかマリリア、早く！

そう思うと同時にマリリアの呪文詠唱が終わったらしく、急に周りが光りだしたかと思ったら体が軽くなった。

「おい、てめっ！」

そんな鯉？の言葉を最後に、俺達はマリリアの転送魔法によって別の場所へと移動させられていた。

「た、……助かった……」

「かどうかはまだ怪しいけどねん」

「ここはどこだ？ どこかの森の中。太陽の位置が俺が家にいたときの時間とほぼ変わらないため、ここは日本であろうと予測できる。でもそれだけ。」

「っていつかマリア、本当にいつの間に魔法陣なんて書いてたんだよ。つーかなんで俺の家にな？」

「他にいくところなかったからねー」

だからって俺の家にくんなよ。

「魔法陣はまあ念のため。あいつらに目えつけられた時点でこういうことは予想できたし」

「はあ、でも流石に3人一遍に運ぶほどのって大変だっただろ」

喋ってはいないがちゃんと鯉？妹も転送してきてます。あの状況で置いていくことは流石に酷すぎる。

「ん？ 三人じゃないわよ？ 四人よ？」

「は？」

「俺のこと忘れんな」

そこには小さな狼、つまり俺がその力の殆どを奪ったマリアの使い魔クロスがいた。

「お前……あの場にいたのかよ。あんなピンチな状況で出てきてくれないとかどんだけ薄情なんだ。仮にもマリアの使い魔だろ」

「俺もあの場であいつらに抵抗し得るだけの力があれば出てきただろっつな」

ああ、もしあの場でクロスが出てきても足手まといになっただけだから出てこなかったと。頭が回るといっか、理性で行動できる奴といっか、うーん、やっぱり薄情な奴じゃないか？

「俺は漫画とかで無力な登場人物が出しやばってきてポコポコにされるのを見てるといっつも思っただ。『いや、お前出てくんなよ！』」
「まあ確かに俺も思っただ」

それにしても前回も思っただが流暢に日本語を喋る奴だ。やっぱり頭がいいのかも知れない。

「そんなことよりおねーさん」
「あら、あたしのこと？」

鯉？妹の問いにマリアが答える。

「ここに転送してのってやっぱり魔法陣？」
「そうよ？」
「だったら早く逃げないと」

「俺様達が追いついてきちゃうかもよ？」

「！！」

そこには当然のように鯉？達5人が勢ぞろいしていた。
「つて5人？ 一人足りなくね？」

「因みに蠹木君には退場してもらいました」

蠹木って……あの小学生か。

「そろそろ学校が始まる時間だからな」

思いの外緩いチームだった。もしかしたら今から「仲間にしてー」とか言ったら普通に受け入れてくれるかもしれない。まあそんなこと言わないけど。

「って言うかなんであんたらここにいる訳！？ 特別な魔法陣じゃないと複数使用は出来ないしあの魔法陣は特別仕様じゃなかったはずだけど！？」

そう吠えるのは勿論マリア。でも俺にはなんとなく予想が付いた。

「僕達の能力は瞬間移動だからねー、転送用の魔法陣には例外なく転送先を書いてないといけないでしょ？ だったらそこに僕達が能力使って飛べばいいはなして訳だよ」

赤鷹の多分燕が言った。男の方な。

マリアも自称200歳で実戦経験は俺やあいつらとは比べ物にもならないだろうがしかし、『魔法以外』となると話は別だ。いままで魔法でしか戦ったことのないマリアは彼らの能力に対応できなかったのだ。

「ちっ……」

マリアの舌打ち。俺も舌打ちしたい気分だ。奪取魔法に必要な魔法陣があ部屋にしか書いてなかった上、今手元には何の武器もない。忘れてるかも知れないが俺は今パジャマだ。（因みに奪取魔法の魔法式はそもそも奪取魔法が魔法ではないし、特別仕様の式なので式さえあれば何度でも魔法が出せる）

あ、でもクロスを入れたら4対5、状況は好転してるのかも。

「ってことで北路ちゃん！ さっきの奪取魔法も一度お願い！」

「無理に決まってるだろ」

好転はしてなかった。奪取魔法が使えなくなったのはきつい。

「えー、でもあんたのじいちゃんは魔法式なんぞ使わなくても出来たわよ？」

「じいちゃんと一緒にすんな。俺はこれが魔法じゃないってつい昨日知ったんだよ」

多分頑張れば使えるかも知れないが、精々すぐ近くにある実際に存在する小さな物しか奪えないだろう。なんて役立たず。

「おい、戦力を分散させるぞ。燕、雀」

「へーい」

「はい」

鯉？の声に赤鷹兄妹が答える。と同時に二人の姿が消えた。恐らくは不意を付いて攻撃してくる気だろう。どこから出てくる……？
あれ？ 来ないな？

「おいホクロ！ ご主人が消えたぞ！」

そんなクロスの声に反応して当たりを見渡せば、確かにどこにもマリアはいなかった。

どうやら赤鷹兄妹は俺たちからマリアを切り離れたようだ。

「じゃあ疎美、つるぎを頼めるか？」

「任せて。まああなたより私の方が適任よねえ。あの子に関して言えば」

「じゃ、頼んだ」

電車が現れた。

勿論ここは森の中、普通の電車が通っている訳もなく、あの三人のうちの誰かの能力であろうことは簡単に予想できたが誰の能力かもどんな能力かも分からない。

そしてそんなこと考えてる暇もなく突然眼前に現れた電車に対応することも出来ないままその電車と正面衝突をしながら俺の見えないところまで飛ばされていくのは俺のすぐ脇にいた鯉？妹だった。

俺とクロス、啞然として言葉も出ない。

電車が完全に通り過ぎた後に鯉？達の方を見ると、真心疎美がいないのである。電車にでも乗ったのだろうか。

「で、俺と猿飛で」

「蛇又北路ねー。良いよ、でも二人でやるほど脅威だとも思わないけど」

「俺もいるぞこの野郎」

猿飛の言葉にクロスが反応する。しかし二人とも黙殺。

「……おいクロス」

「なんだホクロ」

俺が小声でクロスに話しかける。こっちになんて武器はなくても
対抗手段ぐらいはある。

「んじゃ、さっさとはじめよーぜー」

「そつだな『第34話 決着』」

猿飛の方が走り出し、鯉？は何かをするように構えた。俺はその二人よりも先にアレをしなくてはいけない。

「返還」

呟くと同時にクロスの体に変貌する。

小さかった体は人間の何倍にも膨れあがり、ただの飾り羽に成り下がっていたその一對の羽は禍々しさと共に本来の力を取り戻す。元々鋭かったクロスの赤い目は成獣に戻るに従って恐ろしさが数段アップした。

つまり、俺が奪っておいたクロスの力の殆どを、今返還したのだ。こつなつたクロスは多分最強。

「やっちまえ。クロス」

「思う存分暴れさせてもらうぞ」

【第四十五話】 おびたらしい

「どええええ！？ 何だこのでつかい犬！」

「狼だ」

「まあ何にせよ蛇又の味方で俺様達の敵だろ。ちゃっちやと退治してきな猿飛」

「ええ！ 俺が！？」

猿飛と鯉噛が言いあっている間に合図もなしにクロスは飛び出した。

しかし飛び出したと言っても今の状態のクロスを俺が目で追えるはずもなく、俺が気づいた時にはもう猿飛達の前にいた。

そして大きな口を開け、猿飛に噛み付く。目でさえ追えないその動きを避ける術などなく、猿飛は簡単にクロスに飲み込まれた。

「ぐあっ！？」

が、悲鳴を上げたのは猿飛でなくクロスの方だった。

クロスは即座に噛み付いていた口を猿飛から離す。

そこに現れた猿飛はクロスに噛まれたからだろう、傷だらけだった。前回鏡之助さんに壊された為か、今回はエクソシストのコートを着ていない。

「この間の青年と違って元気一杯のワンちゃんにはすぐ逃げられちゃうかー。5分ぐらいしか吸い取れなかったや」

そう言っている間に猿飛の傷がどんどん治っていく。

何かの魔法を使っている訳でもなし、きつと猿飛の能力を使っているのだろう。

「お前……何だそれは」

若干猿飛から遠ざかったクロスが聞く。

「んー？ 前に言わなかったっけ？ ああ、そういえばこのワンちゃんはいなかったもんね。

俺は相手の寿命を吸取ることができて、その吸取った寿命を使って傷を治すことが出来るんだ。今の一噛みで君の寿命は5分程度縮まったから」

傷が治せるってことは俺も初耳だな。まあでないと天使状態の鏡之助さんの攻撃食らってあんなに短時間で鏡之助さんに攻撃できないもんな。

これで猿飛の能力は割れた。つまりは遠距離攻撃を中心に戦えば恐くないってことか。後は鯉？なんだが……さっき鯉？妹に聞けばよかった。きつと兄妹だし能力一緒だろ。赤鷹兄妹のように。

「俺様がその面白い犬をやってやる。お前は蛇又をやれ」

「って、さっきと言ってることが違うよ」

「なんか面白そうじゃん」

「……まあ良いけどね」

どうやら猿飛がこっちに来るらしい。

しかし俺だって馬鹿じゃない。今のクロスの攻防の間、手ごろな石を拾って魔法式を書いていたのだ。まあ時間が全然なかったから簡単な物しか書けなかったけど。

とりあえず先制攻撃！

「切断魔法斥舞風月！」

いやー、懐かしいなこれ。俺が始めて巳月と会った時に巳月から受けた魔法だぜ。（実際は絶鱗風我だったけどそこら辺の記憶は抹消）

しかしその巳月とにやられたときも言ったけどこれは切断魔法の中では一番簡単で力が弱い。その上いま詠唱をしてなかったもんだから多分猿飛には効かないと思う。

ので、魔法が発動した途端俺は回れ右で走って猿飛から逃げる。後のことは任せたぞ！ クロス！

「アホか」

やっぱり効いてなかった。猿飛は当たり前のように取り出した十字架で、当然のように俺の斥舞風月を打ち消した。

「死ねや」

そしてそのまま猿飛は俺の魔法を食らったにも関わらず無傷の十字架をぶん投げてくる。

俺は何とか反応するが、完全に避けられる速度じゃない。思いつきり左肩に直撃した。

メキヤ

「折れたああああ！　なんか可愛い音したけど絶対折れたああああ！　マジでこれは死ぬ！」

肩が痛くて動けない。血も大量に流れ出ているし、久しぶりに不味い。

「あれ？ 蛇又さつきから全然うごかないな。完全に当たったわけじゃないんだし、すぐ逃げ出すと思ったんだけど」

「痛みで気絶でもしたんじゃないかねーの？ とりあえずとどめ刺しとけよ」

「はいはいよー」

猿飛がこっちに近づいてくる。駄目だ。右手で魔法式を書こうとしたが時間が全然間に合わなかった。

「ホントに気絶してんのかなあ？」

猿飛が俺の顔を覗き込んできた。左肩は痛い問題ない。この距離ならいける。

「あたあああああああ！！」

起き上がると同時に猿飛の顔面を蹴り上げる。猿飛は油断していたようで、俺の攻撃をもろに食らった。続いて体勢も整っていないところを後ろ回し蹴りでダメ押しをかける。今回は腕が痛いので足技が中心なのだ。

「クロス！」

「おう！」

俺の声に対応してクロスが飛んできた。

飛んできたというのは比喻ではなく、クロスの背中に生えている一對の翼を存分に活用して空を飛んでいる。体格に比例してその風圧も凄まじく、俺は立っているのもやっとだった。

しかし何とか風圧で倒れることもなく地面ぎりぎりを飛んでいたクロスの前足に捕まることに成功した。ただし右腕しか使えないの

で相当厳しいが。

「速く背中まで上って来い」

「片手じゃむりっす」

「ちっ……じゃあいいや、ちよつと目えつぶつとけ」

「え？　なんで……わあああああ！」

思いっきり空中に投げ出された。恐らくはクロスのその巨大な前足を大きく振って俺を空中に放り投げたのだろう。そんな場面じゃないが浮遊感が気持ち良い。

「ってやっぱり恐い恐い恐い恐い！！」

目前に広がったのは100m程下に見える地面。このまま落ちたら間違いなく死ぬ。

と、ここで俺の視界が一面の緑から灰色のそれに変わった。

つまりは見えていたのが森からクロスに変わったのだ。

「……ぼふっ」

「着地成功だな」

「おっ……ありがとな」

何とかクロスの背中に着地を成功させた俺はあたりを見渡す。勿論そこは空中な訳であたりに鯉？の姿も猿飛の姿もない。

「とりあえずもつと上空だな。下から俺達の姿が見えなくなるまで落ち着いたら下に降りてマリアを鯉？の妹を探そう」

「戦えよ。何逃げてんだ」

クロスのそんな声を俺は黙殺する。無理だろどう考えても。元々

俺はこういうの趣味じゃないんだって。あんなデンジャラスな奴等に対抗し得る手段なんて持ち合わせてねーし。

「そーだぞ蛇又！ 何逃げてんだ！」

さっき聞いたような声が聞こえた。

聞き間違いであることを心の底から神に願いながら振り向けば、やっぱりそこには鯉噛がいた。

しかしここは空中。どうやってそんなところに存在できるかと聞かれれば、鯉噛もクロスと同じ様な翼を背中から生やしていて、それを飛ばたかせることで中に浮いていた。

「つーかマジでなんなんだよお前の能力！ 訳わかんねぞ！」

最初は100本の刀だった。次は翼だ。しかも同じ能力であろうと思われる鯉噛妹は手を刀にしたり壁を造ったりしていた。訳分からん。

「教えてやろうか？」

そこでニヤリと笑うのはやっぱり鯉噛。聞きたくないかも。

「お前の能力が『奪取』だとするならば」

そう言いながら鯉噛は両手を広げる。なんかする気だ。

「俺は『創造』だ！」

視界が黒くなった。一瞬それは何か分からず思考が止まってしま

うが『それ』がこちらに向かってきたところで俺の脳はまた仕事を再開する。

ここまで近づけばもう分かる。

黒い壁かと思ったそれは、おびただしい数のミサイルだった。

「逃げるぞクロス！」

【第四十六話】 上！ 下！？

「クロス、上えええええ！」

俺の声にあわせてクロスが一気に上昇する。そのスピードは半端ではなく、しつかりクロスの体毛を握っていないければ空中に放り投げ出されていただろう。

しかし当初の目的であるミサイルの回避は成功したのでよしとする。

「おいおい、その犬ところどんだけ速いんだよ。こっちはミサイルぶっ放してんだぜ？」

「いやいや、お前の能力の方がびっくりだよ。なんだよ『創造』って。完全にチートじゃねえか」

自身の放ったミサイルを軽く追い越し鯉嚙が言う。口には出さないが相当驚いている。

速すぎだろお前！

因みに今の状況はかっこよく対峙しているわけではなく、俺たちが逃げて鯉嚙がそれを追っている状況。ううむ、クロスとほぼスピードが変わらないとはなんたることだ。

「ああ、そうだぜ？」

そしてあっさり認める鯉嚙。

「っていつかそもそもお前も相当速いじゃん」

「だってその犬と同じ翼を作ったんだから当たり前だろ？」

いやいや、同じ材質でも筋肉とかでまたスピード変わるでしょうよ。

でもまあこんな変な能力なのだから何が起こっても不思議じゃないのかもしれない。

そして状況は最悪だ。

相手は『体力』さえも作り出すことの出来る規格外の人間な訳で、対抗する手段が全く思いつかない。強いて言うなら奪取魔法だけど、今から魔法式を書こうとしてもどんなに頑張っても二時間以上は掛かってしまう。多分その間に死ぬ。

「ホクロ！ どうすんだ！？ だんだん距離が詰められてるぞ！」

「分かってる！ ちょっと待ってる！」

俺はクロスの声に答えながらもそのクロスの背中に自分の血で魔法式を書いていく。勿論奪取魔法ではなく、普通の魔法だ。これも最低1分弱は掛かってしまうが。

「爆破魔法石悪問答」

見た目と音は派手だが殺傷能力は低い所謂花火魔法。全然綺麗じゃないけど。これのおもな用途は大体目くらましだ。で、今回も例に漏れず目くらましとして使う。

「クロス！ もっと上！」

その目くらましをしている間にクロスに指示を出す。

本当は隠れるなら下の森の中とかが適してるのかも知れないが、そんなありきたりな隠れ場所だと簡単に見つかってしまう可能性が

ある。それに普通の飛行能力者ならまだしもクロスは本気を出せば音速レベルで移動できる化物だ。目くらましの時間だけで充分に視界の外まで消えてくれることだろう。

「クロス！ 本気で飛べ！」

だから俺のこの指示は、多分間違っではないと思う。
いや、間違っただけだね。

クロスが今まで本気で飛ばなかったのは何故か。
勿論体力の面とかもあるだろうが、一番は俺に気遣ったことだ
っただろう。

だってそんなに速く飛んだら俺がもたねえもん。
クロスは賢い子で、だからこそあんなデットヒートの最中でも俺
がしがみ付いてられるギリギリの速さで飛んでいたのだろう。

でも俺がいけなかった。クロスの狼をはじめとする犬科の動物は
大きな音に過剰に反応することが良くある。かつては戦場にいたと
いうクロスも、ここ何十年かはきつと森の中で平穩に暮らしていた
ことだろう。

それでいきなりあの爆破音だ。
人間でも驚く。

それでも俺の声をすっかり聞いて、上昇したことは流石としか言
いようがない。

ただ、本気を出しちゃった。
これも俺が言った事で、全くクロスに非があるわけじゃないし、
寧ろ責められるのは俺の方なんだが、まあ結果で言っと。

手、離しちゃったよね。

大体見積もって高度おおよそ300m。

東京タワーと殆ど変わらない高さから落ちて、人間って助かるの
だろうか？

助からねえよなあ。

蛇又北路16歳。 お父様、お母様、先立つ不幸をお許してください。

段々薄れ行く爆破の痕と、もう殆ど見えないクロス姿と、少し後
ろを向けば後100m程に迫っている地面を見ながら俺はそう思っ
た。

【第四十七話】 狼ヴァージョン

「……………うはっ」

絶賛落下中の俺に背中に衝撃が。確かまだ地面までは50m程あったはずだ。どうやら何かか背中に当たって落ちている俺が急停止させられたらしい。頭の中で、何があったんだろう？ が瞬間的に40回ほど駆け巡った。

でも駆け巡ってるよりも見るほうが結果としては断然早いだろう。見た。

「うお」

「大丈夫か？ ホクロ」

久しぶりのご登場。正偽だった。しかも狼ヴァージョン。

言いながら正偽自身も地面に着地。ズン、と低い音がしてこれで俺が落ちてたらどうなっていたんだろうと心の隅で思ってみる。

因みに今、正偽のお姫様抱っこされてる状況。まあ状況が状況だったから仕方ないけど結構恥ずかしいな。

「まだ早朝で力の半分も出なかったが、何とか受け止められて良かった。怪我は無いかの？」

「ああ、正偽が受け止めてくれたのか。ありがとう。怪我は大丈夫だ……………よ……………」

俺も立ちながら答える。でも背中に違和感が。あー、これ、なんかしたな。多分骨折までは言っていないと思うけど。

まあどうでも言いや。そんなことより今の正偽のフォームを紹介させて欲しい。前に紹介したかもしれないが、どうしても言いたい。

言わせて。正偽超カッコいい。

身長目測で2m。顔はみんなが想像する狼で充分だ。体中真っ黒な毛で覆われており、指は五本、それぞれに綺麗ではないが大きく鋭い爪が常備されている。

しかも今は前回と違いかなりゆったりめの服を着てるのか、今の狼ヴァージョンの正偽のぴったりの服装だった。

「しかし……これは一体どういう状況なのだ？」

正偽が言いながら首輪をして元の人間に戻る。ああ、もったいない。

「状況って、まあ鯉嚙達が来て、マリアさんが助けに来て……あれ？ そういえば正偽、どうしてお前がここにいるんだ？ お前には何も言っていないはず」

戦っていたことは勿論、鯉嚙やマリアさんたちの存在自体知らないと思う。

「先刻、五月雨殿から電話があったのだ。ホクロがピンチそうだから助けて欲しい、と」

「ああ、成る程。それで俺の部屋に来て、あの魔法陣をみて、この場所まで来たってことか。なに？ ここってそんなに近い場所だったの？」

「いや、隣県ではあったが」

県を跨いで走ってきたのか。恐るべし、狼パワー。

「それで今はどう状況なのだ？ 詳しく説明して欲しいのだが」

「今言ったじゃん」

「いや、アレでは何がなんだか……」

「そお？ まあ詳しく言うとな、今味方が俺と正偽を含めて4人と1匹。んで敵さんが五人。こっちの味方はパツキン女子だ。んでもう一匹は本物狼」

「すまん。分からぬ」

俺に説明の才能は無いらしい。

「まあ敵と味方の人数が分かったからそれでよい。それよりホクロ、これを」

「うん？」

正偽の手元を見れば、服だった。しかも俺の。

「これを着ろ」

「？」

「ぬし、まだ寝巻きではないか」

「あ、そうだった」

正偽から素直に服を受け取り、その場で着替え始める。まあ誰も見てないし良いよね。

なんて思ってたけど、そういえばここにすでに10人近くの人間がいることを忘れてたり。要するにすぐそこの茂みから物音が聞こえた。動物だったら良いけど。

「誰だっ！」

それに真っ先に反応するのは勿論正偽。さて、一体茂みの人物は誰だったのか。そして俺たちはこの後どうなるのか。次回へ続く。

……あ、無理？ だよな。

俺も出来るだけ速く着替えて、正偽のほうへ向かった。そこには正偽の他にもう一人の人間が。味方だったら嬉しい。でも敵でも二対一だし何とかなるか。さて、誰だ？

「マリアだった。」

「うん、敵か味方が微妙なとこのがきたな。」

「違う違う違う何も見てない何も見てない何も見てないごめんなさいごめんなさい！」

「しかも何故か顔が真っ赤だった。」

「おい、今時男子の下着見たくらいでどんな反応だよ。中学生だってそこまで反応しない。200歳なのにな……。」

「敵か」

正偽が静かに言い、首輪に手を掛ける。

「ちょ、違う正偽！ よく見ろ、さっき言った味方の外見と一致するだろ！」

「む、パツキン女子」

「消し飛べっ！」

正偽が落ち着いたと思ったら今度はマリアは敵意丸出してマシンガンを構えていた。ってあれ？ マシンガン？

「おいしいい！ マリアお前一体それどこから出したんだ！？」

「ポケットだけど？」

「お前はドラえもんか！」

初めて見た……四次元ポケット。でもマシンガン出すドラえもんなんて嫌過ぎる……。

「つか200年生きてて、魔法連盟でもトップの魔法使いが化学の力使っつてどうなんだろう？」

「つていつか北路ちゃん、コイツ誰？」

「火之迦具正偽。俺の友達で魔法使い。頼りになるぞ。頼りにしろ」「正偽だ。よろしく」

そう言っつて正偽は手を出した。恐らくは握手を求めたんだろう。それに対してマリアは勿論

「飛び散れ不良」

その手を払った。

「おいおい、仲良くしろや。」

「ホク口、ちよつと確認だが、こいつは敵で良いのだな？」

「違う違う。攻撃しちや駄目だぞ。つていつかマリア、お前赤鷹兄妹はどうしたんだよ？ もう突破したのか？」

マリアは赤鷹兄妹によつてどこかに連れ去られていった筈。マリアがここにいるということは、まあ言わずもななかも知れないが。

「当たり前よ」

「ああ、やっぱり。」

「早かったな。弱かったの？」

「うん。というか北路ちゃんはあたしのことを誰だと思っつてるの？」

「敵？」

「北路ちゃんまで酷い！」

いや、お前が今まで俺にしてきたことを思えばそこまで酷いとは言いきれないと思うんだけど。

「でもまあそう言う訳だから安心して」

と、マリアがそう言った瞬間だった。

「「「つつつ！！」」」

全身に急激な痛み。何が起こったのかもわからずに俺や正偽、マリアは倒れてしまう。

駄目だ。視界がぼやけてきた。でもそれでも頑張って状況を判断しよう。

倒れたことで分かったことだが俺たち三人の体にそれぞれ何か金属で出来た細い棒のような物が貫通していた。痛みの原因はこれか。完全に敵の攻撃だろう。誰の能力かは知らないが大した力だ。一瞬で俺たちを制圧してしまった。

でもなんで俺だけやけに棒の数が多いんだ？ マリアも正偽も5、6本なのに俺は体感10本以上刺さってる。なにこれ、嫌がらせ？ いや、まあ嫌がらせの範疇を軽く超えてるけど。

「蛇又。君への攻撃が圧倒的に多いのは君がそれだけ脅威と言っただよ」

近づいてくる声、つまりは赤鷹燕がそう言った。

「まあ普通5本も刺されれば動けなくなるけどね」

もう一人の声、つまりは赤鷹雀がそういった。

……おい。

「あれえ？ どうしてあんたら生きてるのかしら？ たしか直径400mの隕石をあんたらに向かってぶつけた筈だったけど。もしかして幽霊？」

俺が声をあげる前に MARIA が口を出した。どうやら仕留めたと思っていたのは MARIA だけだったらしい。つーかお前そんなことしたのか。

「ふふ。僕らの能力を忘れた？」

「瞬間移動……そこまで移動範囲広がったのね」

「そーゆーこと。悪いけど殺すからここで死んでね」

燕のほうは小型のナイフを取り出した。普通ならあまり脅威と感ぜないそれは、今の状況では確実に俺達の命を削り取るそれだった。

「させるかつ！」

動いたのは一人だった。俺達は痛みで動くことは出来ないし、赤鷹共は驚きで動くことは叶わない。

「せいっ！」

「！」

全身に鉄棒が刺さっている状況で我らが正義の体现者、正偽は赤鷹燕を一瞬でぶっ飛ばした。

「我輩の目の前で我輩の友人をこれ以上傷つけることは貴様らには決してできぬぞ！ なぜなら今ここに立っているのが他の誰でもない、我輩、火之迦具正偽だからだ！ 降参するなら許してやろう！ 逃げるのならば見逃してやろう！ しかし立ち向かうのであればそれなりの覚悟は持てよ？ 我輩は今怒っておる。この全身の痛みなど全く感じぬほどに！ 我輩の体が傷つけられたからではない！ 卑怯にも不意打ちを貴様らがしたからではない！ それだけであれば我輩の心はここまで滾ってはおらん！ 貴様らのような者にこのようなことを説くのも億劫だが仕方ない。殺すなど簡単に言うなああああ！！」

それは確かに正偽の心の叫びだった。両親を殺された彼にとって、その言葉は無視することは出来なかったのだろう。

「あ、何だお前。熱くなって。いーよやってやろうじゃないか」「そうか。助かった。見逃してやるとは言ったもののそれはあまり進んでほしいことではなかったかなの」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8531o/>

ダッシュ！！

2011年10月21日01時59分発行